

川柳塔

創刊大正十三年
通卷九〇一號



日川協加盟

No. 901

900号記念川柳大会特集

六月号

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。広告のスペースと掲載料は、左記のとおりですので、よろしくお願い申し上げます。

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

① 1/3頁 六、〇〇〇円 ③ 3/4頁 一二、〇〇〇円

② 半頁 九、〇〇〇円 ④ 一頁 一八、〇〇〇円

▼原稿締切 6月23日

〒545-0005 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

予告

第八回 川柳塔まつり

とき 10月6日(日)

ところ アウィーナ大阪

◎詳細は後日お知らせいたします。恒例によって
同人総会・各賞発表・記念句会・懇親会を開催
しますのでふるってご参加下さい。

川柳塔社

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023
TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484
東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021
(日本橋川村ビル4F)
TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159
<http://www.koki-envelope.com>

四月・五月

河内天笑

五月四日に開催されました「川柳塔九百号記念大会」には全国各地、また各柳社から予想を上回る多数のご参加により、大盛會にして頂きました事を報告し、改めてお礼申し上げます。また、川柳大会に先立つ午前十時からの臨時同人総会では、昨年十月の同人総会で一部継続審議となっていた案件について、その後慎重に検討を重ねた結果を報告申し上げたところ、満場一致の賛同を得られました。これにより「川柳塔」の今後への足固めが出来たことは大きな慶びです。

記念大会の翌日（子供の日）はからりと晴れ上がりました。川柳塔碑見学と高野山散策には、新相談役の小林由多香氏、副主幹の波多野五楽庵氏をはじめ24名で初夏の高野山を散策いたしました。毎年十一月に行われる合祀祭では美しい紅葉を堪能出来ますが、このたびはがらり雰

囲気もかわり美しい新緑とつつじ、しゃくなげ等初夏の花々に迎えられ、楽しい思い出の一頁を頂きました。

（詳細は今月号特集欄に記載）

地球温暖化の影響なのか、この春はどの花も一週間ほど早目に咲き、川柳復活二年目となることしの「造幣局桜の通り抜け」も去年より四日早く四月十二日からとなりました。その初日に東大阪カルチャー教室の皆様と一緒しました。去年の花は「紅手毬」でしたが、ことしは「蘭蘭」。花の盛りは過ぎていましたが、散りゆく美しさと艶やかな葉ざくらの見事に魅せられた今年の通り抜けでありました。川柳塔社の同人諸氏の入選句を次にご紹介いたします。

通り抜け今年も老母の手を曳いて 川島諷云児
花もよし人もきれいな花の道 吉岡 修
雨もまたよし相合傘の通り抜け 吉川 寿美
花吹雪リユックに受けて祖母帰る 北野 哲男
通り抜けしほし不況の世を忘れ 田口 穰一
よう来たね桜が声をかけてくれ 安永 春
車椅子しほしやすらう紅手毬 岸野あやめ

毎年五月十二日にはきまつたように花を咲かせるわが家の庭のキウイの花。ことしは八日も早く五月四日に二輪の雌花が咲いていました。川柳塔九百号記念大会の朝です。その二日のちには殆ど満開で大きな熊ん蜂夫婦が何組も花から花へとぶんぶん羽音を立てています。

五月六日の日没直後の西の空に、水星、金星、火星、木星それに土星と五つの惑星が大集して二十五度の角度の中に、五つの惑星が全部見える事が出来る天体ショーがくりひろげられると聞いて、わくわくしましたが生憎のくもり空。次に同じ天体ショーが見られるのは平成四十年とか。その頃は私も星の仲間になっているかも。

四月号のこの欄で「血液さらさら」をご報告致しましたところ、たくさんの方の間から励ましのお手紙やお電話を頂戴し、とても感激しました。お気遣い下さいました事を深く感謝し改めて体調の維持に心すべく励んで参りたいと思います。



座右の句

息子には話しておこう川の幅

(智子)

私の句

許す気の胸に涼風ときもの

中川 楓

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 四月・五月

路郎イズム

川柳塔(同人吟)

自選集

水煙抄

麻生路郎物語(6)

■図書紹介『橘高薫風川柳文集』

愛染帖

秀句鑑賞

同人吟
水煙抄

誹風柳多留二四篇研究

42

河内天笑	……(1)
奥田みつ子	……(2)
河内天笑選	……(4)
板尾岳人選	……(56)
東野大八	……(81)
小島蘭幸	……(84)
波多野五葉庵選	……(88)
竹内紫鏑	……(86)
今愁女	……(91)

路郎イズム

奥田みつ子

今回「川柳塔九〇〇号のあゆみ」を書くために何度も大阪市立中央図書館へ通った。私はまだ川柳を始めて間もない昭和五十八年頃、橘高薫風先生がこの図書館へ資料調べに通われていて度々お供した。その頃は古い建物だったが、平成八年に建て替えられて現在には立派な機能的図書館に生れ変っている。

「麻生路郎寄贈」と判の押してある創刊号から四六〇号までの「川柳雑誌」を台車に載せて自分の席まで運ぶと快い緊張感を覚える。終戦後、復刊の二四〇号から二七一号までは頁数が少ないので、三十二冊を合本してあるが他は大体一年毎に合本されている。その合本も古くなっているのので、バラバラになっている何冊かは紐で縛ってある。

創刊号の「誤れる川柳観を排す」の中で、「一旦川柳の味を知るやうになりますと死ぬまで忘れることが出来なくなるのが私達の川柳の持っている特色です。それほど私達の川柳にはチャミングなところがあります。それに貴方のお考へになつてゐられるやうな奥の浅い、薄っぺらなものではないのでありま

茴香の花

「譲る」

宮西弥生選 … (94)

一路集「欠ける」

福原悦子選 … (96)

「途中」

八田 敏選 … (96)

初步教室「増える」

徳山みつこ選 … (97)

「川柳塔」九〇〇号記念川柳大会特集

吐田 公一 … (98)

中田たつお・森山盛桜・太田 昭・岩切康子

(100)

■閑人閑話 川柳の本―図書

田中正坊 … (124)

里 小路さんを悼む

高田 博泉 … (125)

各地柳壇（佳句地十選／榎原公子）

(126)

柳界展望

(141)

六月各地句会案内

(142)

■編集後記

楓楽・朱夏 … (144)

座右の句

沙羅双樹わが結界にひそとあり

(千代)

私の句

騒音を飾にかけてみたくなる

徳田 ひろこ

す。私達の主張する川柳の一句は一冊の長編

小説よりも優れてゐる場合があります。(略)

私に言わせれば川柳はその一人一人の人格の發露であり、その一人一人の歴史であります。率

ては社會の縮圖であるとも云へます。川柳一

句は個人の作であつても、その個人の作品の

中に社會を見ることが出来るからです」と眞

實の川柳を知つて頂くのが『川柳雜誌』發刊

の主な原因と路郎先生は力説されている。

古稀祝賀川柳大会の「嚴選の意義」と題し

た柳話に「川柳という大建築物を建てるには

釘一本、鋸一本までも嚴選せなければならな

い」また「川柳の隣には俳句があり、詩があ

り、短歌がありますから、まごまごしている

と川柳だけが短詩形文学からおきざりにされ

てしまふかも知れないのであります。だから

どうしても嚴選に嚴選をして、川柳をより秀

れたものにしなければならぬのであります」と

と一句一句の大切さを強調されている。

終刊号には「ありし日の思い出を語る」と

して薫風先生の司会で麻生霞乃・清水白柳・

西尾菜・川村好郎・戸田古方の諸氏の座談会

があり、路郎先生が句の上では一步も譲らず

妥協されなかつたことや、雜詠の選の確かさ

信頼感などを口を揃えて語つておられる。

『川柳雜誌』四六〇冊のこく一部を拾ひ読み

したのだが、誌面を貫く路郎イズムに圧倒

され、自分の不勉強を恥じるばかりである。



河内天笑選

弘前市 櫻庭順風

颯爽として威厳ある厳父燧

悠揚として円やかな慈母 至仏

かれを仰ぎこれを眺めて尾瀬ヶ原

待ち焦がれた季節に出合うザゼンソウ

みずみずしい清楚な気品ミズバショウ

ニッコウキスゲに埋め尽くされる風物詩

倉敷市 小野克枝

片手差し出せば両手で返す愛

一芸二芸積んで出世に遠く居る

よく叱る医者と心を結び合う

飾らない母の可愛い国なまり

追いつくと逃げるあしたを信じ切る

半分は嘘で話が面白い

鳥取県 ささえきやえ

杏子の花が好きでツグミがきてくれる

こごぜんまい届くえにしのありがたや

もらったら倍返しせよ亡父の声

タンス長もち捨てるに惜しい服しまう

水琴窟の音色うれしい春の宵

一本の樹がふるさとに呼びよせる

米子市 木村富美子

ライバルの花火にとても近づけぬ

毒になり薬になって生きている

飛ぶ鳥を落した人が的にされ

鳥のように初めて空を飛んだ旅

何時からか雀起しに來なくなる

鳥さえ可愛可愛と子を育て

檀原市 居谷真理子

一人旅和合の岩を横に見て

幸せな仏だ海が見える墓地

過疎の村 産廃阻止の手書き文字

しがらみに土産を買って帰る旅

黄砂降る恋も桜も疲れ気味

葉桜で男ばかりで飲んでいる

河内長野市 加島 由一

探すのをやめたら会えた青い鳥
恨み言逢うと言えない人という
振り向かぬ背中が憎い時もある
一線を守り夜桜見て帰り
疲れたら枕にもなる広辞苑
前触れもなく腰痛はやってくる

東大阪市 谷 口 義

偽仏を拜んで帰る花の寺
イヤリング一つ落した御堂筋
人間のすることだから妻もする
秀才でないから何度でも聞ける
マイペース扱いにくい女です
差し向い別にうれしいことはない

大阪市 西 出 楓 楽

よよと泣くぐらいの芸は持つている
古傷が徐々にいい味出してくる
風薫る鈍行の旅したくなる
余生とや消化試合にしてならぬ
しゃべるほど器小さくなつてゆく
ときどきは転んで周りうかがおう

羽曳野市 三 好 専 平

ラッパ吹く人は歩兵を顧みず
ほめことばたつたひとつで前を向き
みぎひだりあてにならないことばかり

桜ちる池にも亀の恋があり

大根の花に浄土の夢をみる

こんにくがだんだん好きになつてきた

堺市和田 つづや

夢のあるうちもう少し親不孝

妻の檄猫も私も正座する

花の雨 恋も不首尾に終りそう

神仏気やすく味方してくれぬ

風邪やない君が眩しい人やから

子がいがみ合うほどお金残したる

富山市 舟 渡 杏 花

落花しきりもう再びのない人と

わたしだけに素顔を見せるカメレオン

まさかの時の鬼がうたたねばかりする

しほりたてのレモン男を振り向かす

仁王様の脛のあたりのかすり傷

法灯を継ぐ兎に高し鯉のぼり

西宮市 西 口 いわゑ

明るさがとりえと自分なくさめる

わくわくとついて来たのにコーヒー館

音もなく脳細胞が減つていく

暗号も世辞も通じぬ頑固もの

生きるのも鬼になるのも難しい

鏡の中の女をなだめすかして

西宮市 門谷 たず子

赤穂御崎花が主題のカメラアイ

花万朶小さな恋を探そうか

瀬戸の海からずんずんと陽が昇る

潮満ちて小さな疵は隠される

夫婦老いても夢売りの来ない街

すがりつく薬一すじにある情け

三田市 北野 哲男

初夢の後遺症なる宝くじ

盃に忍の字注いで流し込む

尿パット要る身で介護しています

遺影には肩の力を抜いた顔

茶髪したヘルパーさんが来てくれる

耳打ちが尾鰭をつけてすぐ戻る

尼崎市 長浜 澄子

ライバルのボディーブローが効いてくる

神さまにも二重感情線がある

あれもこれも洗い流して桜散る

風はピンク春のハートはヴァイオリン

何年経つだろうか近況書きながら

鼻折れたビノキオも居る地下の街

京都市 高島 啓子

マジシャンの箱から鷹は出てこない

演技派を目ざしてからはとる髪

レブリカの鳥獣戯画を見て帰る

不眠症無縁であらう山男

オムライス母の乳房のように盛る

夕食の話題は腹の立ったこと

箕面市 岩津 ようじ

時の人悪党らしく描く漫画

朝掘りの筍うまし老いの幸

人生の時差惚け老いの習いごと

医療費が二十万やて市の通知

気は心ビタミン剤を飲んでみる

鉦の音に線香の灰ポロリ落つ

高槻市 西谷 治三郎

咳払いしてからトイレに立つ夜中

禁酒禁煙してもお金が貯まらない

内助無いほうが男は出世する

電話来る用件聞かずしゃべりづめ

好きだとは言ったことない五十年

税務署の呼び出しあった頃が華

豊中市 安藤 寿美子

KLM搭乗私の蘭学事始

海よりも低いところに町がある

春の夜のワインは皆でにぎやかに

いく度も乾杯をするよい出会い

春愁にしずかにワイン沁みてくる

孫五人それぞれ愛すべき個性

吹田市 山本 希久子

濡れそぼる記憶六月の或る別れ
言い過ぎた悔い曇天のなお暗し
弱点は弱点のまま傘の下
スイッチをこまめに切つて母達者
他人の痛み私の痛み雨季に入る
情報下さい銀行の選び方

茨木市 藤井 正雄

兄嫁の字で里の餅里の柿
夕陽背に週刊誌買う淀屋橋
十中八九間違いないと間違われ
碁敵に借りを返すと誘い出す
我慢して大きな咳となった風邪
鉛筆の芯丸くなり午睡する

枚方市 海老池 洋

盛り場の外れに僕の水飲み場
父の日と父は知らずに出たまんま
定年後父は仕事のように趣味
織田作に惹かれ天牛法善寺
父の背に男一匹奮戦記
人気出て努力する人驕る人

寝屋川市 江口 度

命ある限り別れをくり返す
なびく時満足してる鯉のぼり
花ひと日別れは人の定めかも

足音のやさしい子等に育てたい
忍の字を千ほど書くと風が止む
血の匂いせぬ札束があるものか

東大阪市 指宿 千枝子

バックinghamゲートを閉ざし喪中です
ビッグベン見上げれば四時五分前
ロンドン橋トルシエさんと握手した
テムズ川ベンチで孫へエメール
フリータイム所持金五六ペンス
イギリスの時はゆっくり流れ居り

八尾市 生嶋 ますみ

手抜きする今日のメニューを知るレンジ
たこやきで愛が語れるのも若さ
浪人を卒業出来たVサイン
横文字の野菜に軽い恩がある
腰痛に負けても口はまだ達者
絵画展どの額縁も競い合い

八尾市 宮崎 シマ子

故里の海はいまごろ潮干狩
ふるさとの豆腐屋の豆日本産
肉か鰯かやはり鰯を食べる老い
春雨に枯れた花芽が蘇る
ケータイを娘から貰って持てあまし
夕飯も薬も届く介護2

八尾市 吉村 一風

お祝いの重なり春をうろたえる
ふところは空っぽ世間春に酔い
気配りが良過ぎて少し勘ぐられ
いのち盛る朝のコーヒーいい薫り
ランドセルなどと言えないいい値段
肩の力抜くと笑顔が美しい

大阪市 川端 一步

介護するされる二人が軋み出す
髪染めに行ってくるわと上機嫌
横道へときどき逸れるおもしろさ
僕うどん妻は茶漬けの昼ごはん
昨日今日大型テレビ欲しくなり
国会の疑惑に老いの血が燃える

堺市 齋藤 さくら

友のあら探して心痩せていく
寝言から夫のまさか膨らます
折りに触れ受けた親切思い出す
まさかよりまたかと政治冷めてくる
賑やかに疑惑の議員並べられ
頑張った過去を支えに生きている

堺市 宮本 かりん

美しい森を恋する波の音
髪ふわり心もふわり旅に出る
爪を研ぐ猫の心情見えていたり

おいしそうなレシピ眺めて魚焼く
父さんを笑わすために倍笑う
しんみりとする歌姉妹通じ合い

堺市 志田 千代

ボクの服着た兄ちゃんの古写真
草だけを食べておりますサーロイン
お値段のわりにはうまいコロッケだ
カラオケで笑いのとれる人が好き
首かしげ名画とか言う名画みる
目出し帽ほど目立つものはない

八尾市 神原 まさと

初登校ああ重かったランドセル
産直の広告食べて見たくなる
タクシーで墓参が出来る島の春
ダメ虎が猛虎に変わる春の乱
花吹雪プランコを漕ぐ背を押す
セコムマーク貼って新築出来上がり

羽曳野市 安芸田 泰子

年寄りで見られたくない急ぎ足
自然にも苛めがあった花粉症
子育ての野良猫の目の必死なり
無記名なら本音しっかり書いておく
生きがいを探して老いのコンパクト
定年がひねもすのたりのたりかな

吹田市 太田 昭

鉛筆を削ると山の匂いする
新しい靴老妻と腕を組む
お喋りな女桜によく似合う
公園で妻と一緒に欠伸する
ベーターベンを聴くと割り箸を持つ
抽出しを開け春風と入れ替える

富田林市 藤田 泰子

教会の鐘は過去から未来から
口開けて雛が待ってる急がねば
ひとつずつ飾りを捨てて無に還る
自然林紅一点の山桜
三食昼寝幸せすぎて五月病
もう少し大人になれと風が言う

羽曳野市 徳山 みつこ

桜着て天従えた塔光る
元氣げんきと朝の鏡と手をつなぐ
真つ白な紙へ背筋がしゃんとする
冷水をくぐった和紙だから温い
九条の梓はずそうとするお化け
日本よ元氣お出しと鯉のぼり

和歌山市 福本 英子

介護保険支払うだけで済むように
MRI診てほしくないところまで
寝返りを打ってひび入る骨粗鬆

囁いてくれるとんでもない噂
世渡りの術に鬼とも仲良しに
コンビニで間に合わせます客の舌

和歌山市 吉村 さち子

人を待つポストに春の音がする
手の荒れに春を教えてくれる水
一枚を脱いだり着たり花曇り
一步引く私なりに自負があり
パイオフの話題に乘らぬ友ばかり
もう寝息百歳根つから楽天家

弘前市 福士 慕情

石ころを投げれば深い水の音
麻雀が下手で誘いが多くなる
昨日今日同じ所に居るカラス
リストラの疵を引き摺るフライパン
留守電に変えて睡魔と妥協する
剪定の枝は花瓶へ活けておく

弘前市 高瀬 霜石

長男と長女ばかりになる戸籍
刑務所とハローワークが混んでいる
吉報は朝に訃報は真夜中に
民族の数だけ違う神の顔
草原で草食む牛の美しさ
ありがたい話たいい眠くなる

弘前市 宮崎 ヒサ子

謝ってしまえば空は晴れるのに
親切とお節介との紙一重

分相応 鼓動乱れず打っている

春めく日弾む心で花を買う

春と言う響きが線を越えたがる

年追うてもう勇み足許されぬ

横浜市 菊地 政勝

バイバイとちよつと出かけたように逝き (菱田満秋さんを用む 3句)

息詰めて師の寝顔見る棺の中

柳友を育て天から優しい眼

輸入した粉で老舗がそばを打ち

今時の言葉僕の馴染めない

新しい歴史を拓くタイガース

東京都 播本 充子

桃太郎さんもニトロを持ち歩く

寝付かれず家屋の呼吸聞いている

嗅覚が時どき狂うお人好し

雷が鳴ると夫が傍にくる

生きたいも死にたいも無い百を越え

置引きに注意しましょう墓参り

竹原市 小島 蘭幸

そうですか銀婚ですか水を飲む

銀婚という歳月をいとおしむ

家族写真を一枚撮っておく佳き日

駆け足で来た金婚も銀婚も

ビクリ箱を妻に渡したことがない

銀婚という旅に出ようかなあ雲よ

米子市 澤田 千春

糸電話あせれば森につながらぬ

走れ止まれ素直な足よありがとう

どの山も深い祈りで立つている

若草に寝転び空を見ることがだ

変身し明るい彩で翔びたいな

風に話して心が楽になってきた

鳥取県 谷口 次男

正直に生きているのはホームレス

山ほどの思い出詰めた古バッグ

夕暮れの渚のロマン蟹二匹

テレビ消し静かな夜に本開く

難民に春よこいこいパンが降る

自分史が自慢史のようこのくんだり

鳥取県 新家 完司

ちっぽけな星に神様多すぎる

書く人が書けば半紙もお宝に

金借りに来たであろうに言わぬ客

助っ人に行つてやりたい国があり

にんげんが居るとカラスが寄ってくる

じつとしていてもいのちは減つてゆく

鳥取県 石谷 美恵子

反省会また反省の種を蒔き
廃校を訪えば桜に迎えられ
人事部の恐い話を聞くトイレ
半端だがとつても好きな皿がある
あんなひと好かんと嬉しそうに言い
牛乳を嚙んで飲むほど暇でない

鳥取県 西川 和子

憧れの教師素敵なおじいさん
エピソードをいっぱい溜めてある校舎
廃校を蘇らせる町おこし
野良仕事ひざの軟骨すりへらし
返答がはつきり言えぬ裏事情
ふんざりがついて二日も眠りこけ

鳥取市 武田 帆雀

竹の子の頭を踏んだアツご免
店長はどなたと問えば髭が出た
下手な字も自筆で愛を下さった
ともかくも蒔かねば生えぬ種袋
クッションにしてライバルの技を盗る
傷口を最大限にして笑う

倉敷市 井上 富子

いい人が出来た二十歳の薬指
貧しかった過去は私の宝物
掛軸の筆を讀えて茶を吸る

貧乏暇なし寸暇を惜しむこまねずみ
痴呆という染みが浮かんだ旦那様
柔軟な竹を心の隅に植え

松江市 津川 紫晃

鶯は時間を止めて喉聞かせ
お互いに灰汁取り合つて夫婦鍋
春のどか風に彩あり匂いあり
楽と苦の速さが違う砂時計
盃に少し未練な花が散る
長い髪岬に立てばドラマめく

出雲市 岸 桂子

許せない言葉にふれた冬の耳
九番もゴッホも美しい他人
晩学に今日も新語を蓄える
食いだおれ着だおれさせるコマーション
アクセルは敗者にならぬために踏む
雨女言われる人を誘い雨

出雲市 青山 久子

九回の裏にかくれていた女神
歩く度機械の軋む音がする
わけなどは知らないままの冷凍魚
ゆつくりとお椀の舟を漕いでいる
酔の中でとろりやさしくなる昆布
しがらみの波間に生きている魚

砂川市 大橋 政良

身支度をととのえて立つ向い風
そびやかす肩にむなしい風の音
ちっばけなエゴをつのらす塀の中
笑つてゐるピエロの涙見てしまふ
僕の裏ばかり見て来た影法師

青森県 西谷 大吾

世の中がどうあろうともさくら咲く
借景に岩木嶺を置き城ざくら
魂が浮かれて春の雲になる
花りんご咲いて津軽に灯が点る
この先は二度と戻れぬけもの道

黒石市 相馬 一花

死ぬ時も死んでからでも金が要る
瞑想をすれば雑念だけ残る
齒と髪が抜けて平和な顔になり
赤ちゃんと思えば介護苦にならぬ
外国人と間違えられる津軽弁

十和田市 阿部 進

振り向かずひたすら走る古希夫婦
夫婦道手さぐりで行く老いの坂
三代目老舗に新風吹き込ませ
守ろうよ子供の命と子の心
目に見えぬところに母は気を配り

弘前市 高橋 岳水

助手席のナビゲーターは妻がいい
充実へけなげな人とベアを組む
離れても共有出来る形而上
柏手を選び分けて聞く神の耳朶
同じドア閉める音にもある個性

弘前市 蒔苗 果林

りんご園君と見つけた紫野
孫十人りんご標野の五十年
八十路今君もりんごも夢の夢
一人暮し津軽お富士と恋の仲
疼く胸紅いりんごにかぶりつく

弘前市 岡本 花匠

暁の赤いお山に掌を合わせ
五十年融和にほだす夫婦みち
我が庭に雉の遊びて春うらら
蕊冷えの我に付け込む噓かな
山笑い我と山彦いきいきと

弘前市 一戸 ツネ

みちのくも花いっぱいの方華鏡
花冠オトギの国の四月馬鹿
たわむれの言葉と遊ぶひとりごと
春の日に背中乾してる羅漢さま
春風と各駅停車ひとり旅

弘前市 今 愁 女

一番に仏にあげる新茶淹れ
菜の花に初蝶はやもつれ合い
牡丹散るころも二三片うちかさね
ほうたんの蕊に痴れたか虫翔ばぬ
葉桜のみずみずしさに癒される

弘前市 須 郷 井 蛙

深さだけ測ってばかり嫁きおくれ
乱れ髪赤信号で整える
乱獲がじわじわ地球をしめつける
貫禄の腹叱られる聴診器
足早に急いで渡る黄信号

弘前市 中 山 雅 城

五周年葉主幹に畏まる「川柳塔みちのく」十五周年の追憶
演壇の大八さんの話聞く (五周年)
五周年俊平さんが一位賞 (五周年)
横浜の満秋さんも来た記念 (十周年)
初声賞薫風さんが下さった (十周年)

富山市 島 ひかる

ただ一度会ったあなたを想い出す(奥山美智子さん)
二つない命医療を信じ切る
打ち寄せる波の数だけある別れ
送葬が手順の良さですすめられ
ケイタイの絵文字にことば乱れだす

富山県 増 田 紗 弓

先生を困らせた子がわたしです
あるときは酔って忘れる危険予知
あぶないよと花がささやくちどり足
花のある路地で道草してしまふ
ゆとりあるふりでゆとりのない看護

京都府 丹 後 屋 肇

カップルと並ぶ独りのにぎりめし
賞味期限までも疑う不信心
齒に衣を着せず言うから外しとこ
産廃船帰りは特産物を積む
借金にうなされてる青テント

京都府 稲 葉 冬 葉

一日中喋らなかつた春の雨
シルバー定期若い写真を貼っておく
独学の人生観はなまぬるい
十中九まで嫁にゆずって恙無い
京橋に育ち環状線になじめない

京都府 都 倉 求 芽

ピンハネショー主役は日替りとござーい
生産地自由に変えているラベル
はつきり言ってカワイイッしか知らぬ
一番近くて一番遠い空が好き
拝観料ライトアップで花いじめ

亀岡市 井上森生

花吹雪無心の老母は車椅子

関西にドラマ創るか強いトラ

小泉も星野もしかと掴む人

新緑の優しいパワーが身に満ちて

八十兆ほどの身体の細胞(セル)の数

横浜市 山下省子

携電で親子の絆繋がる

前へ習え学校ごっこ祖母曾孫

踊り場で言い訳を練る午前さま

しゃかりきに生きてゆくのは止めました

失態を試行錯誤とはぐらかし

横浜市 田中笑子

歌声の甘さ聴けない淋しさよ

ぐい呑みをいとおしく持つ白い指

無念さを残す旅立ち惜しまれる

豆腐売りラッパの音が風にゆれ

紺色が入社の朝をうめる駅

横浜市 保田絹子

和菓子屋の春色について買われる

筋書きに入れてなかったとぼつちり

衣着せぬ言葉に耐えて技磨く

新人に奥の深さはまだ秘密

仲のいいところを見せれば嫉まれる

横浜市 小野句多留

究極に残る食い氣に感謝する

はつきりと言わず氣をもむ女偏

今足したおでんの汁で待たされる

どちらにも傷にならない薄い恋

最終便見過し今日が去って行く

横浜市 清水潮華

遺志をつぐ船出海路の日和待つ

この先は天運肩の荷を下ろす

一夜明け右脳の動き取り戻す

幾度の転機に土性骨座り

運送屋ブライバシーへ目を伏せる

川崎市 和泉あかり

灯明に威儀を正したおついたち

屋上の鳥居を拝む新入社

熱すぎる言葉諫めて距離ができ

年輪が気丈の棘を抜いていき

桜鯛 酒はやつぱりやめられぬ

愛知県 早川盛夫

木曾谷を素通りさせぬ五平餅

透き通る水にどきつとさせられる

新聞を見ただけなのに腹が立ち

セールスへお茶まで出して騙される

寒いから歯を磨くのは止めとこう

可児市 板山 まみ子

大阪府 初山 隆盛

定年の夫をあやし春休み

ゴミの日に母の着物を出す勇氣

基礎の基礎身につかぬまま五日制

何もかも急ぎ足です花便り

三姉妹お墓は買わぬことにする

滋賀県 中 宗明

大阪府 米澤 俣子

偉いぞと転んで泣かぬ孫を褒め

青葉萌え早乙女の背をつばめ舞う

新幹線別れの言葉手話となる

家族風呂妻に感謝の背を流す

定年後体調維持に四苦八苦

さいたま市 八田 敏

大阪府 澤田 和重

風^{ふつと}渡野の地名に負けぬ空つ風

菊芽挿し今年の夢をふくらませ

介護する者へも老化加減せず

油切れしたか五体の軋む音

民を見ず揚げ足ねらう永田町

静岡県 藪田 獏 杏

大阪府 前 たもつ

網棚に土産忘れて春の旅

無人駅誇らしそうに桜咲く

手のうちを知り尽くしてる今日の敵

清らかな空気桜のいさぎよさ

バス停で早くも日傘畳んでる

散華する姿をさくら舞っている

絵はがきの滝のひびきに恋の音

メリハリをつけたパンチで恋のジャブ

君恋し高ぶりだしたオクターブ

老いてなお夢は少年合唱団

生きている今日という日に深呼吸

年金で満たせるほどの小さい夢

さくらまつり来ぬまにさくら散りました

嘘つかず聞かずにすんだ四月馬鹿

好きなこと好きなだけして日が暮れる

死ぬ時は裸お金は貯めぬ主義

核心をわざと外した思いやり

すばらしい弔辞に拍手したくなる

前置きが長いお金のことらしい

定年を区切りに老いが加速する

故里の景色に残る千枚田

わが生家卒寿の母に支えられ

都心一年市長に文句一つあり

薬捨て自己療法で生きている

ここまで来れば楽しみながら橋渡る

大阪市 神夏磯 典子

玉子焼ふんわりやけて仲直り
善玉菌作る野菜を食べている
あちこちと飛んだ日憶う籠の鳥
金勘定おおらか時間には厳し
銀行は一時預けの避難場所

大阪市 鶴田 遠野

禁酒禁煙荒行に立ち向かう
不惑の恋が遮断機をくぐり抜け
リストラを知らずに眠る名刺入れ
春眠の恨み承知で鳴る時計
極上の安らぎくれる妻の笑み

大阪市 津守 柳伸

言い訳七色紫陽花寺の待ち合わせ
言い訳は絶対効かぬ信号機
言い訳の出来る甘さをうとまれる
言い訳をした傷口が塞がらぬ
言い訳の咳同情を乞う電話

大阪市 板東 倫子

ひとまねの人生私は九官鳥
本四架橋何と大きな無駄づかい
頼んまつせ優勝！神様星野様
敬老パス御辞儀する人しない人
楽に生き楽に死ぬます無位無冠

大阪市 小林 周信

付き合いは北で済ませて巢はミナミ
盛り場に昔のままの駐在所
さわやかに理想の言える他人事
応接間見せる角度にある魚拓
百葉の長に尾を引く副作用

大阪市 町田 達子

西の丸庭園淀君も居そう（大阪城）
花煙上げて桜は人を待つ
彼岸会に息子と詣る久し振り
二条城あたり緑が美しい
立体絵巻に時代錯誤の一刻を

大阪市 小糸 昭子

騙る者だんだん檻樓が出てきます
この腕にぶら下げた子も遠くなる
コマーシャル踊らされてる視聴率
党離れ名も無くなりて過去の人
酒飲んで飲まれて今朝の恥ずかしさ

大阪市 鈴木 トヨ子

見つめられ優したくまし野辺の花
新社員センス良いので期待され
つつましく生きてブライド捨てられぬ
幸せはおんぶした子に背負われる
趣味多く金と暇とが空回り

大阪市 中澤伽羅

間違わず北斗七星だけは指す
他人ごとと気楽に見てるワイドショー
飾りものみんなはずして孫を抱く
うす味のあとは山椒で締め括る
夫には服の値段は内緒です

大阪市 松尾柳右子

背景の花に負けないファッションで
思いつきの詰まる傘さしお買物
アジサイに見る団結の美しさ
ウォーキング夫と歩いて風邪をひき
もう尾瀬へ歩けぬ膝とあきらめる

大阪市 津村志華子

留守電に母の小言が入ってる
老いらくの夢を描いてる花の下
さわやかな森で心もリフレッシュ
亡母蒔いた新芽つぶやく小さい庭
粗衣粗食貧のくらしで満ちている

大阪市 奥村五月

成金になって帰ると歩の巣立ち
名シェフも頭を下げる母の味
不況にも不思議ゴミだけ増えている
はんやりに見えて逃がさぬ金儲け
諍いの後で夫婦で酌むお酒

大阪市 玉置英子

五百年先の材木槻植え（清水寺）
昨日より緑色増す木の芽立ち
大木を夢みて若い桜咲く
幼稚園の遠足私を抜いて行く
同い年なのに親友若く見え

大阪市 津守なぎさ

エジプト展クレオパトラが蘇る
血糖値たしかめおうてグルメ旅
お彼岸に桜タンポポ競う墓
ディズニールランド子供にかえるおばあちゃん
自立する門出ピンクの調度品

大阪市 安達はじめ

最後には勝つ気で亀の第一歩
仲間割れ余計な事の喋りすぎ
切り捨てた尻尾ひっそり生きていた
毒舌で心の弱さカバーする
忠告が勝ち気の耳を通り抜け

大阪市 本間満津子

元気な声やそう口だけは達者でね
新しい義歯作ろうと決意して
こんなもんや自然の老化防げない
プラス志向と自認してるがほんとかな
桜は過ぎてやさしく静か花水木

大阪市 川久保 睦子

湯上がりにジョッキーパイ風という

楽になりましたは悲しい別れ

ジェラシーをシュレツダーにかけ膳につく

しらふでは出せないものがこぼれ落ち

欲深い女に似合う彩ガラス

大阪市 長谷川 会美

喜びをはこんで来ますこのとり

田沢湖に竜を夢見る辰子像

想い出のりボンで飾る孫の服

傘忘れしやれてみました春雨と

うすうすと感じていたかお邪魔虫

大阪市 榎本 日の出

ひとときを水琴窟の澄んだ音

手作りの料理に飽きて牛丼屋

どの花も咲く喜びを見せてくれ

泣き顔を他人に見せる花粉症

パソコンを同時に習う三世代

大阪市 渡部 さと美

国会にまだ吠えている古狸

豪邸の建替えやはりペイオフか

深目帽会釈をされて貴女だれ

USJサメ見た後は孫の守り

藤牡丹いっち可愛い野のすみれ

大阪市 中田 あい子

出来ちゃった婚聞いて喜ぶ曾祖父ちゃん

手術着に着かえた主治医たのもしく

病棟の夜のしじまにセキ寝言

平成の元禄官民みだれすぎ

貫禄は重役なみの平社員

大阪市 清水 利武

鯉のほり今年も四万十川渡る

神戸地震そろそろみんな忘れかけ

都会での暮らしに馴れた鳥育ち

笑っても泣いてもやがて骨になる

早咲きの桜散ってる通り抜け

大阪市 杉澤 汀

搗きたての草餅つまむ雨上り

小雀も身軽に動く雨上り

たこ焼と発泡酒でも花は花

もう散ると今年の花はせかしよる

往生際は桜のようにいかぬ

大阪市 清水 絹子

握手して去る平成の離婚劇

百度石母の祈願は偽でない

回り道も好きな箱鮓おみやげに

他人には言えぬことでも地藏さん

辛口の友の助言の真実味

池田市 栗田 久子

雑草にパワーをもらう朝の道
昭和から動きを止めぬ大時計
門前の厄除け餅がよく売れる
パンジーにバトンタッチの花時計
雨の日を心待ちする赤い傘

和泉市 西岡 洛醉

花開く春の匂いを嗅ぎ分けて
夫婦著今朝も揃うて幸を噛む
地球儀に回る世界は多事多難
潔し花は明日へ散ると決め
正直に生きる心を子に論し

和泉市 岡井 やすお

一周期改革幾つ出来たかナ
政治家は金から金へ綱渡り
丸投げで結束固し土建業
あめこんこきいろいろいかさ
W杯梅雨も蒸発さす熱気

泉佐野市 山本 蛙城

レジ袋溜めて売れる日來るといふ
正論のどたばた桜急ぎ足
決断のなさが外した金バツジ
秘書給与みんなで取ればこわくなし
USJ景気嵩上げなにわから

茨木市 島元 ふみ

腰痛の私に天使アッシーさん
ありがとうを物であらわすむずかしさ
安心で心配彼女居ない孫
若づくりしても熟女といったわられ
救急車病人私じゃありません

大阪狭山市 矢野 梓

心からごめんなさいと言ってくれ
セールズにメリットだけを聞かされる
古傷に触れず気付かぬ振りをする
パソコンに錆びついた脳試される
苦労性死後の事まで気にかける

交野市 森本 弘風

ずっしりと歴史の重み冷泉展
休むなと背中押してる万歩計
うまいウソ浮かばぬままに四月馬鹿
玉子酒効くぞ効くぞと妻の風邪
呆けたかな妻へのウソがみなばれる

交野市 山川 日出子

甘茶かけ四天王寺の釈迦参り(四月八日)
二十年未だ生きている腕時計
架けかえた錦帯橋は日本一
相撲の手柔と剛とが体当り
トランクに大志をつめた留学生

河内長野市 井上喜醉

拝観料はとけの顔より寺の庭

出しゃばりが何か言いたい咳ばらい

宅配もビジネス笑顔絶やさない

鼻唄で弱音見せずに竹を踏む

年金へおんぶにだっこしてもらい

河内長野市 水谷正子

夫病んで大根白菜花盛り

四月馬鹿ちよつくらパリへ行きますねん

開店の元のこの土地何だった

タンポポが意地をみせてるアスファルト

温暖で百花繚乱気にかかる

岸和田市 高須賀金太

お流儀を知らなくつても茶は飲める

ミスしたら苦笑いして誤魔化そう

落ち着きが橋の架からぬ島にある

君が代はスポーツに向いていないぞ

妻にだけは負ける訳にはいかんのや

岸和田市 岩佐ダン吉

桜散る街に累るい青テント

不況もう言うまい飢える国がある

貧乏な神さまならば信じたい

はがらかに貸すとサラ金コマーシャル

思いきり縮んでマグマ蓄える

岸和田市 原 さよ子

不用意の一言敵をつくつてゐる

掃除当番手よりも口がよく弾む

捨て犬を孫の涙に負けて飼う

嫉妬心燃やす若さがほしくなる

ペイオフなど関係のない老夫婦

岸和田市 藪野 けい子

ボランティア電話連絡妻は翔び

還暦に夫を信じ四十年

たけの子を煮て食卓に季節どり

おはようとひといいえず敵視され

阪神戦興味を示す妻になり

岸和田市 長谷川 呂 万

志半ば大正老いてゆく

過ぎた日へ自慢話の父兄し

バイト代手に入り高二よく笑う

退屈はさせて貰えぬ妻の下知

ゆとりある暮らしが滲む家族連れ

岸和田市 井伊東 吉

歳のせい近場の桜愛で直す

ワイパーに付いた花片そり除け

夜桜にとっと繰り出すブーツの娘

孫跳ねる宿題の無い春休み

干物の乾きで悟る季の変わり

岸和田市 木村正剛

堺市 村上玄也

院長に命預ける判を押す（ヘルニア手術 5句）

世の中が逆さに見えるストレッチャー

血圧がなぜかナースにより狂う

魚でもさばくつもりか執刀医

暗示かけ喜んで乗る手術台

岸和田市 原苑子

堺市 源田八千代

子の教え聞かずテレビなら即実行

三十三回忌縁者確認させた居士

大將がエプロンつけた妻の怪我

炊きたての御飯のにおい目がさめる

カミソリをあてられ眠る理髪店

岸和田市 宮野みつ江

四条畷市 吉岡修

夢に來た父母も亡夫も若かった

いつからかふたりの夢が違つてた

別れての街に恋人多いこと

ハイヒール鳴らし女の午後を往く

美しく死にたい離島のマリア様

堺市 矢倉五月

吹田市 穴吹尚士

理想とはとんと違つたけど夫

フルムーン仏頂面は常のまま

紫陽花を見つめ人生論なんぞ

良い日だと毎朝呪文かけ起さる

手間ひまを思えば野菜この安値

弱音吐く男の背ながちさく見え

古里が他人の顔で出迎える

味のある喋りが人を引きつける

蹟いてからは親父も丸くなり

開幕を飾り勢いづいた虎

堺市 源田八千代

ふくよかでお利口そうな愛子ちゃま

快調にまさかまさかのタイガース

数年ぶりの歯科医にカルテまだ残る

ディケアで昔の遊び甦る

黄信号走る余力は持つている

四条畷市 吉岡修

妻という緊張のない日が続く

目には目と大困らしい理屈言う

青い目の嫁さんも住む町となる

嫉妬する程度の縁で終りそう

鮮やかに手玉にとつてまだひとり

吹田市 穴吹尚士

手土産に思惑がある里帰り

使わずに惜しい気がするエアバッグ

ひとまずは辞退のそぶり名誉職

厚化粧ほんまの顔を忘れそう

センセイの言訳聞くと腹が立つ

吹田市 瀬戸 まさよ

七掛けの歳に直すとまだ若い
長生きのし過ぎも辛い長寿国
希少価値明治大正自画自賛
変わらない男のリード疲れます
二杯目のコーヒーが聞く友の愚痴

吹田市 大谷 篤子

ときめきをバッグの中に持ちあるき
老いてまだピンクびったり合うわたし
Eメール内緒話をしてみたい
遅れても深目に頭下げておく
声かけてまさかの面倒背負いこむ

大東市 児玉 蛙

ライバルにやさしい顔を見せておく
晩学の辞書から知恵をひろって
結び目がほどけて愛が狂いだし
彼となら人生の旅楽しかろう
逆境に強い女の泣きどころ

高石市 浅野 房子

躓いた石の重さを今更に
他人様の短所ばかりが目につく日
言わんでもええのに言うておこられる
下手な洒落笑ってくれる友がいる
もろもろがうるさく逃げてばかりいる

高槻市 傍島 克治

常連を気安く使う老いたママ
馬鹿にした花見の場とりやらされる
年上というだけで役押しつける
いまどきに栄転なんてあるやろか
妻の許可おりぬ私の更正法

高槻市 生田 義一

百円に両替しての杜寺巡り
インフレで育ちデフレの余生とは
馬の合う人と尽きせぬ長電話
甲乙の差はつけられぬ二人の子
津々浦々に明り照らした愛子様

高槻市 江原 秀夫

百歳へ期待我が家の皇太后
バッグには辞書と句帳と缶ビール
立て板の水にちらちら嘘の泡
神に祈り妻に感謝の日が昇る
ここ掘れわんわん疑惑の山の週刊誌

高槻市 左右田 泰雄

座れないバスは見送ることにする
大言を吐いて小言を食らう破目
欠席の訳は会費が高いから
凜として暖簾を守る若女将
写生する絵筆も軽し糸ざくら

豊中市 田中正坊

溺れたら石投げつける週刊誌
兵役で言うたらボクは後備役
古希古希と騒いでたのは一昔
戦争は死ぬまで忘れない傘寿
わたくしが私に出す努力賞

豊中市 吉田あずき

春の芽の苦みほどよい季節感
春多忙招待状が逃げてゆく
言い訳の度に黒ずむ白い画布
大吉の有効期限聞きもらす
春のコーヒーわくわく春を感じたい

豊中市 山門幸夫

春惜しみ庭から去ったホーホケキョ
着ぶくれて花のトンネル手を繋ぎ
老春や対のマフラーで花見かな
春雨にフロントグラスは花絆
野良猫が孫のベットに恋してる

豊中市 山門タミ

雀二羽何か囁き飛んでった
苦しさを超えた思い出ほど楽し
布衣の身に我が子四人の宝あり
デイケアと共にリハビリいい笑顔
囲碁の友来る日朝から落付かず

豊中市 岸田知香子

ばんぼりが川面映して花見宴
早咲きの桜入学飾られず
連勝に俄かファンが踊り出す
アンテナをめぐらし老いの好奇心
植木市春の温もりとりどりと

豊中市 松岡久留美

汚れ無き白を夢見る果てるまで
ステップを踏み間違えて堕ちて行く
種まいて芽吹く日待つ春の午後
寝もやらず子の靴音にはっとする
夏木立華やかに舞うつがい蝶

富田林市 片岡智恵子

順調な老化納得して生きる
窓際で聞かぬ振りする軽い椅子
趣味趣味と中途半端が増えるだけ
バーゲンセール女王も唯の人になる
言い訳が連れ居直る電話口

富田林市 中井アキ

公園に捨てられている縄電車
薄味の夫婦が交わすチョコレート
酒の味少しわかってきた独り
リストラにはらはらはらと散る桜
できすぎの身の上ばなし聞く屋台

富田林市 大橋 鐘 造

手術台命を刻む音がする
人生つてしもたしもたの繰り返し
時どきは被つて見たい鬼の面
鮮やかな嘘に無口になる本音
妻の言う事だしばらく目をつむる

寝屋川市 高田 博 泉

パソコンをちよつとさわつてみたい母
一局の囲碁で人柄まで見抜く
政治家の綱引き黒い金動く
根気よく読んだ絵本で捨てられず
恫喝へ官僚一歩引き下がる

寝屋川市 堀江 光子

爛爛と見入つて猫の何思う
嫌がりも甘えもせずに猫抱かれ
亡き母に逢う坂みちの春の暮
風格は作るに非ず出来るもの
書斎とは読書執筆居眠りも

寝屋川市 柴田 英壬子

窓からのお花見もよし寿司弁当
買物もヘルパーさんに月二回
ご仏縁ただ有難きお経読む
ネクターを飲み停滞の脳覚ます
ばんばりに気位ただす八重ざくら

寝屋川市 籠島 恵子

マイペース守れば角がたつてくる
カタカナ語並べてライバルが若い
こんな人とわかつていても愚痴がでる
夫婦を語るまだまだ刻がいるようだ
それほどに思われてない会釈だな

寝屋川市 岸野 あやめ

理想的御夫妻雅子妃のえくぼ
清らかに大和三山四季巡る
年頃が七人寄つて皆茶髪
マンションに住んでも四季の花があり
あんないい人も七癖早合点

寝屋川市 平松 かすみ

亡父の瞳に会ったスーパールの入口で
見直して見てもそっくり目鼻だち
鼻歌は 見よ東海のお父さん
膳本に生きたる絆の父と母
父母の足跡がある背戸の山

寝屋川市 太田 とし子

国会も虎も騒いで花盛り
アピールが輝いている新社員
言うだけで答返らぬひとり言
お早うさんまだまだ生きたる早歩き
脇役の啖阿が利いたワザビ漬

寝屋川市 坂上 高 栄

偏差値で生徒の一生値踏みする

差引は0です貴方の功労賞

春嵐シャッター上がらぬ街工場

道譲る後味心地よい笑顔

粒選りも芽の出ぬ時の運不運

寝屋川市 富 山 ルイ子

物騒な世の中何を信じよう

寝た切りの友笑わなくなり久し

死ぬまでに作りたいナー宅老所

宅老所作る予定にして貯める

加齢により光を増していくお人

寝屋川市 森 茜

ただならぬ目と言われても花粉症

誤字一字見た看板へ戻るなり

ガラス戸に一本抜けている私

傷ついているのにジョークでてしまう

要人を迎え空港張り詰める

羽曳野市 吉 川 寿 美

ももさくら咲いて明日からよその姓(孫結婚)

春や春軽い噂の二つ三つ

それなりの残響抱いて喜寿の坂

火傷せぬ距離まで逃げてアカンベー

敵のない夫が少し物足らぬ

羽曳野市 川 口 信 子

年毎に母に似て来る初鏡

笹舟を真似て流れに添う余生

恋一つ出来ぬ息子に母の愚痴

眠りすぎそのまま覚めぬ朝もいい

振り向けばわが生涯もひと握り

東大阪市 安 永 春

葉桜につつじが映えるハイウエー

遅しく戦後を生きて未来追う

いらつしやい小判好きですうちの猫

物忘れ自慢のように語り合い

桜トンネル気の向くままに蝶になる

東大阪市 北 村 賢 子

寂しげな鳥に鏡を入れてやる

炊事する母に鼻歌でる平和

九拝の姿へこころ温まる

ドツと咲きサツサと散つてゆく桜

九天に北斗の杓が浮いている

枚方市 寺 川 弘 一

ふらふらと飲み歩いてる充電中

まだ美しくなりたがつてる僕の妻

人間同士好き嫌いあり仕方なし

悲しい顔は別れたくない方がする

招待状は無いがあの世は断れぬ

枚方市 宮川 珠笑

介護されながら小柄を喜ばれ

酔い醒めの水差しも置き泊めてくれ

胃薬と入歯安定剤で旅

胃カメラがリストラされた傷写す

会場は近いのか焼き匂うから

枚方市 安達 忠央

舞妓ゆく四条小橋に托鉢も

恋焦がれ危ない橋も気づかずに

淀屋橋紺のスーツが忙しい

風邪かいな病気扱いしてくれぬ

流感の妻と一緒に出前待つ

藤井寺市 高田 美代子

笑ったり泣いたりおくれ毛が絡む

たんぼぼの綿毛になつてみたい春

尽すだなんて思ったこともない母だ

昔ばなし渋いお茶など淹れ足して

それなりのお洒落でよしとする齢

藤井寺市 中島 志洋

ホームラン打って味方に叩かれる

輕輕しい約束ばかりする小指

手土産を横目ようこそお越しやす

包丁を持たぬ女の長い爪

初舞台橋の上から落ちる役

藤井寺市 太田 扶美代

如才なく掃いております両隣

一日一回笑わせている介護

三分粥あればいのちをすすする音

パソコンを習っています老いの自我

落ちついて聞いているのは第三者

藤井寺市 楠 昭子

波に乗りすぎて自分を見失い

うなずいているが敵意に燃えている

核ボタン地球が消えるかも知れぬ

時どきはそっぽ向いてる夫婦箸

愛の果て憎しみの果て心澄む

藤井寺市 鴨谷 瑠美子

注ぎにくるビールお喋りだったんだ

キー下げてみても良い知恵湧いてこぬ

一望のびわ湖一面こぬか雨

嬉し泣きする日の涙溜めてある

サイレンの響きを闇の中で聞く

松原市 小池 しげお

姑に好かれて葱を刻む音

藤棚の下で女の気をそこね

字の下手なことを隠してあるメール

珍しい事を言い出す石頭

さつきから耐えているのは鼻の先

箕面市 出口 セツ子

生きてゆく活力が湧く愛と憎
朝の膳ケンカ相手の居てる幸
もうVのフィーバーしてるトラファン
愛の無い言葉が胸に響かない
子に甘えて欲しい自立もして欲しい

守口市 結城 君子

啓蟄を知ってる虫と目が合うた
たたかれる予感若ごほうの覚悟
小さい字の雪印見て止めておこ
お花見が急に見舞の日に変わり
笑いとばして私元氣と証明す

八尾市 宮西 弥生

すれ違う風にいのちの音がする
ときどきの昼寝に錆をとっている
春野菜ばりばりサラサラ血の流れ
陽も水もあふれ桜は川となる
塩梅な山の湯加減花吹雪

八尾市 内海 幸生

撮影禁止この絵ハガキはどうしたの
庭の実を盗んだ小鳥にパン屑を
下手ですが心は負けぬ写経の気
カトレアは世話女房に向かぬ花
医者代を上げれば病人減るつもり

八尾市 長谷川 春蘭

明け暮れの不順ながらに衣更え
新緑を灯して青き夜となせり
人来たり人去る墳墓桜散る
新緑や声を出さねば睡くなる
一斉に蛙雨呼ぶ夜を呼ぶ

八尾市 高杉 千歩

ドラマ見ているみたいや阪神が強い
み仏に縋っていちにちが早い
余生ひと筋まだ欲があり絵具皿
開き直ってみたとして所詮弱い性
鬼さんがうまいと言った木の芽和え

八尾市 村上 ミツ子

おしゃべりが風と一緒に通り過ぎ
ほんとうはお金なかっただけのこと
ストレスに前のストレス追い出され
ほっとする気持と割り切れぬ気持
うぐいすの囀りを聞く墓参り

八尾市 井尻 民

草もちを供えメールを待つ彼岸
水茄子の浅漬け茶粥朝のさち
追っかけてくるのを心待ちにして
気が付けば脳の指令も遅れ気味
会えばすぐ君の歩幅でとき刻む

神戸市 池田善守

心経で今日一日の生を謝す

一行の肉筆もない転居状

元気でいろいろな食べて腹八分

料理する人の気合が味に出る

この暮し永遠に続くと思ひ込み

神戸市 木村貴代子

椿一輪茶室は凜と静まつて

胸拡げまともに受ける母であれ

早過ぎる季節にあわす木々の花

千光寺君と来た日をまざまざと

一つずつなすべき事に挑まねば

神戸市 山口美穂

若い気で楽しんでますEメール

新しい知恵をパソコンからもらう

震災の傷癒えぬ地に草繁る

ペイオフはわたしにかかわらないことで

九官鳥がいつかの噂しゃべってる

芦屋市 黒田能子

フラフープ五月の風を回し切る

薫風に昨日の雨のこいのぼり

盛り場を通天閣が眺めてる

物騒と背中合わせに生きている

花粉症わたしに春を告げにくる

尼崎市 松下比ろ志

年頃の色とはこれか桃の花

たんぽぽは国境線のない黄色

古希の春歩む私のゆるい旋律

堅物で往きも帰りも同じ道

土匂う古道に光る春の露

尼崎市 田辺鹿太

代償を求めないから好きなのだ

粋がつて芯まで濡れる花の雨

後悔はしないと決めてから愚痴に

若しかして僕はロボットかも知れぬ

心ある椿は真夜中に落ちる

尼崎市 内田美也子

只今の声を待つて新学期

校庭が淋しがつて五日制

哀しみが癒しへ変わる夫の墓

暗い世へ六甲おろし活を入れ

残り火を掻きまぜに来る誕生日

尼崎市 春城武庫坊

思い出の月日を招きよせる酒

花に酔い人の情けに酔うている

来年またと約束をして花は散る

杖をつきK点越えて妻退院

祖母五十回忌あぐらかくこと許されよ

尼崎市 春城年代

退院の予定のさくら散りはじめ
山の灯がチカチカ夜のとばりする
待つともなく靴音を待つ昼下がり
いやな癖鼻につき出す四人部屋
オーデコロンを振って病室柔らげる

相生市 中塚礎石

地球儀を回せばうめき声がする
太陽を真上に受けて影がない
ブラットホームに同じ悩みが落ちている
期待権いいとこで切るコマーシャル
アルミ缶泣いて笑ってつぶされる

伊丹市 小熊江美

未来より今日を元気で過すのみ
孫が来て私のテンポ狂い出す
古い同士テンポが合って気楽です
優しくて心の練れた亡母でした
同情はしても心が救えない

伊丹市 山崎君子

合格も兼ねてよばれる雛の膳
ミモザ咲いて平和な彩の中に居る
灯籠にむきあうピンクスイトビー
急行の停まらぬ駅に舞う黄砂
今日退院友にこやかにコンパクト

川西市 松本ただし

無理のある所できしむ不協音
目に見える結果求めて槌を振る
スーパードで世界の味を買うてくる
濃緑の隙間埋めてる若緑
いとはんのまつたり聞けぬ御堂筋

川西市 西内朋月

春近しくぎ煮をあてに飲んで
ゴミの日にゴミを出さない日が続く
ひまそうなスナックにいる招き猫
ペイオフに内緒の預金移し変え
無党派が益々増える茶番劇

川西市 米原雪子

様々な坂もいとしい喜寿の春
聴力へ補佐してくれる友がいる
新監督燃えて見事に花咲かせ
夫も子も離ればなれに新年度
春ですと見知らぬ花芽顔を出し

三田市 久保田千代

妻の愚痴消すプレゼント光ってる
再出発決意の靴の紐結ぶ
発車ベル過去を見事に忘れさす
大根をざくざく切って春を待つ
平和っていいな竹の子空を突く

宝塚市 嵯峨根 保子

一寸先の闇へすみれがよく増える

雪舟展京で山峡くだりかな

純情は男のものよ虎が吼え

すかたんへ回転ずしが逃げていく

北新地花屋にらんの多いこと

西宮市 井上 松煙

カタカナ語やたらに使うえせ文化

人前は負け碁も辛い顔をせず

趣味多く中途半端のお付き合ひ

苦の世界癒しを貰う孫の顔

待合室話し相手が減って来た

西宮市 牧 渕 富喜子

春はまた落葉の季節一年生

花見には絶好の日の車椅子

ほつと小さな花ら勢揃ひ

うちつけに夕映えの中月上がる

傘上げて雨のさくらのぐちを聞く

西宮市 奥 田 みつ子

春風がわたしの棘を包みこむ

同心円いつしか崩れ点ひとつ

メール代親の悲鳴が聞こえぬか

永田町納得ゆかぬことばかり

一周忌 家の周りは変らない

西宮市 秋 元 てる

五十音あいで始まるのがうれし

女には逆らう勿れが吾が家訓

いけしゃあしゃあ心証極めて悪いのに

口挟むきつかけ見えずむずむずす

子等も老い母の回忌を前倒し

西宮市 坪 井 孝 一

妥協という技は政治も恋愛も

ジョギングで皆におはよう言えた朝

あつ爛を持てあましてる紙コップ

子供らは知らない父の汗と胼胝

おじさんがケータイ持つてユニクロへ

西宮市 緒 方 美津子

杖の身に地下街の波手強くて

子等巣立ち夫婦の橋の揺れやすし

若葉道五感で歩む車椅子

終いまで飲んだことない風邪薬

口げんか愛は深くに沈めてる

西宮市 亀 岡 哲 子

水買うてうやうやくも飲む新茶

テンポ少し乱して余裕ある暮し

思い出し笑いフツツと月明り

夜桜を見てるとボトリ椿落ち

バトントワラー六年生はもう女

大和の春犬養節の相聞歌

奈良県 渡辺富子

春愁へ未来の種を蒔いてみる

若葉風浮かれ上手な妻になる

イエスノーあいまいなまま返す笑み

温い話手さげに詰めて母が来る

奈良市 天正千梢

プロポーズ空振りでしたまだひとり

100%落ちると敵も読んでいた

いつからか歩幅そろえて歩いてる

歳月が屋根に降り積む仁王門

円空仏こんな所でまた拝み

奈良市 米田恭昌

フロントが確と見ていた逃避行

クラス会無理を承知の若作り

ハネムーン娘からのろけのエアメール

日本の未来を憂うキリンの目

証人喚問重ね重ねの深い罪

香芝市 大内朝子

厄介をかけぬ祈りの竹を踏む

筋通す気性のいつか四面楚歌

災いの口にチャックをしておこう

ケセラセラそんな気分酒の酔い

タイミングはずすとただのおせっかい

大和郡山市 坊農柳弘

田に一札田植機撫でて汗を拭く

人恋し棚田に初夏の風清か

喪の袖を優しく濡らす菜種梅雨

見つめれば和音を放つ花あやめ

菖蒲湯で憂さを流して大ジョッキ

和歌山県 中後清史

やる気まだ失せない老いのリズムカル

定位置を譲らず恙無く生きる

謙虚さとプラス指向のヤジロベエ

お帰りと迎えてくれる妻が居る

ライバルが居て趣味の座がよくはしゃぐ

和歌山市 細川稚代

年輪がさがると思ういい笑顔

それほどの事もないのにさわざたて

ほうほうの態で人混み通り抜け

変化球投げて墓穴を掘っている

手をつなぐ友もだんだん限られる

和歌山市 田中みね

定位置に夫婦茶碗がある平和

孫嵐去つて睡魔におそわれる

癖のあるお酒そろそろ目がすわる

親馬鹿は百も承知という財布

無言劇二日と持たずワッハッハ

和歌山市 古久保 和子

大見出し付けて朝刊からコント

国会のすったもんだで視聴率

前科と言えは違反キップを二度ばかり

持て余すワイングラスの長い脚

メールピコピコ発信元は宇宙人

和歌山市 青枝 鉄治

ハンドルのあそび程度のラプゲーム

それ以上言うと男を軽くする

善人にされて出番のない鬼面

榮進に遠い男の人間味

取っ付きが悪い男のあたたか味

和歌山市 木本 朱夏

ポップコーン弾けて春が笑いだす

面白う一夜二夜は花狂い

二三日微熱が続く花疲れ

二枚舌もつれて春の失語症

ちちははの伝言だろろう花吹雪

和歌山市 山根 めぐみ

十字路でさつと先頭さる自信

煩惱を押さえおさえる介護

目には目をしつぺ返しの花ざかり

木の芽どきスパークさせる堪え性

悔しそう袋はみ出す葱の足

和歌山市 西山 幸

小紋着て春のドラマをふくらます

虫干しをすると私も黴臭い

藪をつついて自穴を掘つてしまふなり

アパートの地下の平和を見て帰る

偶然の出会いへ尾鰭おもしろい

和歌山市 榎原 公子

勝負服ここぞ釦をかけ直す

待て暫しないケータイが街を行く

春眠の枕ビジョンを膨らます

大陸がなかなか太れない黄砂

秘密基地母に明かしたことがない

和歌山市 川上 大輪

井の中の蛙井戸から出たがらぬ

石段を見上げただけで草臥れる

いい人にされて何にも喋れない

言葉裏返して棘を抜いておく

墓建てて亡妻へ最後の贈り物

和歌山市 牛尾 緑良

梅酒まだ父の香りを残してる

占いを信じたくなる適齢期

往年と口になっている老いている

チューリップ開く隠しごととは無い

橋が出来故郷を去る人の数

和歌山市 福井桂香

通販が夏だなつたと攻めてくる

牛肉へ百日百夜の禁を解く

金権の政治へ天の声が降る

ルーベで見ると廢材運ぶ蟻の列

改行をしてから愛が降る手紙

和歌山市 楠見章子

春のメニュー体重計がピンと跳ね

バリトンに犯されそうな春の耳

たつぷりと未練まぶして使い捨て

泥はねて訴えられるかも知れず

一人っ子に子供が出来ぬ春の街

和歌山市 桜井千秀

スムーズな答に籠を締め直す

五月雨にポスト憂鬱らしく待ち

ただいまが口癖一人棲まいでも

気ばらしに出てきた町で無駄遣い

句は心偽りの句は作れない

海南市 三宅保州

ベストセラーあつというまに消えている

心配をしだすと前へ進めない

分別収集しても地球の中のこと

完全看護聞くと見るでは大違い

信号機よそ見をしたら青になる

海南市 谷口義男

火傷せぬ距離で楽しむ老いの恋

五十回忌父知らぬ妻取り仕切る

緩めたり締めたり妻は知恵搾る

ヒマな人狙ってボケが入り込む

どん底に堪えた男の晴れ姿

鳥取県 林露杖

鶯の声朗々と花が散る

構えたる剣も虫食い仁王像

朝こけただけでピーポーに乗せられた

病室の窓の景色に春闌ける

病院食コソツと塩をふりかける

鳥取県 山本正光

笛吹けば踊る仲間がすぐに寄る

照り焼きの匂いを風が出前する

パチンコに妻が凝りだし困ってる

病院もくすりも無縁ウォーキング

老嬢とグラウンドゴルフ今日も暮れ

鳥取県 岩崎みさ江

哀しみは無い葬儀屋の淀みなく

熨斗袋しばらく迷う不況風

味方だと思う人から病んでいく

乾杯のワインを許す誕生日

先客がいる立ち読みの指定席

鳥取県 土橋 はるお

母さんの手紙の震え字が心配
遠い旅させた葉書が舞い戻る
捻転を起こした人脈のバイブ
黒猫のタンゴを踊るネズミたち
のど飴をいつも舐めてるお坊さん

鳥取県 土橋 睦子

度胸さえあれば此の世はバラダイス

鯨鯨もうらんでいるか鍋洗う

正座しておっとり聞いている法話

逢えそうで隅に待ってる喫茶店

雲雀鳴くれんげ田も無いニュータウン

鳥取県 田村 きみ子

六月の花嫁という招待状

何の苦もないけど英語だけ読めぬ

あいまいな返事は嫌い今日は晴

回転寿司誘われて行く誕生日

嬉しい時も悲しいときも正直に

鳥取県 原 みさを

峠道荒れてエンストたてつづけ

父老いてこんなことにも涙ぐむ

三枚に私をおろす妻である

花が降る七つボタンで征ったきり

糊蒔いて来た手で花の句を作る

鳥取県 上田 俊路

起こされた犬に散歩をせかされる
筈でにぎやかになる藪の春
リストラにペイオフときた暗い春
わが口座どこにいったか合併後
永年勤続ああ表彰は打ち切りか

鳥取県 橋本 多哥由

政治家に芸術的な嘘がある

冥土には一度行っても帰りたい

羨望の悠悠自適満点だ

花柄の手紙で心弾みだす

恋をして本音手紙に書いて出す

鳥取県 奥谷 彩子

ちよつぴりの嘘もやっぱり顔に出る

もう女捨てたと未練たつぷりに

しみりと人の話を聞くボトル

福耳に濾過した話だけ届く

夢詰めたバッグ背にして村捨てる

鳥取県 近藤 春恵

朝露夜露ふんで農婦に暇がない

貧しくても雨露しのぐ家がある

長い道共に歩んだ金婚譜

長々と続く祝辞にねむくなる

子に注ぐ愛の深さは計れない

鳥取県 西原 艶子

あの人は帰って来ない祭笛
笛の音に踊らされてた時もある
舵を取る苦勞をもらう大家族
独り身に戻りわたしに合うテンポ
万葉のころをもらう摘み菜する

鳥取県 羽津川 公乃

ペイオフに偽名へそくり暴かれる
損しても今買いい時と株価読む
ドライブはスーバー往復だけとなり
目薬を点せば夫も真似て点す
二千円札で昼食奢られる

鳥取県 石尾 かつ乃

温泉の復路ほんのり湯の香り
決断がついて飛び乗る発車前
下積みの苦勞ご一緒しませんか
嬉しくて宇宙にすごい丸を書く
親馬鹿の取り越し苦勞には困る

鳥取県 権代 康女

震災で休んだ田んぼ水がわき
本当の事を言ったら余波がくる
良い唄に自然と体動き出す
法勝寺千本桜の舞を見る
花吹雪川の流れにさからわず

鳥取市 美田 旋風

不祥事を天狗は運のせいにする
春一番遊びの虫が顔を出す
饅頭が入る胃袋別にある
若い日の苦勞昔はよく買った
老いてなおメイクドラマの春に行く

鳥取市 倉益 一瑤

振り向いた冬がくしゃみを一っ置き
陽が沈む紅一本をふところに
臆病で浅瀬ばかりを泳いでる
美しい嘘に階段踏み外す
浮き沈み神は二物をあたえない

鳥取市 岩原 喬水

死んでから惜しむ話の種にされ
悔み欄活字になった友がいる
餌よりは安い卵に鶏なげき
老木にまだ花咲かす根が残る
米櫃がゆつくり余生過させぬ

鳥取市 前田 一枝

可愛い顔何処に毒等あるのやら
神さまも酒やビールを好まれる
体調の良さに薬も吞み忘れ
似合いそなカッブル仲間ねらってる
古里の屋根色とりどりに変えて居る

鳥取市 岸 本 孝 子

地図でみる東京なんと狭いこと

三拍子揃った妻に肩がこる

飲んでいるらしいな口がよく回る

幕が降り裏方ほっと息をつく

世の中が狂って桜まで狂い

鳥取市 岸 本 宏 章

無党派がいなけりや政治変えられぬ

可燃ごみカラスもじっと監視する

ぜひ見たい箇所にもザイクかけてある

伏魔殿きつねにたぬき熊もいた

善処とは聞き置くだけのことらしい

鳥取市 近 藤 佳 子

リハビリでたたかう心蘇る

車間距離守りさらさらおつきあい

罰当たり私日光アレルギー

春雨にぬれ泥はね車にやられ

弱点を晒して生きてゆくことに

鳥取市 杉 本 孝 男

音なしの構えで温い嘘を吐く

善人の仮面脱いだら気が楽よ

萎れても花芯は意地を主張する

気にするな一度のミスは誰もある

子や孫のおだてに乗った音痴ぶり

鳥取市 植 田 一 京

ハブニング求めて春の旅に出る

テレビ見て独り笑ってフット寂し

エンピツで諸行無常を詠む机

落ち目だな少し化粧を濃くする

魅せられて追っていたのは蜃気楼

鳥取市 福 田 登 美

健やかな今を大事に生きている

どっと来て淋しさ残す帰省客

夕焼けは明日のために美しい

明日のこと予感しながら爪をきる

病む夫の寝息にはっと夜のベン

鳥取市 夏 目 健 一

紙袋森の匂いに捨てられず

もてなしの心があれば客は来る

戦士には敗者復活戦はない

楽しさも幸せも食べ腹満たす

時々時計を止めて振り返る

鳥取市 山 本 益 子

カラオケは沈む心に元気づけ

遠ざかる故郷恋し蓬摘む

心身症進むと怖い いい風を

老境のでっかい夢は百寿まで

ときどきは力うどんで元氣付け

鳥取市 春木圭一郎

前向きにやれば何かが手に入る
気の合わぬ人とは会わぬようにする
情報の一割限度にしゃべるべし
感動や思いのメモが生きてくる
人目より自分のしたいこと選ぶ

鳥取市 加藤茶人

寝込んだらやっぱり五十弱音吐く
さみしさは趣味では癒えぬ恋に燃え
雨に負け風にも負けた皺を見る
良薬と思う苦さにある安堵
うつぶんも悩みも溜めた皮下脂肪

倉吉市 牧野芳光

手作り野菜幸せ色の皿に盛る
叱ってる相手に見下ろされている
その気になればふっ切れる鎖かも
中年の不良がひとり眠らない
どんぐりのうちから粒を選っている

倉吉市 野口節子

三面鏡年齢相応が気に食わぬ
浮世波にもまれもまれて熟女なり
人生の秋だ血管澱み出す
雑巾にされたタオルの怨み節
おもてなしお茶一杯のワンパターン

倉吉市 最上和枝

黄に染めた髪のダメージ気にかかる
大ジョッキ熟女が寄つて怪気炎
親戚が寄れば昭和の話する
小説は書けぬが恥をかいている
用済みの乳房の底はまだ女

倉吉市 松本よしえ

間引かれるいのち青菜の根が白い
春うらら百歳送るくじら幕
雨洩りの怖さを子供まだ知らず
鈍感が崇つて恋に恵まれず
一寸いい話を提げて来ると言う

倉吉市 山中康子

葉桜が老いの振舞い見てにこり
早咲きに地球も人も目をまわす
大漁の貝殻節に勇み立つ
没頭へ悪の芽知らぬ間におそう
もう少し生きて貴方の粥を炊く

倉吉市 猪川由美子

あなたの色に染まりきれずに愛こわれ
価値観が違い過ぎて息出来ぬ
災害用の水はときどき替えている
入院してXデーの策を練る
議員バッジ取った途端に腑抜けなり

米子市 白根ふみ

春泥に三輪車ごと持ち上げる
確認をとって野焼きに命がけ
鯛焼きのアンコはシッポまでがいい
菜園が虫食まれゆく無農薬
足腰を騙してばかり杖の先

米子市 鷲見正子

子が揃い支えてくれるお葬式
春の宵七夜七夜に会う仏
黄砂降るうちの軽にも外車にも
野草展ベンペン草も顔を出す
鰯跳ね日本海が父を呼ぶ

米子市 青戸田鶴

天国へまっすぐ行けぬ回り道
前向きの日々へころばぬ杖がいる
長く生きて哀しみばかりふえてゆく
たわいない話の中のあたたかみ
毎日が回って暦ばかり痩せ

米子市 門脇晶子

一輪の椿私を支え咲き
風紋の砂の命が泳いでる
情熱にこたえて咲いたバラの花
打てばひびいて動いてくれる喉仏
どの風に乗ろうと悩む迷い鳥

米子市 本吉宗光

七連勝トラは異変と言わせない
甲子園行つて見ようかあの熱気
航空機整備兵なりそのむかし
バス停へ歩けぬ足に無料バス
半世紀前の夢には若い妻

米子市 木村春枝

よろこびの笛は峠を越えて来る
ややこしい目をカパーしてサングラス
あの笑顔味方と思う早とちり
目覚ましを五分早めて起き忘れ
マスコミに議員バッジを外される

米子市 野坂なみ

千号へ通じる今日の祝盃だ(祝九〇〇号)
九ちゃんの歌つれだつて万歩計
頼みもせぬにやがて迎えの駕籠がくる
山高くわたしの森に水注ぐ
慌てゐるな鬆入りの骨に叱られる

米子市 林瑞枝

梅さくら一度に咲いて鯉幟り
京都弁の似合う猫いる寺の門
旅をして脳は死ぬまで進化させ
切腹した利休唄んで歩く京
椰子の実を歌えば其処に無人島

米子市 神庭 詩郎

医学進歩部品を少し替えて来る
肩書は就職浪人フリーター
アリバイを言えば秘密皆はれる
割り勘で飲んで握手をして分かれ
医療ミス医者と患者が食い違ふ

米子市 政岡 日枝子

ボランティア私を変えていこうとす
病院が混むほどみんな痛みもつ
花だより障子透かして香が届く
笑つて目から礫が飛んでくる
不整脈この乱だけは許せない

米子市 中井 ゆき

咲いて散る花をそだてて生き延びる
アフガンに学びたい子よはだしの子
美しいオウムが菌をまくなんで
キラキラと故郷の小川が夢に出る
里山の風に呼ばれて母の墓

島根県 森 茂美

生き残った鴨は番か川光る
退院の妻がエプロンもうかける
インスリン打つ老妻の細い指
舐め綱結び直して夫婦舟
無人駅今朝のラッシュは新学期

島根県 多々納 テル子

満開の誘いに元氣湧いてくる
生かされて朝な夕なに拝む幸
難聴がとんちんかんを繰り返す
私が最高齢のボランティア
本当をぐつとこらえて仕舞う胸

島根県 榊原 秀子

春の宵おはなししましよお雛様
花満開入学の子ととるポーズ
葉桜の並木へつづく夢一つ
足音へ蜥蜴上手に身をかわす
手の鳴る方へやっぱり行ってみようかな

島根県 伊藤 寿美

風にそよぐ葦が力を溜めている
口裏を合わせて守るものがある
闘病も峠馬酔木の花も咲き
バス停の花びら連れて夫見舞う
帰りたいなボツリと病夫が言う日暮れ

松江市 銭山 昌枝

誕生日夫がくれた商品券
夫留守時間をかけて化粧する
お世辞とは判っているが礼を言う
ときめいた人の噂が気にかかる
一行で足りるハガキを子がくれる

松江市 川本 畔

老父の足今は私の跡辿る

黙々と泥をはたいて老父座る

野放図に足を投げだしたい牛蒡

鮮やかな緑へ老いは眩しすぎ

満ち足りた手垢が亡母の辞書にある

松江市 佐野木 みえ

築地松の緑と共に生きている

コンクリート割ってタンポポ顔を出す

私の春を探しにローカル線

紺色の紙一ぱいに夢をかく

じぐざぐに走った道を折返す

松江市 安食 友子

丘からのはつと驚くバノラマが

飛行機雲猫背を忘れ反りました

あの頃はびよんびよん跳んでいた裸足

蟄居から野獣のような笑い声

生唾を抑える理性まだあった

出雲市 竹治 ちかし

確実に春を掴んでいる布団

使用期限までは大事に使われる

幸せを余命期間で割りかえす

平等を違えて暮らし難い世だ

ゴミの日にわたしの宝物が減る

出雲市 石倉 美佐子

螺子を巻く私を待つて八角時計

売れそこなつた市松人形に名前付け

雨しとど玩具の兵隊らっぱ吹く

哀愁の曲が流れるオルゴール

草丘さん卵の花くたしが降ってます

出雲市 園山 多賀子

咲くを待ち散るを惜しんで季に溺れ

柔らかい手と掌で固い握手する

放浪癖右も左もない軍手

砂糖壺塩壺みんな嫁の味

断片の慕情繋いで生き延びる

出雲市 佐藤 治代

骨一本折ってざわざわする根っ子

パンツまではかせて貰う情けなさ

介護する夫へ何度も礼をいう

すみませんしばらくお世話になるお膳

誰に逢う予定もないが化粧する

出雲市 城 多喜

妻いちず男の美学かも知れぬ

幸せを掴みそこねた両の手だ

しがらみがチクリチクリと刺しに来る

うれしそうオッハオッハと散るさくら

底抜けにわっと笑った久し振り

出雲市 伊藤 玲子

四月号終いの投句が載っている (故草丘氏)

泣けるだけ泣いて仏と話する
問題の口火を切つて溺れそう
極楽は我が家の寢床かもしれぬ
出発は裸くよくよするでない

出雲市 吉岡 きみえ

春だもの冒険しても許してね
春日和三輪ふんで墓参り
金持ちが騒ぐベイオフキいている
金持ちのゆえ苦勞する人もいる
持たぬもの持つたらろくなことはない

出雲市 久谷 まこと

嘘だとは知つてゐる母の広い胸
頑張れよ孫送り出す目に涙
惚けてると思いたくない物忘れ
明日のため今日のノルマで小手調べ
金婚を過ぎると欲はあと十年

出雲市 小白金 房子

寒鮒のよどみへ春の陽がおりる
軒先の雨だれ春の詩ときく
道しるべ守る石仏花の下
外孫の威勢我が家を春にする
離れ住む心を繋ぐ一通話

岡山県 大石 あすなろ

小皿からこぼれ落ちてゐる欲のかず
世渡りの下手な尻尾を振つてゐる
なんでもない話につられけつまずく
方便の嘘が速効薬になる
出会い系サイトまさかの落し穴

岡山県 矢内 寿恵子

煩惱をすてると静かになる余生
地にかえる命まっかに寒椿
雑魚なりに川の流れを読みつくす
ゆきずりに片手拝みの野の仏
雑草の中で一輪野のすみれ

岡山県 山本 玉恵

書き忘れのページを埋める花紀行
たましいの詩が転び出る春の道
リストラの窓に桜は咲きはこる
限りなく花に埋もり旅つづく
平仮名の字体に映る炎の女

岡山県 小林 妻子

あっちこち出してた首も引っこめる
国会も自分の事で遊んでる
不景気はよそに賑やか桜さく
川柳の外は相手にしてくれぬ
腑に落ちぬままの一步が踏み出せぬ

岡山市 川端 柳子

旧友とお子様ランチ食べている
玄関でポツンと遺愛の杖が待つ
うまくて安い庶民の行列すぐ生まれ
チャンスかも知れず四月の馬鹿陽気
借景の後樂園の得意顔

岡山市 井上 柳五郎

しあわせも気付かずまたもはやき節
忘れたと呆ける特権駆使してる
停年を早めて首輪取り外す
貧血の身から採血また抜かれ
いのち賭け無謀遭難救助隊

広島県 藤解 静風

ちゃんと孫叱る大事な孫だから
早咲きの桜泣く人笑う人
自分史へ飾るところが邪魔をする
移行行く三日視ぬ間のワイドショー
人類の石油みつてから不幸

広島市 森田 文

ヤナギの芽春の目覚めの早きこと
一本一本によせる思い出里の庭
大クスノキ五月になれば振り向かせ
見てごらん議員さんにもボスがいる
乗りのりの踊りは神の宿りしか

竹原市 岩本 笑子

春を摘むゆとりがほしいスニーカー
バックミラーどきり白髪をまた見つけ
何もない一日だけど仕舞い風呂呂
考える人になつてゐる夫である
白髪という貫禄足袋を履く時も

竹原市 三宅 不朽

たんぼの旅立つ風を憧れる
さくらさくら四月生まれの灌仏会
何時からか団地の地藏化粧され
競り合つたバーゲン語り合う喫茶
派手好きの女がうどん屋に入る

竹原市 時広 一路

七十点までもいかない自己採点
飲むからは少し酔わねば悪かろう
お元氣ね言われてみてゐる医者通い
愛用の枕から聞く子守唄
パイパイを御苦労様とボランティア

竹原市 古谷 節夫

絵手紙で竹の子が来る里は春
青春の思い出ネガにある誇り
残り火を吹き合い夫婦燃えている
カラオケのキーが馴染まぬ俺の声
吟行へ予報がびたり傘マーク

竹原市 森井 青居

上司転出序列が狂うかも知れず
忠告を喰うたツケが大き過ぎ
衝動買い余裕があると言う事さ
金運に縁が無いから働ける
起死回生の策を見つける旅に出る

竹原市 石原 淑子

釈迦御在す牡丹の花や天寧寺
酒とろりほんのりピンク路郎碑よ
春おぼろ仮面外して余生とや
花ビラと黄砂のつもるボンネット
高砂や二人の前途祈るのみ

宇部市 平田 実男

サンガラスへ防犯カメラ身構える
都合よいことがたまにはある同居
健康のバロメーターに腹時計
善人の嘘は目に出る汗に出る
人間の匂いシャネルの5に勝る

美祿市 安平次 弘道

胃袋にたまってるのは通過点
鬼の目にも涙だあれも騙されぬ
建前に終始反省などできぬ
告白をするには夢がなさすぎる
帰りたい帰りたいブーメラン

熊本県 高野 宵草

お互いの個性溶かして共白髪
不景気に政治も底を見せて来た
毎食後虫歯になつてから磨く
胃カメラをいざ呑みこまん目をつぶる
スーパで妻に従う籠を持つ

熊本県 岩切 康子

肥り過ぎあれこれ着ても無理がある
筍掘り鶯の音に迎えられ
様変る景色遊歩の夢抱かす
同級生ひよっこり逢つた露天風呂
無理のない暮しゆつくり楽しもう

熊本市 永田 俊子

シルバーに耳うちをする春の風
笑い袋に詰める物が無い独り
留守電に母の情けが溜まってた
握手してその温度差をかみわかる
金にころぶのを見ているヤジロベエ

唐津市 久保 正剣

策法に政策秘書という制度
よい疲れ春の花壇の移植鋤
平和呆け瘦せた汗に流す金
老人会添乗員が譲り合う
頬杖が昨日のデート追っている

唐津市 宗 水 笑

雨の中飛んで行きます北帰行
歳時記にひと月早い春の花
親と子と孫が引き継ぐ社交下手
郷土愛邪馬台国は此処ですぞ
人恋し用なき街を散歩する

唐津市 井 上 勝 視

天才は突然変異じゃないらしい
どこか変ベットブームの不況風
徴兵もテロも嫌だが基地も嫌
耐えて来て今また嫁に耐えている
お互いに看取るのは嫌と笑い合う

唐津市 市 丸 晴 翠

車座で酌めばスルメも火に踊る
暖冬のキャベツ畑で爆死する
左遷地の夫と仰ぐ澄んだ星
阪神とマリナーズとに煽てられ
自己管理できぬ夫の酒の量

唐津市 樋 口 輝 夫

冷凍魚天然ものと褒められる
極楽があると言うから出す御布施
油断して妻に抜かれた諭吉札
縁遠い娘またまたNOと言う
寄り掛かる大樹も枯れてフリーター

唐津市 仁 部 四 郎

政治家の顔を時には借りてみる
投票日性善説が試される
選挙カー二台棚田へやってきた
弔電の初めはやはり議員から
哄笑の裏に罨あり議員席

香川県 成 重 放 任

孫っ娘のようなナースにあやつられ
退院が決り元気が湧いてくる
童謡の世界に浸る鬼ヶ島
待った春いやな花粉を連れて来る
進学の祝論吉を待っている

香川県 池 内 かおり

口下手が下さる新種花の苗
担いでたおみこしはうり出す身内
ゴールまで夫婦の夢は万華鏡
良い話ばかりで前へ進まない
ゴッホにも負けないマゴのチューリップ

香川県 川 崎 ひかり

母さんの笑顔みたさにベダルふむ
どう審議しても真相闇の中
人間のずるさ愚かさ嘘をつく
どの蓋をしてもやっぱり匂います
掘り起こす疑惑の穴が深すぎる

香川県 瀧井 勝

有難さ通り越してる長い経
野の花の気楽さ風によく靡き
騙されて咲いてしまった鉢の花
久々に逢ったら友も老いていた
思い切り過去は捨てようお引越し

香川県 清川 玲子

閉店のチラシ長蛇の列が出来
ときめきがまだあり古木花つける
もたれたい大樹が揺れてばかり居る
足元の小石にもある自己主張
こんぴらの春は芝居で幕があく

香川県 神保 坊太郎

どの面を付けてゆこうか朧月
どこを突いても血を噴くだろう日記帳
女房を黙らせてから負けている
パソコンに嫌われてから寄りつけぬ
看板のきれいな嘘を買われる

愛媛県 中居 善信

親父の影に霞んでしまう僕である
天職は疑いもせず継いだ農
夕西カラスも僕も急く家路
耳鳴りがしてる楽しい事が無い
雨がしとしと降っている淋しいね

松山市 丹下 美津子

一陣の風に見事な花吹雪
ハイハイと気軽に動く人気者
顕微鏡じりじりと待つ蝶の孵化
よっぱどのこと饒舌になるお晩酌
同士かな柳誌ひらいて羽田駅

松山市 宮尾 みのり

野の花にひそと生きるを教えられ
雑草の目線を常に研ぎ澄ます
当人も後で読めない走り書き
隅にいるひとり納得してない
売出しセールともかく品をまず掴み

高知県 小澤 幸泉

ひとつだけ席を空けとく祝い膳
仲直りしてそれからがむつかしい
父達者父は言うことなにもなし
孤独には慣れたつものの夕の膳
バラバラな家族揃えた春の膳

高知県 赤川 菊野

散る桜に逝く日の美学教えられ
焦点をずらすと視野が広くなり
おとなりも出来ちゃった婚あのお腹
老人と言う一線をどこへ引く
ちぎれ雲今年の旅はどこにしよう

高知市 北川 竹 萌

買い入れて五年目九十杖下ろす
踏み違え丸く転がり怪我はなし
うぐいすの声に召されて山菜取り
妹の扶助故里に山菜取る

弘前市 相馬 銀 波

豊作の祈願に春の風を待つ
りんご咲くまで体調は花粉症
近道を譲られ義理がつきまとい
去る身ゆえ本意にじます修飾語

富士宮市 渥美 弧 秀

再会を約して親友は黄泉路へと
盆踊り昔馴染みと踊りの輪
さり気ないお洒落が光る孫二十歳
逆さ富士 湖に映え佇ちつくす

富山市 酒井 輝

肝心な場所には触れず説き伏せる
男でも指輪が欲しいクスリ指
起きる気で灯すと眠くなる深夜
金バッジ金の成る樹の種らしい

大阪市 川原 章 久

父許す若気の至り良薬と
妻自前私入れ歯で噛むするめ
顔彩が赤ばかり減る傘寿の絵
清水坂土産に七味唐がらし

大阪市 寺井 東 雲

甲子園メールで応援どんどんと
左利き浮いた瓢箪つかまえた
冬眠の熊も穴から出る陽気
思い出は楽しい話ばかりする

大阪市 榎本 舞 夢

さわやかに挨拶してる敵同士
じいちゃんが死んでから出る内緒事
いかなごを炊きにおいでと古い友
短冊を確かめに行く通り抜け

大阪市 中村 穀 子

桜満開怖い毛虫を忘れさせ
若い孫肉バクバクと恐れない
パラサイトしてる娘が主導権
星も流れて強い女がふえました

大阪市 浦田 綏 子

山分けをカタカナでいう逃げ口上
横文字で言おうが駄目なものは駄目
金庫屋にくらがえしたい焼肉屋
店閉じて自販機まかせ三代目

豊中市 檜谷 郁 子

吾が住居桜舞いこむりピングよ
露天風呂ドラマのように花吹雪
幼き手すくうて遊ぶ花吹雪
渡る世間は甘さ辛さが混じり合い

豊中市 江見見清

弱いのです情の絡んだ話には
すかたんに上手く突っ込む浪速っ子
ため息をつかせ渡らす橋もあり
古木の根岩とのせめぎあい長く

池田市 岡本 吉太郎

振り返り見ればしみじみ悔い多し
人生観変えれば生き生き風が吹く
濃い口の醤油味付け美味しそう
振り返ればすかたんばかりよくぞ生き

吹田市 早川 棲世

窮民が難民襲う現地電
子は私大講師うどん屋まだやめず
年功で給料が出る市の楽団
古代ローマ偉大日本は神棲む世

吹田市 野下之男

父の日もカレーで良いか妻が聞く
毎日が休みのせいで仕事増え
青テント橋の下でも我が天下
ライオンも飼ひ馴らされてしおらしい

寝屋川市 酒井 勇太郎

こだわりが吹っ飛ぶ朝のご挨拶
今年こそ虎の旋風正夢に
妹の器量が良すぎ親泣かせ
しっかりと挨拶家庭見えてくる

守口市 井上 桂作

多機能の携帯いつもオフのまま
入口でジイジイと呼ぶ孫の声
何時までも母の手料理口にあい
舌にあうまろやかな味米の飯

高槻市 井上 照子

次々とニユースの中味腹が立ち
偉い人都合悪いと知りません
この老いに人恋う心許されよ
牛肉を食べたし造るわけいかず

枚方市 森本 節子

鶯の初音がたしかしげみより
ケキョケキョの初音に思わず返事する
フリソデ魚おすまし顔で春の海
トウカイテイオー牧場でひとり草を食む

枚方市 二宮 山久

芸道に生きて定年待ちわびる
身勝手な我人生に趣味仲間
留守電に孫の泣き声ちよつとあり
宅急便春真つ盛りの味とどく

枚方市 鈴木 政子

出合い系サイト哀しい結末ばかり聞く
出来ちゃった婚とケロリと言う時勢
総理総理の大阪弁が引っ込んだ
高校野球亡夫の出身校を応援し

羽曳野市 酒井 一 壺

ドル箱のタマゴを狙う甲子園
黒塗りの小箱に光る勲五等
偽物の方が私によく似合い
食品の産地偽装が多すぎる

河内長野市 植村 喜代

肩叩き小さな指がつほに入る
犬ふぐり春だ春だと背伸びする
古里に母がいてこそ足が向く
疲れたら買物だつて無駄を買い

堺市 神原 文

やすらかに桜のように散った人
八十路には八十路の遊び朝昼晩
人間の休む地点にある画廊
この刹那やがて未来だ光らそう

堺市 西村 りつえ

紫陽花に迷わされてる絵の具皿
幸せのレベル下げれば出る笑顔
マンションへ父母に託びつつ家具整理
葉桜に涼しさもらうズック靴

尼崎市 的場 十四郎

ダイヤより合鍵そつと握らせる
どん底で掴んだ薬は離さない
さくら咲く今年も一病もち歩く
旅たのしさまざま風に酔う地酒

西宮市 山本 義子

タンポポも外来品が幅きかす
脇役は楽しからずや独りもの
行つてきます誰もいないが言うておく
若ければと思うまい今生きている

西宮市 菊池 トミエ

凍てついた心を癒やす茜雲
転勤に水も変るとふと案じ
賃貸の軒にも燕巢を作り
ランドセル二ツ転がるたんぼ野

西宮市 刈田 泰司

猫のひげ二人の仲を嗅ぎつける
遅刻した謝りを聞く花時計
年金を春まで貯めて露天風呂
内緒事さあ手を洗い口すすぎ

神戸市 中村 ゆきを

青い山脈我が青春に老いはない
辞書抱え指からませた中之島
学校消えるのよと彼女涙ぐみ
浜辺の恋セピアの写真遠い日よ

姫路市 古川 奮水

窓開けて腹一杯の深呼吸
朝食はパンとチーズにラジオ聴く
コーヒーの香りを留守に靴を履く
交差点急がぬ時は青ばかり

兵庫県 大谷 幸次郎

鳥取市 徳田 ひろこ

ペイオフへ慌てるほどの事もなし
恰幅の立派な方が秘書らしい
生まじめな心が世間狭くする
躰きの元はやっぱり金だろう

奈良市 米田 恭昌

子を生んでまだマル文字を書く娘
拝啓と他人行儀な子の無心
すべり止めまず安心を買う受験
据え膳をためらっているダメ男

和歌山市 松原 寿子

愛用のカップへ混ざる火の記憶
トライアングル音色の裏に闇がある
約束が流れ指先あれてくる
やさしい瞳で風が見詰めてくれている

岡山県 富坂 志重

散り急ぐ咲いたサクラに風の葬
薬局に入りクスリの名が出ない
夢がまだ少し残ってます八十路
誰のまね可愛曾孫の口答え

岡山県 福原 悦子

表面に見せぬ女の意地一つ
森林浴青い空気を一人占め
音符から外れた母の唄が好き
心配も試練と思えば軽くなる

いま丁度わたし遊びの適齢期
幾何学の合縁奇縁まだつづく
水盤にやさしいディレクターになり
手作りの器に純愛を盛ろう

倉吉市 米田 幸子

どぶ川に捨てても金は貸さぬ主義
ワンテンポおくれて母が笑い出す
不揃いのリング飾でより分ける
長生きはこわい私も骨粗鬆

米子市 永井 美津子

荒波を幾度も越えたまるい石
退院しやっと私の春となる
かえりたい亡夫と暮らしたあの頃に
彼方此方に年度替わりのもぐらが出

鳥取県 乾 喜与志

頭ボー目はボー霞み独りぼち
浄土まで書籍を持って行こうかな
生かされるかざりは生きるナマンダブ
日本語が巧くなってる他所のひと

鳥取県 吉田 孔美子

お招きにワイン一本抱いて乗る
助手席に乗って上げるのわたしだけ
乗ってから窓開けながら本音吐く
印相家相仰せを守り不便なし

鳥取県 太田 幸枝

たった一本残った奥歯念を入れ
牀糸のまんま柩の中に入れ
賞味期限すぎた娘が売れました
OB会だんだん酒量減って来た

鳥取県 村上 信子

聞き違い背中を汗が流れ出す
親切がすぎて誤解の噂立つ
人間を信じすぎては騙される
真つ先に散った花びらいとおしむ

鳥取県 黒田 くに子

春陽燦燦うじうじしては居られない
考えて商品券にする返し
音無しのかまえて職場間引かれる
ときどきは歳を忘れて童唄

鳥取県 国森 武子

花吹雪今日を限りの君とゆく
太陽はさんさん桜吹雪なり
雨も風も桜散るまで待っていて
誰がためにさくら さくらをくり返す

鳥取県 下田 茂登子

年下のおとこがくれた手紙抱く
別れたい別れたくないのも夫婦
別れても愛していると言う手紙
知りもせぬ噂を撒いて村汚す

松江市 小川 注湖

雑談が小耳を刺して胸を刺す
路地裏に絆を結ぶご挨拶
一単位見本手に説く栄養士
これだけと言いつては糖乱れ

出雲市 板垣 夢酔

ポーナスも昇給もなし不況風
デフレ去れ必至で祈る小企業
偽りの鶏牛肉に買手飽き
赤字線いずれ線路ははずされる

出雲市 小玉 満江

花の宿しみじみ聞いたよされ節
ママは留守みんなだまって食事する
足腰が痛い痛い遊び好き
ケーキ屋の前で家族の顔浮かべ

出雲市 岡あきら

祝言の知らせに財布あわてだす
老木に花老骨も燃えている
青春の絵を開発に奪われる
人権と言う衝立が立っている

唐津市 山口 高明

上役の庭の手入れに狩り出され
噴火口覗いてふたり足が萎え
四月八日の雨はしとしと灌仏会
襲われる美女でもないが護身術

自選集

橘 高 薫 風

河 井 庸 佑

老若なし多賀子康子のはるばると
(川柳塔900号記念大会 3句)
 盃を挙げよ皆々眉上げよ

喜寿われはカイバル峠越え行かん
 淡々と武士道プラトニッククラブ
 みなづきに耳こそばゆき恋もする

板 尾 岳 人

散り急ぐサクラに合わす旅支度 (故石原伯峯氏)
 全身を縁に抱かれ釈迦如来 (西明寺)
 神様を鈴で起していた無鬼翁 (丹波篠山)
 櫓が軋む音へ水鳥お出迎え (近江水郷めぐり)
 芝桜会えばはなしを聞いてくれ (三田芝桜公園)

越 智 一 水

世のさわぎ知らぬではなし揚雲雀
 杖ついた松枝をほめ苔をほめ
 ありがたや春の光は薬です
 春ですとポストをなでる柳の芽
 汐干狩り人の影掘り影を掘り

リストラで地図書きかえる定年後
 失敗も無駄にはしない処世術
 あがくから余計傷口深くなる
 さりげない心配りが身に染みる
 万歩計ノルマ届かず回り道

川 島 諷云児

一隅を照らす小さな自負を持つ
 真つ直ぐに歩き絶えない向こう傷
 身構えてばかり悲しい影法師
 待つ身にも待たせる身にも雨しとど
 ほどほどの程を知らない差し出口

木 村 あきら

上向いて歩こう空が碧いから
 火星への夢果てしない天文台
 空駆ける天馬に夢を賭けてみる
 自己過信 道の小石に蹴躓く
 科学者の夢は宇宙を駆け巡る

工藤吟笑

舞扇老いの心に春を見る
雪印濁った水を吞まされる

矢尻研ぐ女でつかい夢を追う
あきらめぬ夢老兵の胸に抱く
生命の鼓動も確か手編棒

黒川紫香

旅立ちの朝を見送る花吹雪
少年の瞳に希望湧く港

アホらしい等と済ましてしまう恋
立ち止る小川に泳ぐメダカ達
丸窓に雀の影が映る窓

小西雄々

孤独から抜け一坪の庭に佇つ
デートコース テンポ落して月仰ぐ
リストラの覚悟へ思う地獄絵図
羊水を蹴つてアピールする元氣
喜びが続き妬心の目で見られ

小林由多香

温泉はもつたないないな湯があふれ
日本も広いと思う花だより
朝ごはんすめば日曜昼になり
憎いのは姑に味方をする夫
銭湯にたまには行つて足のばす

斉藤 晶

火まつりの炎に消えていく迷い
屠殺場の牛は何かを言いたげに
アフガンの芽吹く青さにほっとする
夢でしか逢えぬ十五のままでの亡兄
青空になるまで雲は旅をする

田口虹汀

高速渋滞 佐賀も都になりました
佐番出席東京からお客人
栗御大御夫妻の足跡偲ぶ吉野ヶ里
縞の財布は母上様の生き形見
半年はお世話になった掘炬燵

竹内紫鏑

先代の写真そのまま産業史
郵便書簡 写真を送るまめな人
葉書濃し地方紙の記事貼つてあり
時代劇 染料の白光りすぎ
自衛隊 勧める射撃シミュレーター(広報センター見学)

玉置重人

靴すべりするりと今日は佳い話
腹八分言いたいことはたとある
リストラの風が気になる不眠症
長い尻持った夫の友が来る
川の幅分相応の人がよし

月原宵明

またと無い友悪友と呼んでいる
膝打ったので忘れたを思い出し
万歩計小学児童にお辞儀され
ふる里の訛りに駅が近くなる
東から西から一本提げてくる

恒松町紅

携帯は持ったが老いの飾りもの
落ち着いたいい雰囲気へ花粉症
家光のようにほゆかぬ三代目
有難いことに見真似で土が好き
傘寿まだ酒と恋路と転た寝と

遠山可住

御利益は遠いところから来る人に
戦友の絆来世でまた会おう
追伸へ薄桃色を添えておく
捕物帳阿呆がひとり涙する
その先を読んで当ったことがない

土橋螢

武士道を知らぬ男に花が散る
咲き満ちてこぼるる花も天の命
菊の芽を挿し死にざまを考える
花冷えて浮いたところは地につかず
五十年むかしの事を語り合う

西田柳宏子

いつどんな時でも笑顔絶えぬ老母
老母の味噌汁に満ち足り朝を出る
兄ちゃんと同じ弁当見せ歩き
へらず口 四の五の言うて煙に巻き
親馬鹿と言われる頬のたるみよう

西村早苗

ボチまでも花と一緒に疲れてる
唇さみし口へこぼれる春苺
蛭こいこい雨へ命の火がとまる
花ほけの僧衣唱える波羅密多
内緒ごと耳はピアスの穴で足り

野田素身郎

ひな祭り一人はほしい男の兄
春が来た高校野球にプロ野球
身障者の花見今年も車椅子
花見の候三度目の風邪をひき
畳替えも一つかえたいものがある

野村太茂津

ブラジルだ阿吽の呼吸で友と会う
初恋の人と出会うた七十年
胸溢れ涙泳えるおじいちゃん
僕とは違う今が大事だ今の君
もう一度言おう君が大事だ

波多野 五楽庵

葉桜の頃におめもじいたしたく
耳鳴りや鬼千匹の舞踏会
古里のしがらみ背負う重さなり
ヴィヨンの奈落も月の泣く夜も
石である事を忘れた石だった

藤井 明朗

神の水生かされ土産にする健康
美人にみえるおんな微妙な薄化粧
温泉で湯治こちよい夢押し寄せる
少子化を無視再教育が急務
小国の内戦 難民が憐れなり

藤村 ム 女

物忘れ指の先から老いてゆく
父の樹が私を叱るから歩く
四代を生きて悔いない座りだこ
辞書をくる ほとほと老いを知らされる
晩年の亡母に似て来て母恋し

舟木 与根一

代議士の財布この頃狙われる
衣の下危なっかしい銭動く
有能な秘書に税金踊らされ
悪銭が身につく顔が売れている
桁違いの暮し作法は真似で済み

芳地 狸村

うめ地下に迷いに迷う老夫婦
うめ地下に昔の顔が消えている
久し振り歩くうめ地下様変り
USJの看板人気のJR
家族連れ同士明るいバイキング（ヒルトンホテル）

堀端 三男

桜前線北上速度新記録
老いの冷水読んで楽しい四字熟語
顔が立つ立たと揉めている子供
百面相やってあくびを噛みころす
見て見ると僕の背広は無地ばかり

宮口 笛生

まああがれあがれと酒の用意する
ずつしりとふくらむ財布持つて旅
天気男 天気女で晴れた旅
満干の落差鳴門に渦が巻く
スムーズに予定通りのバスの旅

森下 愛論

美しい罨に嵌まって自転する
罪業をまとめ束ねて燃え果たす
ゆつくりと鼓動聞いている老いの胸
狡猾に老いた演技を使い分け
虚勢張る一徹者の癖を知る

両川 洋々

石川 侃流洞

アフガンの子等よ三食食べてるか
避難した故郷の島も春だろう
鎧着て自爆のテロへ備えとく
米びつの底はすっかり冬である
シナリオも演出もない半生よ

八木 千代

河内 天笑

歳月を許す枕を干している
パイプ枕の中で復活する昔
眠る時刻に寝るとまごまごする枕
枕の裏の不安は正体不明
老いた枕の栄養に毒微量ずつ

八十田 洞庵

徒花の華麗実の無い虚勢かも
笑顔の裏に冷えたまなざし見てしまっ
結び目がとけてあつさり他人の目
死んだとは思えぬ友の冷えた肌
傷口を洗うと女まだ光る

阿 萬 萬 的

第四十二回日本南画院展にて
昇龍の目はまっすぐに天睨む
諸佛来迎七色の虹低く見て
時の移りを静かに見つめる磨崖佛
音もなく水郷の木々春を知る

第4回「馬っこ」川柳誌上全国大会

応募期間 受付開始 5月1日
締切 9月30日
課題 「馬」2句 (新作に限る)

課 選 者

札幌川柳社 (北海道)	斉藤雄	大岸柳
おかじょうき川柳社 (青森)	北野岳	豊秋
川柳はつかり吟社 (岩手)	藤沢て	ま 晚竹
明日香川柳社 (埼玉)	野谷秀	路
川柳研究社 (東京)	大木正	夢
NHK学園 (神奈川)	脇坂楓	楽
川柳えんぴつ社 (富山)	西出早	川
川柳塔社 (大阪)	山口	双鳥
光川柳社 (山口)	早川	北灯
戸畑あやめ川柳会 (福岡)	藤井	

投句料 1000円 (郵便小為替)

発表 11月3日

賞 市長賞外25位まで

(盾その他・発表誌呈)

投句先 〒028-0516 遠野市穀町6-17

鈴木南水 TEL 0198-62-4843

地固めをして千号へ先ず一歩
人間の夢は力を持っている
紅葉よししやくなげもよし高野山
若い日に憶えた歌詞は忘れない
医療費のボデーブローが効いてきた

水煙砂

板尾 岳人 選

アルゼンチン 松井 美稚子

利休百首の訓えから女咲く

迷い捨て綱を引かせて妥協する

水面下 酸素不足のアルゼンチン

ここまで来て弱気で住めぬ陸の亀

梅雨前線 晴れる日もある老いの坂

和歌山市 武本 碧

痛い目に遭ってから知る母の釘

跳ね癖がついて帰って来ない毬

キャンパスへ心の襷を溶く絵筆

すれ違いまた相寄って夫婦独楽

頬杖はつかぬ人生の旅靴

和歌山市 土屋 起世子

エプロンを花柄に替えちらし寿司

晩学に少しおしゃれな眼鏡買う

ぬるま湯に飽きて着替えた作業服

ラベルより姑の目を信じよう

優しさに囲まれカバン重くなる

和歌山市 上地 登美代

夜桜へ月も酔ってる人の波

決意して跳ねても芥子の粒ほどに

パンジーが咲いて庭から笑い声

七重八重咲いてツツジの自己主張

馬の耳へ小言ばかりの日が暮れる

和歌山県 中村 君枝

年金へ刺身のつまが幅さかす

的外れ同士で夫婦馬が合い

外堀を埋めて心が通じ合う

四角ばる心を愛が解きほぐす

気力では妻に負けてる定年後

横浜市 近藤 道子

ありがとうたくさん言って陽が暮れる

ほんとうのことが分かってだまりこむ

落ち椿 愛のかたちで転がりぬ

負け惜しみいやで自分を駆り立てる

いつまでも尻尾を振っていられない

札幌市 三浦 強 一

綾部市 藤田 芳郎

無視されている間に爪を研いでいる
中立を守りゆっくり眼鏡拭く
走るより休まず歩く亀となる
魂がゆっくり抜けてゆく昼寝
階段を夜がゆっくり降りてくる

川崎市 小林 久美子

戸を叩く春一番に師の計報(夢田満秋先生の死を悼む)

東大阪市 今岡 貞人

弔辞読む名誉主幹の背がふるえ
惜別の涙にくもる師の寝顔
句づくりの二人三脚途中下車
筆まめの遺品となりし手紙読む

逗子市 神戸 みず帆

今日こそは言おうと鍋を温める
気が少し動き値札を確かめる
投げ返すボールを外らす変化球
職退いて夫婦の歩幅合ってくる
言わないでおうやがては通る道

京都府 前上 英 一

点滴のしずくに絡みつくいのち
肩の荷の重さに耐えた丸い背な
神様も居留守つきたい絵馬の数
道程の長さに触れぬ父の靴
お互いの汗を労う宿浴衣

見るだけの約束で来た手の荷物
五十年スランプ知らぬ酒である
斬り損じあつて三軒目の暖簾
脳天で昨日の酒が釘を打つ
切れば敵切らねば枷になる尻尾

寒椿ぼろりと過去は引きずらぬ
水溜まり何度も越えて今日がある
疑問符がいつばい落ちている余生
てのひらで未完の夢をあたためる
一合をゆっくりと飲む今日を飲む

河内長野市 大西 文次

数珠持っているその割に生臭い
南無阿弥陀言うてる内は大丈夫
お腹の子仕方ないではすまされぬ
老眼鏡かけても読めぬ韓国語
来年もまた会いましょう路のとう

河内長野市 柏本 靖子

母の日の似顔絵とても美人です
野仏が迎えてくれる過疎の里
胸張って主婦業ですと言う自信
正直な鏡に歳を見抜かれる
雪溶けの水さらさらと春の音

大阪市 小泉 ひさ乃

母の糸切れて聞こえぬ糸電話
ライバルの花つぎつぎと咲いていく
同居して馬鹿になろうと言いきかす
軽はずみな喉へ小骨が突き刺さる
無意味でも妻に大事なことからしい

大阪市 三浦 千津子

人溢れハローワークの寒い春
臍くりのゆとりか一人浮いている
勇退の美学そのまま落椿
少しづつ弱気貌出す荷を背負う
密やかに姥捨山も笑う春

和泉市 小坂 凡英

古稀に生きしみじみと識る人の業
健康が自慢 保険料負けて欲し
地獄でもいいポックリと願います
初恋の話は孫へ老い二人
お隣がお上手過ぎる借農園

吹田市 木下 敏子

生き方は明るい方へ向いて咲き
つらい日も背筋伸ばして出る踵
倅せを分け合うひとと花の下
どの花も今をしっかり咲いて見せ
もう七十まだ古稀だよと髪染める

神戸市 山 口 光 久

諍いに勝って不安がふと襲う
耐えてのち大願成就 雪椿
幸せな今に感謝の笛を吹く
夫婦でも許容範囲を守る義務
止まり木に元氣を出せと励まされ

神戸市 木村 忠 義

年の功 人を見る目ができました
嘲るとはわけも知らずに浅はかな
晩酌で心の旅を欠かさない
晩酌のうまさでわかるコンディション
暗号で今日の日記の一部書く

鳥取市 森 美智代

迷いなど持たぬ桜は咲き誇る
いたずらな風にまかせた花嵐
潔く散ってはならぬ八重桜
覆水の中で泳いでいる金魚
パイオフに悩むことなどないくらし

鳥取市 山 宮 愛 恵

ひたすらに広い世間を生きつづけ
百歳の此処が都という重み
百歳が甘える広い子の背中
恋う人の味の広がる路のとう
こんな夜はワイン飲もうかお月さま

鳥取市 宮脇道子

戦より麦を植えろと吠えてみる
我が足に感謝しながら詩とあそぶ
幸福の愛の滴か桜花舞う
脳の錆研ぎを入れても光らない
母の顔潰す気はない物忘れ

鳥取県 前坂美佐枝

先を行くあなただんだん遠くなる
ピエロにも越えてはならぬ橋がある
リストラの波がわたしに寄せてくる
目の中に入れておきたい人がいる
ピエロにもピエロの掟あると言う

鳥取県 蔵本悦子

何事もなかったように春が来る
あれこれと春は欲張りかも知れぬ
時々壁に当たって目を覚ます
春だものきつと跳べるにちがいない
青春の扉はずつと開けたまま

岡山県 米さくゑ

合わせ味噌それぞれの味主張する
枕木の下に聞こえる鉄道歌
口下手な男の飯を炊いている
意地悪も喧嘩もするがずっと好き
本年も達者で回れ夫婦独楽

岡山市 藤原忠志

自分史の一行嘘が書いてある
妻だけをこっちに向かす鈴を振る
付け替える仮面はいつも持っている
肩パッド外して母に近づきぬ
白旗を振ってるだけで気が休む

唐津市 坂本兵八郎

愛想が尽きると影も言っている
道化師の面取り外す家の前
停年日ピエロにご苦勞様でした
ひとしきり涙の母がまた許す
巢作りを地球の裏にしそうな娘

今治市 塩路よしみ

うれしい日 鏡きれいに透き通る
人間に戻してくれる童唄
いつもの時間待ちくたびれたイヤリング
ふところが深くて石も丸くなる
ダイオキシンの空とは知らず泳ぐ鯉

香川県 伊勢八重子

学び舎を出てから先の地図探し
人の道外せば何時かつけが来る
花盛り寄り道ばかり万歩計
今置いたはずがまた無い花鉢
国境を無断で黄砂飛んで来る

沖繩県 杉谷 一栄

親切にされて自分は何だろう
難題も成ってくる理と受け止める
永らえて不思議な縁沖繩に
辞書ないと書けなくなったボールペン

日高市 根岸 方子

Eメール世界の夢を引き寄せる
封書にも足りぬ利息の通知来る
リストラに低い鼻までへし折られ
人多し桜の風情へもの申す

秋田県 湊 修水

目に鼻に春が来ました花粉症
不景気を蹴飛ばしてくれ春一番
リストラが花粉まみれで荒れ狂う
仕方なく餅を焼いてる老い二人

川崎市 浦野 昭志

バスツアー母の郷里を走り抜け
早くなる花見 幹事を走らせる
春雨に打たれて草が嬉しそう
国宝と聞いて深々頭下げ

藤沢市 妹尾 安子

初めての町と思えぬ温い風
世話好きの母のおかげでひ弱な子
いいところで桜を散らす名奉行
分の悪い話になると眠る父

町田市 土田 今日子

男とは寡黙なものと父の背
折り紙へ手持ち無沙汰な鶴が増え
求職に鉛のような歩を運ぶ
一匹の鬼棲まわせる猜疑心

横浜市 鈴江 純子

作るたび違った味になる料理
抵抗の衰え風邪に居座られ
要る時に隠れてしまう備忘録
ふるさとへ老舗の味が呼び戻す

横浜市 巖田 かず枝

手術日に合わせて桜咲いてくれ
入院の三食昼寝手術付き
真珠婚 細く長くを旨しましよ
病人となつてかわいいうりをする

横浜市 生坂 サト子

お使いに衝動買いを防ぐメモ
品揃い過ぎて迷っていて疲れ
シャープさを武器に突っ込み受けている
創業の古さへ捻子を巻き直す

横浜市 荒井 広和

極楽の句会の選者断れず (満秋氏を弔む)
風呂敷の隅で顔出す自画自賛
常識の物指しがない永田町
落日の海に溶け込む母の影

横浜市 芦田 鈴美

満開の桜に嘘はつけません
母さんにあのねあのねがつきまとい
悪口もうれし話の中に居る

天の句を提げて閻魔をくすぐりに（満秋先生とお別れ）

横浜市 長島 亜希子

退職で夫三食昼寝つき

刺のあるひと言返し気を晴らす

春の野に雑草と呼ぶものはない

大国の正義に翻弄される民

横浜市 三村 八重子

焦点をはかして流す処世術

合格に親類中を鳴らすべし

チューリップ首をかしげて今日は閉じ

別れ際一言洩れて冬の陣

横浜市 福田 由美子

ピンとたち白髪が主張する毛染め

親よりもテレビ教える子のしつけ

パソコンのあやまり役に雇われる

米寿すぎ体操だけが我が仕事

横浜市 金森 徳三

商店街虫歯のように穴があき

手放さぬメモがあるけど句がのらぬ

清濁を合わせ牛肉食べている

気の毒にペイオフ悩む人の顔

横浜市 北沢 街湖

OKとたった二文字で来るメール
爛漫に浮かれカメラも梯子する
満開の桜に似合う青い空

てにをはの一字に陰り出す心

横浜市 石原 三郎

席隙間大きなお尻にはじかれる

温暖化桜の花が慌てだす

許された五勺の酒が貴重品

満開にいたずら風が吹き荒れる

横浜市 平 達也

浅漬に自然の味を噛みしめる

剃るたびに歴史刻んだ皺のぼす

死の淵を乗り越え覚めてただ感謝

忘れない 忘れない 面影を

横浜市 伊藤 ふみ

白百合の芽ぶきを見つめ師を思う

焼香へ拳骨出そう遺影から

温暖化花を愛でる目狂いそう

石垣の隙間の花と対話する

東京都 井上 つよし

友の家捜しあぐねて春に会い

風紋の砂丘に僕と月見草

鍵穴に手招きされる好奇心

咲き揃う花に鉄が怖けづき

東京都 清原悦子

お名前で評価されてる不公平
すすくと伸びる草にも命あり
我慢して捨てられてから強くなり
ひと駅を歩けば空も晴れてくる

武蔵野市 亀井円女

君が代と日の丸に生き悔いはいはなし
青い空今日は炊きましょ塩昆布
はよ丸うおなりと今日も亡母の声
夫は逝きラストダンスはお預けに

日立市 加藤権悟

大空に大器晩成まだ信じ
丸い背の母は一会の花に触れ
人生の西日に妻と手をつなぎ
子のために杭はしっかり打っておく

静岡市 中西雅

歳重ね修正液は間に合わせぬ
黄砂舞い春告げ鳥の暗い声
鈍行の絵になる風にふれる旅
花見旅予定がつかぬ狂い咲き

岐阜市 平野あずま

雪解けが春を集めて瀬を下る
音合わせ 妻と明日の曲奏で
新しい姓が憧れだった母
念入りに見たくはないが非常口

草津市 久保和友

猫逃げる私の過去も逃げてゆく
黒猫が好きエドガー アラン ポー読んでから
国鉄一家そんな死語でもなつかしい
四月馬鹿きようは私の誕生日

京都市 清水英旺

ふと思う来世も妻にするだろう
ペイオフに関わりがないのが悔し
幹なでてたたいて慈愛の桜守
来春は花つけぬかも老い桜

京都市 三宅満子

大往生 母は一〇一歳で逝く(三月十五日他界)
白和えは真似が出来ない母の味
還暦の友と若さを競り合って
免許などないが私はプロの主婦

大阪府 高木道子

ペイオフの無縁な我が家四月来る
うぐいすも上手に鳴きて春本番
花粉症マスクしても美人だな
ダイエット一日だけで疲れ果て

大阪市 尾崎黄紅

空の旅したことないと自慢する
いま老いも三猿主義の世ではない
なにごとにもまだまだという心掛け
恙なく積木崩しを繰り返し

組の姉やと母は手術台

大阪市 中川 千都子

夜道では我の手をひく子は男
愛という漢字を習う四年生
本閉じて大雨を聞くしんと聴く

大阪市 熊代 菜月

リストラの夫が掃除機かけている
切札は使わないまま五十年
うそついた心を裁く影法師
禁煙のチャンスのがした快復期

大阪市 伊藤 博仁

この時とばかりに肉を食うておる
休肝日逆らっている弱い虫
自主トレの成果があつて北帰行
帰られぬ何か訳あり鴨夫婦

大阪市 星野 きらり

春風に時どきひっぱたかれてる
もどり寒またようこそと矢を放つ
追憶のエッセー洪滞くり返し
井へ生さる幸せてんこ盛り

大阪市 岩崎 公誠

デパートは生き残りへの厚化粧
二枚舌使い馴れてる外務省
舌先の言い訳剥げて逃げられぬ
脳と手が連動しない電池切れ

童謡で目頭潤む歳となり

大阪市 池上 清治

美味しいと褒めて労う妻の味
老獺と淑女のバトル外務省
尾瀬の道 帽子の列が行き帰り

和泉市 横山 捷也

記念日に妻に満点つけておく
眉引いて過去は見えないと言う女
手の届くところに妻が居る安堵
そこそこの縁でセールスやつて来る

泉佐野市 稲葉 洋

五感みな春の動きになつてきし
まだ何か道ありそうで引くみくじ
淋しさは住民票の以下余白
墓にまで白状しない罪がある

泉佐野市 備後 三代子

高砂や五十五年の喜寿傘寿
両親の年忌つとめて花吹雪
跳ぶ程もない溝をとぶ病み上り
病んで知る夫のやさしさありがたさ

柏原市 永浜 加津子

雪柳こぼれてひとり 春なのに
幸運のホクロを信じ迷い解く
バラ園も径のハコベも同じ春
締切りへ見切り発車に悔いばかり

河内長野市 木太久 正一

顔見える朝のラジオの友となり

去年七 今年十一 牡丹咲き

星野トラ今年一味ちがうねん

散歩がてらスーパード行きもまた楽し

河内長野市 村上直樹

剥き出しの闘志が燃えた傷の跡

がむしゃらに走って転ぶも神の意志

肩書きに合わせ寸志も伸び縮み

初志実るまでは消さぬぞ命の火

堺市 藤井 一二三

老醜を笑うて桜いさぎよし

正義感にもえた若さに遠くいる

散りぎわの見事さ褒めて春を老い

花びらの落つ音のして古寺の庭

堺市 梶本 哲平

早期教育子ども息切れして頓挫

子育てのメニューはきつと破かれる

自分から求めて会得欲が出る

子の蹠 学校責める親が居り

堺市 大橋 錦

パソコンは夫婦の仲もつボケ封じ

気が付けば夫の肩線低く見え

老化だと言われてあつく歩く日々

気がつけばよもぎつんでる花見です

寝屋川市 岡本 勲

スタートが良すぎて心配タイガース

運のない人でいつでも間が悪い

ひたむきな愛の重荷にくる別れ

月の雫に濡れて歩いた頃の夢

箕面市 北川 ヤギエ

母の目に過去の涙が溢れだす

春風が土筆とワルツ踊り出す

菜の花に紋白蝶の円舞曲

ウイंकをしてるダルマに手を合わす

富田林市 稻川 惠勇

茶柱の験が担げぬティーバッグ

四月馬鹿 楷書の父は蚊帳の外

無言電話まさかがよぎり傷疼く

膝までが旨い話ににじり寄る

羽曳野市 森 下一知

自動ドア病に細る身を知らず

やりくりが妻の美肌を虐げる

堪忍袋に結び直した跡がある

玉葱に涙を貰う定年後

羽曳野市 山本 たけし

初夏の風笑顔さわやか衣替え

寄るべなき古里を恋う根無し草

老妻と阿吽の呼吸半世紀

そよ風に触れて田舎の温さ知る

統計の老年層に組み込まれ

ペイオフの悩み我が家は無関係

お花見も景気対策前倒し

みずほ銀 四月馬鹿では済まされず

羽曳野市 永田 章司

八十八母の笑顔に助けられ

あじさいの魅力に雨天決行で

アルバムに行水してた頃のこと

梅漬けて夏の暑さを待っている

羽曳野市 福田 悦子

定年日おかえりなさい今日かぎり

定年へねぎらい合うてこそ夫婦

妬いた日はわたしにあった女の火

昼の月女ごころがわかるまい

東大阪市 田中 美弥子

やせていく休耕田の独り言

相続の重荷に耐えるカタツムリ

満開の野草ジャンプの風を待つ

針箱の釦昔をしゃべりだす

八尾市 松葉 君江

聞く方が平気でおれぬ夫婦仲

ペイオフの諭吉をそつと腹に巻く

ブライドが振り向くことを許さない

自分史を綴る強さが母にある

八尾市 平川 幸枝

荷くずれを何度したやら夫婦舟

三億円当る夢より明日の策

髪染めてシルバー席を見ないふり

偶然の風に生まれてくるドラマ

八尾市 田中 トシエ

かたくりの花への思慕の好奇心

花いかだ歩幅にあわせ土手流る

風邪氣味を払いのけたく紅をさす

言い切った言葉がつれて来た不安

兵庫県 黒崎 美紗子

卒業へもう母の手は届かない

野菜にも人気の上下市場籠

黒豆の人氣楀持つ手も軽い

生き甲斐へスランプがちなペン握る

篠山市 円増 純子

梅桃と桜まとめて咲かず神

ペイオフを先頭の蟻思案する

ペランダで孤立無援の鯉のぼり

霊柩車見てから急ぎ買う馬券

神戸市 伊勢田 毅

親馬鹿と他人に言われたくはない

踏まれないために尻尾を振っている

沈まねばモグラ叩きが飛んでくる

哀しみを埋める折り紙だつてある

神戸市 両川 無限

奈良県 江波 正純

雑念を絵の具とともに塗りこめるとりあえず平気な顔で生きている
添え書きのカナクギ流が温かい
飽き性を叱る我が家の物置き場

和歌山県 堂上 泰子

底辺でつながっている離党劇
盲導犬を信じ切ってる白い杖
爛漫の花煩惱を深くする
山桜 ハラハラと散る古戦場

和歌山県 永廣 昇太郎

爪に灯をともした過去をもつ老舗
病みて知る命の重さ肩にのり
不況風 心を鬼に世を渡り
傘寿今 希望を捨てず明日に生き

和歌山県 吉田 比佐子

お下がりもブランド品は嬉しそう
姑が次男の家へ天下り
歳重ね親に似てくる我が仕事
親の歳あつと言う間に通り過ぎ

田辺市 大峠 可動

千匹の蟻の頭痛も風を生む
挽歌はいらぬ妻と喜劇を繰り返す
白蘭も朱蘭も聞けば天寿とか
罰点の数だけ泣いた春の章

鳥取県 西垣 美知子

脱線もせずによく来た遠い道
かたくなな心も解けて旅に出る
見栄っぱり見えないとこでケチになり
散るまいと生きて険しい崖に立つ

鳥取県 吉田 弘子

物忘れアハハと笑い底い合い
たくさんの思い出残し夫婦かな
異常気象短い春を咲き急ぐ
雪舟展 感激に酔い人に酔い

鳥取県 鈴木 一弘

やむを得ず梯子を掛けて穴を止め
鉄板の上でやりくり味をつけ
めぐりあいなかなか解けぬもつれ糸
長い目で見ればつながる点と線

鳥取県 西沖 彰雄

もう仮面外そう喜寿の春が来る
お金とは不思議敵にも味方にも
本当の敵は外野に居るらしい
なるようになるさ明日も朝は来る

鳥取県 池澤 大鯨

泥舟の座礁している養魚池(中国旅行四句)
マツチ箱積み重ねている農家群
平鉋で削り取られた野良の果て
周荘の市場でさがす大鯨

鳥取県 山下 節子

気が付けばいつも話題の外にいる

名案を帽子の中で練っている

ライバルがいつも私の前にいる

怖いのは人間ですか金ですか

鳥取県 澤 裕子

ささやかな道楽生きる糧となる

ファックスもメールも縁の無いくらし

特売の活字を主婦は見逃さぬ

白紙には戻れぬ火種抱いている

鳥取県 鳥羽 直市

あいさつに嘘も飾って盛りあげる

困ること多くて眠り浅くなる

薄味に馴れて味噌汁味が出る

哀しみの涙かくして歯をみがく

鳥取県 平木 公子

嘘半分乗せて噂が歩きだす

アクセルは効かぬが気力だけはある

ペイオフが関係ないのも芸がない

器ではないが順番きたらしい

鳥取県 細田 裕子

待ったなし決断せまる別れ道

満点は無理平均で良しとする

真心はやっぱ手紙届きます

人間はややこしいからおもしろい

鳥取県 橋谷 静江

結論を先に出したら落ちつかず

ストレスに繋がるような事は避け

嬉しさが先にとび出し熨斗袋

夫婦なら頑張れるだろう老いの坂

鳥取県 河田 のり代

結び文 今も青春八十路です

浮き沈み生きた証だ頑固張る

幾人も口止めしては秘密もれ

老いてなお蘭の魅力に嫉妬する

鳥取県 福永 ひかり

謙虚さがみえる死線を越えてから

しばらくの友に水あけられている

亡母というところでもいつも出る涙

お祝いに今日も諭吉が一人出る

鳥取市 録沢 風花

つましく暮して温いしじみ汁

夜桜のため息を聞くおぼろ月

三界にすっかり城を持つおんな

酸性雨 記憶の糸も切れそうだ

倉吉市 牧田 賀寿恵

一円の利子がなかなか生れない

小説のあとがきだけは読んでみる

ポケットに私の秘密縫いこんだ

新聞を開いて今日が動きだす

倉吉市 森川 あらた

冗談と嘘の区別は知っている
小声でもうわさ話はしていない
空っぽのところに水を汲んでやる
魅力ある女になろう顔洗う

倉吉市 前田 喜美子

色っぽく水仙うなじ見せて咲く
鯉のぼり風とたわむれやんちゃくれ
初恋の寄せては返す波に泣く
青い空何かよいことある予感

米子市 足立 由美子

待つことに慣れ門灯を消しておく
ふるさとの空に思い出おいたまま
ふるさとの風がほのぼの連れてきた
倅せの使者か小鳩が庭にきた

米子市 小塩 智加恵

新聞が太いパイプの危倶知らず
遠い友会いたい願ひ追伸に
老い二人 静かに抹茶桜餅
出た言葉引つ込み出来ず眠れぬ夜

島根県 菅田 かつ子

インテリがまだ迷ってるあみだくじ
ハワイ行くところで覚めた惜しい夢
汚れてる世に澄んでいる山の水
とは言えど覗いて見たい壺の中

島根県 福岡 博利

万歳を聞くと古傷うずき出す
そのまが言いと言われて白髪なり
用件も忘れさせてる立ち話
早まって咲いたさくらに雪が舞う

島根県 武島 ちよえ

人並みと言われる線はどのあたり
ハミングで米を研いでる二人分
インテリの仮面の下に見た涙
言い訳に引っかかりそうちぎれ雲

出雲市 加藤 スズコ

琴の音にふれてストレス風に乗る
水温む心残して北帰行
急がずに桜街道行く余生
るんるんで春に漕ぎ出す衣更え

松江市 松浦 登志子

割りきれぬ思いのままで椿落ち
子の数にりんごを割って花の下
早咲きの桜に思い追いつけず
葉桜の下に優しい風がある

松江市 三島 淞丘

混乱の中を予算は通り抜け
無理をせず次のチャンス待つ余裕
自適の身きつめの箍をはめて置く
慎ましい暮らしに咲かず結び花

竹原市 正畑半覚

香川県 原賢

満開の桜を妻と見る無言

自己改革をせよと桜が言っている

もう少し散りたくないが風が吹く

花吹雪みんな仏の顔になる

宇部市 高山清子

少しだけばかりして話丸くする

ふり上げたこぶしに困る勘違い

故郷は幼馴染みも居て恋し

つくしんぼ摘んで小さな春の幸

高知県 百田幸

夫から名前呼ばれたことがない

鼻先におちた眼鏡に亡母うつる

アリバイを崩してしまう時刻表

土の声聞けぬ農婦で四苦八苦

高知市 小川てるみ

晩学の辞書を余生の友とする

バラ色のページもあつた子育て記

いい話耳を素通りして困る

春帽子少し若さを買いました

南国市 小原圭二

履歴書にリストラされたとは書けず

言い過ぎた女性議員がいられる

年寄りが薬の話ばかりする

筍が連日届く雨のあと

風雪を無言で耐えた鬼瓦

立ち話耐えてた犬の大欠伸

合掌の心 悪魔が変えたがり

お人好しいつも重荷を背負う羽目

今治市 渡邊伊津志

セクハラの境界線は見てくれず

肩パッド女史は背中風を切り

針穴に秘密の漏れる音がする

葛藤の真中に置くマグネット

松山市 山之内八重美

陽の恵み窓でふくら吸う布団

紅を差し春の宴の座敷雛

陽の当たる場所に出たいと待つダルマ

あの人のまさかと思うスキヤンダル

松山市 高橋宏臣

騙されてだまして笑う四月馬鹿

満開の散るより他はない桜

花散らす無情の風を待つ新芽

言い切った自分に少し惚れてみる

松山市 古手川光

倒産をするとは知らぬ入社式

就職はハローワークを狙います

申告もれ いや見解の相違です

釣銭が足りない時は言うて来る

北九州市 岡田 幸生

丁寧に生きよう妻ももう余生
わが腰に活断層のある不安

同棲のきつかけ問うと二日酔い

唐津市 岩崎 實

かなう夢かなわぬ夢も追いつく

夕菜の一つに野ぶき一握り

一輪の椿が落ちた活けかえる

富山市 松見 たえ

言い訳の策を練ってる終電車

腕組みを解いた親父にほっとする

真夏日の鈍る頭でする思案

新潟県 高野 不二

一寸した昨日のつかれ残る古稀

散髪の値上げも少しのぼそうか

預かって貰えるだけと言う利率

東京都 やまぐち 珠美

ぬくもりが故人の手紙からこぼれ

夢田満秋先生ご逝去

万人に好かれる欲を捨てぬ鬼

消去法を美德と散っていく桜

川崎市 中村 泰竜

子の顔に釣られて親の顔も見ろ

百歳の言葉に気付く忘れ物

順路からそれで自分を差別する

川崎市 塩沢 ひで

土器を掘る太古のねむり揺りおこす

リストラの父に哲学など言えず

流れ藻に似たくらしだがずっと平和

川崎市 大島 三四朗

咲き急ぐ桜に宴会乗りおくれ

葉ざぐらに歓迎されて花見会

間が悪い拍手視線にさらされる

横浜市 吉田 裕峰

体調がいいと忘れる常備薬

そんなはず無いがと嵌まるネズミ講

私にも名義貸しなら出来るのに

横浜市 布山 嘉信

称赞もない山桜凜と咲く

ケセラセラ今日も謳歌のキリギリス

海を越え黄砂花見に訪れる

横浜市 秋元 和可

うたかたの夢にまどろむ艶舞台

ほどほどがよろしい酒も親切も

鑑定に出したい古い石頭

横浜市 山梨 雅子

葉桜にお花見ツアー泣かされる

百円で買った品物名のりあげ

戦争の話で丸く座が和み

尾張旭市 三浦 きぬ

縁欠けた湯呑に歴史詰まってる
殿堂入りさせたいような電気釜
神仏はきつと居ますと信じ生き

大阪府 藤井 郁代

赤い傘さしてちよつぱり軽い足
畦に咲く可愛いあざみ針チクリ
鮮やかな花菖蒲には雨似合う

大阪府 野田 栄呼

二十年待つて下さい親孝行
春の陽を浴びて伸びすぎ露地野菜
平成の歴史を変えるタイガース

大阪府 東 文江

もらわれて行くとも知らず子犬じゃれ
雪景色消えてあちこち雪柳
春の野にツクシタンポポ勢揃い

大阪府 前田 忠子

春の鬱花の名所の青テント
ビル聳え太閤さんも小さく見え
挿し木してクローンの木を芽吹かせる

大阪府 大屋敷 婦美子

日だまりで苦勞話に花が咲き
散策も独りで淋し花の道
裏切りをすまいときめたわが春に

大阪府 桑田 ゆきの

菌の欠けた櫛で突いてる永田町
相傘に親しき歩となる花の雨
譲られた介護の椅子に延ばす距離

大阪府 小栢 こずえ

まっすぐに生きて来たのに背がまがり
見る人も見せる人ない化粧する
期待かけ肥料多めにやりすぎた

大阪市 大川 道子

こだわって洗濯機まだ二槽式
入門書読んでるうちに気が変わり
裸婦像の曲線なぞる白い指

大阪市 平井 露芳

シベリヤの寒気出つくしどつと春
お水取りコートの中でお陰うけ
白木蓮枯れて落ちたらただのゴミ

大阪市 中村 忠敬

愛犬に遺産やりたい親不孝
十センチ隙間があれば坐る尻
へそくりを隠したけれど場所忘れ

堺市 荻野 像山

蛍雪が流れ茶髪も夢新た
お流れを貰い新人顔を売る
本人が決めることだと涼し顔

堺市 藤原 恵

良い夢見きつと良い事ある予感
スカートの裾を踏むのは誰ですか
堪忍の足らぬ親です子と喧嘩

堺市 渡辺 さだを

人間は乗る欲望という電車
不況風ネオンが袖にからみつく
夫婦円満ちよっぴり溝があるが良い

堺市 河盛 龍三

呼び捨てが昔に戻すクラス会
不意の客待たせたままでパフ叩く
塩コンブ透かせば見える冬の海

交野市 田岡 九好

木蓮の胸に灯ともす白さにて
振り向けば紺青の空あるものを
春寒く手打ちうどんの旗が揺れ

門真市 矢阪 英雄

金以外価値を無視するヤングマン
世の中のせいにしてから遊び出す
よかったね残ったもので安堵して

岸和田市 亀井 皎月

週間の鬱も呑んでる縄のれん
老春は明日を頼りに生きている
故里の旬の味覚が乗る夕餉

岸和田市 坂口 英雄

ダイエツト順調に金減って行く
絶好調弱いチームといい勝負
ウォーキング同じラジオで笑ってる

吹田市 二宮 栄子

一枝の桜お部屋を春にする
花の下老いが集って一句読む
ボランテニアと趣味に老春謳歌する

吹田市 須磨 活恵

朱を少し足して自画像春にする
ふくよかな女の胸にある微罪
悔しくて空缶ひとつ蹴ってみる

高槻市 乙倉 武史

どうもどうもと圭三さんと桜散る
幾山河風雪耐えた癒し顔
花開くみんな努力の積み重ね

高槻市 大崎 侑子

吊り橋は行くも戻るも足震え
川べりのアベック日暮れ待つて増え
鍵っ子に鍵っ子なりの処世術

高槻市 執行 稲子

指切りのあれから待った糸電話
無造作に掴んだつもり当り籤
あいまいな仕種が招くラブコール

高槻市 安田 忠子

ふと仰ぐ亡母いるような星一つ
期待した清美さんにもあざむかれ
情けない男の涙宗男さん

大東市 南原 正和

終局で魔に魅入られて悪手打ち
風呼ぶか妻の無言が気にかかる
濁り酒 苦勞を胸にくつと呑む

豊中市 藤井 則彦

クロインの妻もおそらくうるさ型
物干しで妻とおいしい深呼吸
盛り場でひねもすあくびするタクシー

東大阪市 笠井 欣子

風引かぬようバソコンも早寝する
ジョギングの肩の花びら持ち帰る
お手本を前に進まぬ筆の先

枚方市 大昇 隆広

淡々と余命わずかも一歩ずつ
名も知れぬ町の隅にも夕陽射す
世の人をあわれと見るや夜の月

枚方市 小川 良吉

古寺めぐり時間を止めて癒している
花のもと人も至福の吉野山
花見酒人も桜もほんのりと

枚方市 莊司 弘之

桜梅ほかにもあるよとハナミズキ
星野さん思い出させるなせば成る
瀬戸内の夕日の橋と乾杯す

枚方市 二宮 紫鳳

満ちたりた天使の寝顔桜散る
生き様を残してくれた父の愛
澄み切った孫の瞳に浄化され

藤井寺市 伊藤 アヤ子

ゆさぶりは中堅にまでかけてくる
お喋りがはずれて立場悪くする
参道の出店目当てに参る寺

藤井寺市 吉田 喜代子

サクラチル父の脛折る不況風
ペイオフに心配いらぬ気の軽さ
言い勝って靴が重たい帰り道

藤井寺市 若松 雅枝

助け合い私に光くれた人
亡母だろか夜空に一つ光る星
ピカピカのランドセルにもある秘密

藤井寺市 増井 ヨシ枝

歩く夢ばかりで今日も車椅子
チャンネル権みんな握って春休み
タンポポが地べた這ってる日本産

藤井寺市 西村 栄一

兵庫県 徳平 毯子
もう一度出会つてみたい朝の夢

口車降りる所を考える
方言が飛び散っている地方バス
叱らない父のこわさは知っている

青春の思い出舞い込む花吹雪
信頼の絆ほどけて愛こほれ

箕面市 寺井 柳童

兵庫県 安達 厚

鶯の声猫八にほど遠い

ペイオフを他人ごととは情けない

耕すぞミミズもケラも退いとくれ
春ですねみんな楽しい葱坊主

鯛鮪回遊してる寿司が好き

今日までの罪を背負つて古希の旅

八尾市 與田 明

尼崎市 軸丸 勝巳

ストレスが溜まるとナベが光り出す

美しい蝶は前身には触れず
仲直り手打ちうどんでケリがつき

欲ばりが過ぎてはまった落し穴
アリバイのない日が続くひとり者

平成の不況はめしも銭もある

八尾市 中島 春江

尼崎市 河津 正治

時どきに本音そのまましゃべりたい

嘘一つ蛇口に流す春のうつ

週刊誌中吊りだけで事が足り

真実を噛み殺してる喉仏

無限の寂しさと安堵同居し

花暦 春を訪ねて西東

八尾市 山本 宏至

尼崎市 桑原 東園

目がかゆい春が来たかと花粉症

晴れた日は休まぬ妻の洗濯機

いたわりの言葉思わずわいてでる

バスデー鼻唄混じりの台所
今だから言える話に花が咲く
梅匂う風が遮断機駆け抜ける

兵庫県 岩本 美緒子

伊丹市 延寿庵 野薺

春なれば一度は味み土筆摘み

郁夫展静かに動く人の影

物忘れ不思議に思う歳となり

手のひらを抜けた矛盾が闇に揺れ
沸点を越えたと女魔女になる
親指が何だかんだとよく喋る

川西市 井本清山

生駒市 飛永ふりこ

相談は歳とするよう言う主治医
押し入れに未練が増える衣更え
叩かれて今日は至福の干し布団

ゴーギャンに危うい魔力引き摺られ
隙のないオシヤレにジョーク引つ込める
ゴーギヤスな衣装の裾に孤独見え

三田市 田中章子

生駒市 小西稔

かわせみに出会えて今日は二重丸
しあわせの風景にある桜の木
宝くじ勝負の赤着て並びましょ

気の流れうまく捉えて医者いらす
世の流れ変化激しく後ずさり
勝ちいくさ流れ止まらぬタイガース

三田市 辻開子

和歌山県 森下順子

孫の声おはようコールで体起き
パイオフの心配したい一度だけ
笑い福二人の夫婦元気にし

銀髪の素敵な人をまなうらに
分かれ道だったと思う過ぎてから
髭紳士増えていつしか慣らされる

篠山市 谷田多美子

和歌山県 村中悦男

こぶし咲くあの山峡に亡母の影
大学教授と知らずしゃべった丹波弁
おばあちゃん他人に言われそっぽ向く

洗顔を終えて鏡に気を入れる
墨汁をぬぐえば筆の憩う声
直角に打てば釘でもさからわず

宝塚市 飯西ミサヲ

和歌山県 松尾和香

八十路として今日から先は初体験
ロンドンも明日は雨かと床につく
有りがたや思えることを日に一度

開発に耐えて花咲く山桜
春がすみ習うペン字のほけ防止
人生の節目を刻む祝膳

奈良市 乾春雄

和歌山県 前岡健三郎

反骨の後ろ姿が病んでいる
家族みな稼いで違う腹時計
火ダルマにされた噂の厚化粧

紀ノ川に恩恵感謝和歌山県
リストラに明日は我が身の戦士達
改革も月日と共に影薄い

和歌山市 根田美子

口下手の癩癪玉が破裂する
姑さんに聞こえたかしらひとりごと

国会でわめいた杭が打たれてる

和歌山市 宮本三喜夫

外れても外れても買う宝くじ
削除され戸籍謄本一人だけ
老舗でも坊ちゃん育ち荷が重い

和歌山市 橋爪佐一

人間もリサイクルして若返り
贅肉を削ってくれる医師探しの
絞り口説いて見たが勘外れ

鳥取県 奥田保子

新風が沈滞ムード吹っ飛ばす
今日私変身したの気付いてよ
強いトラ昨年までは寝ていたか

鳥取県 山岡久枝

新緑にすっかり心洗われる
チューリップ咲いて童謡口ずさむ

山菜の呼ぶ声聞こえ落ち着かぬ

鳥取県 福西茶子

今日もまた所在不明の葱坊主
二極論どちらも一理ある悩み
喉元を過ぎるまで待つ茶番劇

桜花身を浄められ山下りぬ

イメージをこわさないよう目をつむる

いつせいに咲いた桜に人が酔う

鳥取県 平尾菜美

傷ついた同士納まる茶わんかご

思ってもいない奇蹟の底力

傷跡のなごりたたんで生きている

鳥取県 鳥羽玲子

さらさらの血流念じ水を飲む

箸とって戴く順位考える

リストラに遭って無職の風まとう

鳥取県 竹信照彦

しょうも無い事が嬉しい生きている

生きている証毎日ゴミが出る

花便り景気前線浮上せず

鳥取県 岡村孝明

通販のメールに流行教えられ

アクセルの調子合わせる老いの坂

満点と褒められ苦労実を結ぶ

鳥取県 竹森富久江

黄昏れる櫂の先にも夢ひかり

信頼の裂け目を花が埋めてくる

足跡がどんだん逃げる古い周波

鳥取県 藤山弘子

一時の元気をもらう夏祭り
それぞれのまつりに歴史知らされる
感動をいっぱいもらう花祭り

鳥取県 平井栄翁

進まない老いの蕾の片思い
ハミングが飛び出す老いの仕舞風呂
耐えきれず進む今宵の流れ星

鳥取県 河本晴子

新聞の来た音すでに動く今日
本人に聞けば並みではない苦労
玄関で苦手な人の声がする

鳥取市 福島庸二

この一歩前へと今日も心掛け
ふと我に返る瞬間かがみ前
大空を見上げて狭い心掃く

鳥取市 近藤秋星

今日もまた自作自演のドラマ描く
今度行く三途の川に橋がない
ペイオフの心配だけはせずに済み

鳥取市 岡田信恵

春の雨出合い別れを濡れて行く
春風が暗い心を純白に

花好きな貴方を招く花があり

鳥取市 田村邦昭

合格したらしい歩幅で歩いてる
古靴父の戦が詰まってる
年輪に笑われそうな浅い知恵

鳥取市 西尾敬之介

よいしょには誰も知らぬ顔をする
頰杖をついて童謡口ずさむ
泡とばし論ずるほどの価値はない

鳥取市 永原昌鼓

健康器具三日坊主に欠伸する
そよ風が優しく外へ誘い出す
満点の夫でないから気が置けぬ

鳥取市 谷岡清子

大空に出会い愛する梨の花
古稀路坂 万老夢見る百の道
雑草も春らんまんと背伸びする

鳥取市 山口千代子

お父さん貴方のおかげ暮せませす
字を読めば眼鏡取る人かける人
主なき庭飢えて悲しい花が咲き

鳥取市 横田春名

やさしいねちよつぱり嘘も添えてあり
春眠を楽しむ平和ありがたい
このままで居りたいけれど流される

倉吉市 西脇 日出国

富士見えてやつと安堵の長い旅

黒幕は秘書知らぬ事記憶なし

葉桜に別れ惜しむか花まばら

倉吉市 大下 智子

運開く鍵は自分で持っている

私小説十七文字にしてつなぐ

寄せる波しあわせ届く予感する

米子市 猪森 スミエ

ふるさとの山から転げ出す笑い

ふるさとはまだまだ達者茶の香り

髭剃って連休を待つ過疎の村

島根県 毛利 幸

大望を小さな鞆に詰めておく

人生の宝石未だ掴めない

国会は政治を忘れスキャンダル

島根県 持田 多輝子

ふる里で再起する日の高いびき

詫び状を書くのは何時も秘書の役

子供らもメダカも見えぬ河川敷

安来市 原 煩惱児

人情が溢れるままの路地暮し

老妻と労り合うて明日の夢

愚痴やめて感謝感謝の余命表

太陽の当る大地の芋を掘る

待ち侘びて庭に這い出る蟻の群れ

桜見の小さくなつた母という

出雲市 梅 ミツエ

山に咲く一人ぼっちの桜散る

おぼろ月大きな声で歌つて

百円シヨップ楽しくなつて買いあさる

出雲市 荒木 英子

梅林に夫婦睦まじ春の宵

駆足で日本列島桜咲く

鯉の餌鴨が横取り笑い呼ぶ

松江市 山根 邦代

笑顔には人を和ますいい薬

野草摘む元氣湧くよないい香り

黄砂降る大陸からの贈りもの

松江市 松本 知恵子

チューリップ育てて貰う春のうた

泥つきの葱には葱の匂いする

野良猫の顔ぐらいなら知っている

岡山市 清水 金太郎

平凡に生きて行のがむつかしい

雑草もただそれなりの運命あり

何事かあれば老妻髪を染め

岡山市 大森 純子

出直しを誓うこわれたしゃぼん玉

同じ轍エイズにヤコブBSE

安もんの良心ばかり永田町

倉敷市 撰 喜子

リストラに自然相手の農に生き

三世代同居で隠居できる身に

碁敵も相手にならぬ痴呆症

広島県 福 島 万年

もう泣かぬ爆弾抱いて街へ出る

ストレスの掃除機唸る日曜日

春ですなまたやって来た花の躁

因島市 村 上和輝

いとおしや痴呆の妻に紅をさす

読書三昧心の化粧しています

まだ散らぬ桜集いて祝う喜寿

府中市 馬 場 利子

カラフルな夢がみたくてバラを買う

巻き戻し出来る時計がうらやまし

喝采のない人生をひた走る

府中市 岩 本 雅代

花の下宴たけなわにトラも居る

鶯の声に心も清められ

まだ夢を捨てられなくて辞書を買う

愛媛県 宮 本 末子

枇杷の実を数えて妻の袋かけ

嫁ぎゆくまでの父と子花あしび

病院の出口が好きな焼芋屋

愛媛県 安 野 案山子

泥沼の暮らしへ見えて来た光

心臓が早鐘を打つプロポーズ

人の目を気にして生きるのは止めた

愛媛県 花 岡 順子

お日様を追いかけていて日が暮れた

なんぼでも昔のことは覚えてる

二人きりだから楽しいなと思う

愛媛県 黒 田 茂代

低いから肥えた分だけ幅に出る

おめでとう裏に嫉妬の影がある

生き残らねばならぬ野生の子沢山

今治市 中 村 好恵

山坂を越えて同志と思う妻

春の香を活けて大きく深呼吸吸

一行詩 試行錯誤をくり返す

今治市 野 村 清美

面倒な話に如何レモンティー

灯が揺らぐ仏に今日の無事祈る

丸い輪が欲しくて耐える胸の中

ぬか味噌で賞味期限の切れぬ祖母
糸電話つなぎなおして茶飲友
尊敬をしていますから肩がこり

高知県 近 森 功

下枝切り木が喜んでゐるエステ
不況前線まだうろついている日本
福耳へもうそろそろと神の告げ

高知県 桑 名 孝 雄

ハードルを下げて余生を飼ひ慣らす
潮騒の音聞いて父一人居り
父見舞い悲しさ拾う夕茜

高知県 貞 岡 佐紀子

十指みな使い上手に種明かす
耐え抜けば人の痛みが見えてくる
生きる幸花に託して供養する

香川県 松 村 輝 夫

福寿草もわたしもちぢこむ春風
四月馬鹿犬の背に乗り天翔ける
心憎いほどの秀句が羨まし

青森県 福 士 ト キ

園児バス集荷のように子供吸い
文化文明マグマ一つに手を上げる
字余りも字足らずもある凡夫です

秋田県 秋 野 宏

第53回 玉野市民川柳大会

と き 7月7日(日) 10時開場
ところ サンライフ玉野 JR宇野より歩10分
玉野市宇野2-2-20 TEL0863-21-5111
兼題と選者(2人選) 各題2句
「煌めく」 墨 作二郎・大西 泰世
「危ない」 坂根 寛哉・矢島玖美子
「侍」 筒井 祥文・樋口由紀子
「皿」 新家 完司・清水かおり
特別席題1題 当日発表 前田一石
読み込み可 欠席投句拝辞
締切 11時30分
賞 県知事賞・市長賞他
会費 2000円(軽食・発表誌呈)
後援 玉野市教育委員会
玉野市文化協会・山陽新聞社
連絡先 〒706-0132 玉野市用吉651
前田 一石 TEL0863-71-1781
主催 川 柳 玉 野 社

平成十四年造幣局桜の通り抜け川柳

本年は4月12日から18日まで会場内で募集され850名が投句をした。磯野いさむ・西田柳宏子・本田智彦・住田英比古各氏の選で、佳句25名・秀逸5名・天地人各1名が選ばれ、来年の通り抜けに短冊にして枝に吊られる。本社関係入選者は次のとおり。

〈佳句〉川島諷云児・吉岡 修・吉川 寿美
北野 哲男・安永 春
〈秀逸〉通り抜けしはし不況の世を忘れ 田口 穰一
へ人へ車椅子しばしやすらう紅手毬 岸野あやめ

藤生路郎物語

(6)

―「番傘」発刊のころ―

東野大八

堺の豪商河仁の外孫である河盛彦三郎は、慶応二年八月二十五日の生れで、よしの（霞乃）はその二十七歳の折の出生である。霞乃の生年月日は明治二十六年二月二十四日である。路郎の五つ歳下になる。

霞乃と結婚した路郎は、当然この彦三郎とも一つ屋根の下に住むことになった。

「父は慶応二年生れのトラの歳で、人には寛大でしたが自分には厳しい人でした。昼二時に帰ると家を出れば、必ずその時刻には帰宅しました。父の脱いだ下駄は、左右キツチリ揃っていました。父の机の抽斗の中は、鉛筆やペン、筆にノート等はきちんと並んでいました。その点、路郎ときたら、一旦家を出たら何時御帰館やらわかりません。午前二時になるやら翌日の昼すぎになるやら、鉄砲玉」のニツクネームがあり、私も眠たければさっさとお先へ寝てしまうのです。もし、夜更けに帰ってきて私が知らなかったら、父

が戸を開けにゆきます。何一つ文句を云わぬ父ですの、いつべんに酔いがさめてしまうと路郎はよく言っていました。こんな性格のちがう人間同士が同じ屋根の下にいて、よくもトラヴルが起らぬものだと感じたものです」（霞乃書簡）

彦三郎は当百邸の川柳小集会のメンバーに常に顔を出していたものの、実のところ川柳人と言うより俳人、蘆村で通っていたようである。教師としての彦三郎が数学の拘束から解放される趣味は、自由気ままな文学、芸能の世界であつたわけで、蘆村なる号はそうしたムードから象徴的雅号と受取れる。

「蘆村の雅号は文学好きのメンバーが集つて短篇小説を書いてお互いに批評し合つたりした時のもので、俳句なども甚でいえばザル甚仲間で互選句を楽しむ態のもので、句は全々残されていません。第一俳人として名乗りをあげるような俳人ではなかったのだあ

る。俳句はこの人にとってはほんの暇つぶしのなぐさみものであつたわけです」（霞乃書簡）小説の方は、渡辺霞亭の時代ものの代作をやつていたとあるが、小栗風葉の代作者から世に出た真山青果ほどの気力も、手づるもなかったらしい。第一そんな気もなかったようだ。こうして彦三郎は、晩年は路郎夫妻とその生活をともし、昭和五年十一月十四日、奇しくも亡妻の三十三回忌の日に死去した。享年六十四。仏名・釈諦願。

さて、筆者はこの辺で明治から大正へと移りかわる、一種の時代の大きな転換期における柳界の現況に眼をおくことにする。

路郎が十代から二十代へと成人期へ移行する明治四十年（路郎二十歳）の時点で、柳界は「葉柳」（M39・6発刊・小島六厘坊主宰・大阪）「滑稽文学」（M40・1発刊・窪田而笑子主宰・東京）「新川柳」（M41・1発刊・久良鼓社中）の三柳樹鼎立時代となつていた。だが柳誌の盛衰変貌ぶりは猫の目さながらで、二年後は滑稽文学に拠る東京柳界は「獅子頭」「矢車」に分裂する。そして六厘坊の死とともに「葉柳」も休刊してしまう。そうかと思えば、岐阜市から「青柳」（M42・8田中賢骨主宰）が出た。剣花坊、久良岐、當日、三面子らの多彩な執筆陣を動員した菊利60頁の堂々たるものだった。しかし、大正という新世代を迎えた当初に

は、東京では「大正川柳」大阪は「番傘」に過ぎず、岐阜の「青柳」も大正二年に休刊し八年間の冬眠に入ることになる。

東京の「大正川柳」(元・創刊)は、剣花坊の柳樽寺が奮起、一番のスタートで、やがてこれが大正期の新興川柳運動への輝やかしい旗手の役割を果たすことになる。この時、剣花坊四十三歳。まさに脂の乗り切った盛りである。

「この時々刻々変化し、流転し進展し突発してゆく実在即生命の刹那の觀察、連続の状態を捉えてこれを詩にしたもの、それが川柳である」(大正川柳25号13頁)

消えてゆく我世の悲しとるところ火 剣花坊
京で抱くものという離は哀れなり 〃
子を負うて夕刊売にみぞれ降る 〃

川上三太郎、森井荷十、吉川雉子郎ら有力新人多数を擁した柳樽寺派は、大正十二年の関東大震災まで東京柳壇に君臨し、全国的にも黄金時代を満喫するのである。大正から昭和の年号改称とともにこの「大正川柳」は「川柳人」へとうつがれる。

剣花坊のライバルで、明治期にはその偉勢を誇った読売派は「新柳眉集」を、また久良岐社は「川柳文学」をともに創刊したがいずれも程なく廃刊し「大正川柳」の独走に任ねる形となった。

明治期以降の柳界において終世のライバル

と目された剣花坊、久良岐の二人の先覚者は狂句追放「初代川柳の柳魂に還す」目途はとも同じであったが、久良岐は宝暦・明和期の柳樽が帯びる江戸趣味に拘泥し、明治期にはそのことによってひところは、江戸ッ子久良岐のエリート意識に浸り切った。

これに対する剣花坊は、過渡期ながら明治末期における新聞人らしい政治感覚と長州人たるの気骨に溢れた覇気をこめた新世代相応の新川柳を志した。明治維新は薩長の藩閥政治で一切をろう断したが、その藩閥政治は第四次伊藤(博文)内閣まで持ち越され、大正初年の第三次桂(太郎)内閣においても払拭し切れなかった。明治末期の自由民権思想はいずれこの藩閥意識への反逆がバックボーンをなしていた。剣花坊の新川柳もその例外ではなく、その明治氣質を遺憾なく示したのが「川柳」(M38・11創刊)であった。だが「大正川柳」の剣花坊の新川柳は、無産者運動の渦巻く大正デモクラシーの思想の奔流については敗退していくのである。久良岐も剣花坊もその衰退期はともに関東大震災であった。

大阪では、大正二年一月に番傘川柳社が「番傘」を刊行した。出句者は当百家の小集句会メンバーが顔を並べている。西田当百、浅井五葉、木村半文銭、川上日車、杉村蚊象、藤村青明、馬場緑天といった顔ぶれで、発刊

趣旨はなにかわりに第一号の巻頭吟に
上爛屋ヘイヘイと逆らはす 当百
堀口塊人は「ふあうすと」の「明治川柳考」でつぎのように書いている。

「ヘイヘイヘイは、その接客態度の描写であるが、姿を写して心に至り、さらに店の雰囲気まで匂わせる表現力を持つ一句である。これが我々の大阪の川柳であり、番傘はこんな風に行くことを巻頭に表示した一句でもあった」

柳社「番傘」の本質をずばりと解明した見事な適評というはかない。

堀口塊人はまた同誌の「昭和前期の関西柳界」においてつぎのように記している。

「この時、路郎は東京に居た。「葉柳」以来の柳友浅井五葉からも岸本水府からも、何んの相談もなく突然、創刊号「番傘」が手許に届けられた。この時二十五歳、彼の若き血がおだやかでなかったのは言うまでもない。

「番傘が何処から舞い込む。お前のような人間には到底解りもすまいがちよっとみせびらかしてやるといった風に。詩人の私には番傘より晩方の方がどれ位感じがいいだらう。今に梅雨が来れば番傘は破けてしまう。さつと破けてしまふ。ドス黒い色になってサ。番傘の奴等俺を島流しに会わしたな。覚えていろ、覚えて居ろよ。今更あやまつて誰がさくものか遅い遅い」

これは「番傘」二号の「楽屋落」に載っている路郎の手紙で、勿論、親友に対する冗談と思われるが、それにしてもだしぬかれたくやしさが表明されているではないか」

いずれにしても東京で「島流し」の寂寥感を噛みしめている路郎の憤懣ぶりが、この楽屋落の手紙の文中によく示されている。さぞかしこの一文をポストに投げ込んだあと、機をみて大阪の当百居に直行した路郎の姿が思われる。だがそこは頗なじみの屯する当百居の連中だし、先輩の当百が新柳誌のリーダー格でいることとて、まあまあ話のあと、河盛よしのとの結婚という素晴らしい佳日にもめぐりあうという段どりとなる。

明治三十八年七月に大阪から発刊された「新編柳樽」が翌年六月に「葉柳」小島六厘坊主筆となったが、その十一月号に斎藤松窓が「西田當百論」（約三頁）を書いている。

「当百は常識の人である。無理をせぬ人である。当百は天才といわれる男ではない。といって凡倉でもない。至極真面目な川柳家である。当百は世故に通じた人である。已に一家を成している人である。わが党にもっともよく浮世を知るは当百也。予や六厘坊などは坊ちゃんとして商家に人となったに過ぎぬ。苦勞といつても学校が厭やさに腹痛を起した位の罪のないものに過ぎぬ。随つて年少気鋭世間知らずの無鉄砲ということは、或は免れ

ぬかもしれない。

——鶏を乗せて漕ぎ出す傷しさ

当百

——見ぬ母の年忌つとめる回り年

〃

——つぎからは兄の幟りですましとき

〃

当百の句はほとんど家庭川柳といつて可なりである。実世間にふれた句ばかりだから、嘘がないがヤマもない。「真にして美ならず」との評は、当百の句の一面を穿つたものとしてきくべき価値がある。彼の句の欠点といえは「美」の觀念の欠乏である。然しこれは真ならんとしてしらすらに美を忘却したものである。

彼は順礼が地藏堂で梅雨を避け、子供に乳をのませているというような句が好きだ。六厘坊の大真く、千二の洒脱なしと雖も、彼の句はみな「真」である。而して彼の句には叙景よりも叙情において多く見るべきものがある。言い替へれば真ならんとしている彼の句に穿ちなく、真なくただ美ならんとのみ考えた句には余り佳句が見当らぬ」

まことに世長けて八面いろいろ、平淡雅趣に富んだこの当百の人柄には、六厘坊、日車、半文銭、松窓、路郎など一種の才走つて毒氣の多い連中も、根っから齒がたたなかつたという感触がある。梁山泊気取りの当百居常連の気こころを抜目なく見通し、緩急自在のその手綱さばきの程のよさに、路郎夫妻の仲人役もごく自然の形でとり出されてきたのであ

らう。発刊された新柳誌「番傘」の性格もまたこの当百流のムードそのものであつたといえる。

「路郎は「番傘」の二号から同人に参加し、猛烈に作句しはじめた。一頁発表の彼の句数は七十五、三号では百八。その頃の「番傘」は同人も少く月刊でもなかつたから、日頃の作品がたまつていたのかもしれないが、現在の各同人誌とは比較にならない句数の発表である」（「ふあうす」）路郎の番傘時代（堀口堯人）

発刊当時の「番傘」の部数は約二百部で、何号目かに誤植がみつかったので、水府がそれを抱えて路郎夫妻の宅を訪れ、訂正を手伝つて貰ひ發送期日に間にあわせた事がある。

「新婚十日かそこの路郎君の家へこんなヤボ用を持ちこむのも、僕が路郎の恋仇なんて？わかるだろう」

水府が友人にそういつて話したという。

——鬼灯を鳴らす雛妓の懷手

よしの

番傘三号にこの句がある。河盛の姓であるから路郎と結婚直前の句と見ていい。同誌に

——肩上もよし矢立の字更によし

路郎

この句が初々しい河盛よしのをモデルとしたのなら、路郎の彼女への関心ぶりがしのばれてはほえましい。ともあれこの河盛よしのの川柳の処女作がやがて、麻生霞乃として路郎と同じいばらの川柳人生の幕明けとなるのである。

■図書紹介

『橋高薫風川柳文集』

橋高 薫 風 著

川柳の赤い糸

小 島 蘭 幸

私の書架に薫風先生の第二句集『樺樓』がある。その句集『樺樓』の扉を開くと、黒々とした髪をきつちりと七三に分けた文学青年という趣の若き日の薫風先生の写真がある。濃い眉と黒縁眼鏡の奥の柔らかな眼差しは何を見据えておられるのであろうか……

序

視野無限 この言葉に尽く

昭和四十年初夏の頃不朽洞の病室にて

麻生路郎 識

——この短い序に込められた路郎師の熱き思い。それをしっかりと受け止められた若き日の薫風先生。二人を結ぶ一本の川柳の赤い糸。句集『樺樓』には私の句想を遙かに超える格調高い作品が並んでいる。

恋人の膝は樺樓のまるさかな
遠き人を北斗の杓で掬わんか

大きな滝になるうと思う父の日に
旅人も月もやがては去る砂丘
勲章が欲しい七才七十才

平成十四年三月五日に発行された橋高薫風川柳文集を読み終えると、私の体内を何とも言えぬ感動が走った。そして、昨年七月七日尾道市の文学公園で開催された麻生路郎・葎乃句碑建立の折の爽やかな笑顔と、九月二十四日に大阪市のリーガロイヤルホテルで開催された橋高薫風叙勲記念川柳大会の晴れやかなお顔が浮かんで来て、急に句集『樺樓』を読みたくなったのである。

さて、橋高薫風川柳文集は、八章に分けられている。Iの『川柳塔』巻頭言は川柳塔誌上で何度も読んでいたのに、いつ読んでも新鮮だ。一気に最後まで読ませる迫力がある。これは人間薫風の器の大きさのなせる技であると思う。最初の巻頭言「麻生路郎先生」に次のような文章がある。「：現在本社句会の顔ぶれを見ても、路郎先生の聲咳に接した人は百人のうち十人そこそこので今更の感はあるものの先生の一端を述べたい：」残念ながら私は『川柳塔』創刊号からの縁なので、路郎師にはお会いしたことがない。ただ私の師である故山内静水がことあるごとに路郎師の作品や言葉を話してくれていたのだ、

知らず知らずのうちに路郎師の偉大さが、私の体の中に染み込んでいったのではないかとと思う。そこで、私は路郎師の作品、言葉を後輩の川柳人に伝えることも私たち同人の使命ではないかと意を強くしたのだ。橋高薫風川柳文集には路郎師が凝縮されていて、どの頁を開いても路郎師に会える楽しさがある。

II「名句のかおり(1)〜(23)」は薫風先生の鑑賞と大先輩方の作品がじつくりと味わえる醍醐味がある。暗誦出来る程有名な作品だが、それでも味わうことにきつと心が豊かになることだろう。

二合では多いと三合飲んで寝る 村田 周魚
寝転べば畳一帖ふさくのみ 麻生 路郎
書類焼く火は落城の火とも見ゆ 麻生 葎乃
音もなく火花があがる他所の町 前田 雀郎
薄の穂われ放浪の旅ならば 三條東洋樹

III「寺尾俊平第二句集『風の中』解説」は正に圧巻である。笛と太鼓を自他共に認めておられる俊平先生と薫風先生。薫風先生にここまで深く掘り下げて頂くと、さすがの俊平先生も脱帽しかないであろう。解説を読み終った私は、初めてお会いした時の俊平先生を思い出した。それは和服のさつそうとしたお姿であった。

風の中思うことなし掌をさらし

風の中一つ揃わぬ鼓笛隊

ひらかなのわの字に病んでいる妻よ

秋さくら革命好きな銅版画

わが夢は絹街道の湖に浮く

IV 「川柳平安誌掲載エッセイ」は、平安川柳社若手作家作品と若き日の薫風先生の川柳眼の真剣勝負が生き生きと書かれていて、楽しく読ませて頂いた。一字一句たりとも妥協を許さない薫風先生の川柳に対する厳しさと眼の確かさは、後に田中博造氏が薫風先生の「われに過ぎたり絢爛と死ねる歳」を愛誦句として『現代川柳の群像』で取り上げておられることでも分かると思う。

V 「佳句感想とこの句この人」は川柳塔誌上でも好評であったと聞く。主幹と地方柳人との温かい交流がそこにはあった。竹原川柳会会員の藤解静風氏と岩本笑子氏は、自分の作品を取り上げ鑑賞して頂いた喜びを事ある毎に話しておられる。

赤い傘青い傘今日月曜日

岩本 笑子

モナリザの微笑フーテン氏の微笑

藤解 静風

単線へ瀬戸内海がカーブする

岩本 笑子

おそらく鑑賞に取り上げて頂いた作者は、全員自分の作品を誇りに思っているのではなからうか。名鑑賞と共に…。

VI 「序文(1)~(7)」七人の方の序文を読み終

えて私はとても羨ましくなってきた。薫風先生の路郎師を尊敬する心、川柳塔の将来を思う心、川柳を愛する心がピンピン伝わって来て、とても爽快な気持ちにさせられた。実は私は以前オール川柳の女性記者に句集発刊を勧められたことがある。その女性記者の殺し文句は「序文は是非橋高薫風先生に！」であった。その時は六十歳になったらお願いしなすと言っておいたのだが…その折には是非是非お願いしたいものだ。

VII 「麻生路郎先生の思い出」とVIII 「大空のころ(1)~(2)」麻生路郎の作品とその周辺」は、何回も何回も繰り返し読んで欲しい力作である。ここまで書き続けられた薫風先生の路郎師に対する情熱は、いったいどこから湧いてくるのであろうか…薫風先生にとって路郎師は川柳の師であり人生の師であると推察する。路郎師を生涯の師とする気持ちが凄くパワーとなつてここまで書き続けることが出来たのではないかと思う。路郎師がお亡くなりになつて三十七年の歳月を経た今も、路郎師と薫風先生の一本の川柳の赤い糸は更に強くなったようだ。

路郎作品抄

二階を降りてどこへ行く身ぞ

見渡すとユダのころをみんな持ち

その日ぐらしも軒に雀がこぼるよ
てにをはのあはぬ悔みとなりけり
君見たまへ蒨穠草が伸びてゐる

そろばんの三桁四桁の人生か

凡聖一如元旦のころ知る

古くとも僕には仁義礼智信

酒とろりとろり大空のころかも

行末はどうあろうとも火の如し

おれに似よ俺に似るなと子と思ひ

若い若いと言われ続けてきた私も、最近齢を重ねてきたせいか故人となられた先輩柳人の作品を拝見すると、胸が熱くなつて涙があふれてくるようになった。句会や大会でお会いした時のお姿と作品が重なつてしまうのだ。路郎門下作家抄になつかしいお名前を拝見したので最後に作品を列記したい。

労働歌重役室の窓閉まる

河村 日満

パンの耳好きなのも居る子沢山

北川 春果

年上の女とくくるてつちり屋

菊沢小松園

直された癖で謡っている謡

後藤 梅志

春日遅々として「王さん眠くなり

清水 白柳

神経を抜けば地獄の面白さ

戸田 古方

母と往く心斎橋の片日照り

中島生々庵

義理がたい人に元日起こされる

西尾 菜

駅長を一人残した春の汽車

浜田久米雄

三流館夫婦仔犬を抱いて来る

不二田三夫

秀句鑑賞

同人吟 竹内紫 錯

— 5月号から

私が川柳を始めた機会は昭和30年ごろ、療

養患者が薬包紙に記す病棟句会でした。健康を取り戻した後も関西に送句だけして約50年経過。顔は見せずに「細く長く」続けました。エンジニアから技術翻訳者になり、詩には遠い頭なので、即物的な句を多く詠んできました。一般の川柳読者の共感を得にくいと思いましたが、選者には励まされました。

入門当初に見た短詩は病臥の身に強く記憶しました。味わって知った以上は類想句を出したりせず、採択もしない主義です。

科学の進歩を扱えば、理科の心得や標語みたいな句でも新規性を示せると考えました。

また「一読明快」を唱えた選者の言葉も忘れないようにしています。

せっかく長生き中なので、本欄のような珍しい宿題を引き受けました。最近現れた新語は「イミダス」の類で調べますが、今回は医療とかIT時代の機械寄りの用語を勉強しました。採り上げた句に偏りがありますが、ご了承ください。

辛い夜は胎児の形して眠る

居 谷 真理子

喜怒哀楽を詠むのが川柳ですが、読者として肯ける「哀」の表現は少ないようです。図版でしか見ない胎児がここでは大きな言葉。世の編集者の啓蒙にも使いたい句です。

相談もされず茹で卵になった

谷 口 義

朝食は何にしますかと聞かれて夫は答えを面倒がつたのか？とにかく時がたてば料理の事前相談はなくなるもの。「茹で卵」はその成り行きと解しました。

あんころ餅の上に主治医が座ってる

江 口 度

私も同病で、血糖値を簡便に測ってから診察となります。館ものに手を伸ばすと主治医の姿が忽然と現れる、とは旨い表現です。

点鼻薬マスキスあらいスギ花粉

田 中 正 坊

経験を生かして花粉を迎え討つ構え。どうやら桜も春も加速状態で通過しました。

スニーカー洗うて履いてまた洗う

岸 野 あやめ

良い生活習慣です。私も万歩計で知った距離を集計。十年日記の文字が年々増えました。一口にいえば健在が成果。

ゆずるのは止そう嫁さん捨て上手

宮 尾 みのり

ムカシ人間は物を大事に藏っておきます。人にゆずればすぐ捨てるだろうと思案する心境も解ります。「捨て上手」とは旨く言ったものです。

ワープロがとづくに消えた電器店

八 田 敏

パソコンやケータイの普及で、手紙や寄稿をする少数派しかワープロをもちません。ノートパソコンを持つての出張がかっこいい。

ダンディーな遺影に楽しかりし頃

後 藤 早 智

焼香のさいの故人への想いが伝わります。

ほん物に近づいてきた物忘れ

和 泉 あかり

身につまされます。私は階段の昇り降りです手すり握ったとたん、用事を忘れれます。人名を忘れる場合が一番多いです。「アレ」を連発して話を進めると、ボケ度が一段上がったとされるようです。

点滴とサプリメントに活もらう

保田 絹子

歳を取るとこういう医療用語になじむのは当然です。栄養補助食品とか健康食品といわれていたのが、サプリメントという正式名称になりました。ビタミン、ミネラル、食物繊維などを含めた栄養素補足剤を指します。作者はきつと効果を実感されたのでしよう。

死語になる日本男子と言言葉

慇 谷 郁子

そう言われればそうですね。『死語読本』（塩田）には載っていません。戦前派の私がよく覚えていたのは、軍歌の文句の中でも響きが良からでした。

MRI脳は詰っているだろうか

井上 照子

脳味噌のエアーポケット―大事

谷口 次男

CTもMRIも新医療機器の例でして、老化した脳や内臓の輪切りの画像を見せるので有力な治療手段になりました。脳に空隙ができていたり、血のめぐりが不均等になるのが皆さんの不安の種でしょうが、句が詠めるうちは問題ないでしょう。

病院には《もの忘れ外来》があるので、思いたる人は専門医の診察を受けて下さい。

盛り場でなかつた地下のA出口

志田 千代

地下鉄の階段を昇りつめた所が予想外。よくあることです。地図が読める人でも、深いホームから動くうち方向感覚は喪失します。変人と言われる人と馬が合う

原 さよ子

私の勤めた会社には「変人会」という会があるくらいで、特技のある凝り性の人間であることを互いに認めています。有名人でも時にそう呼ばれます。自分も変人のタイプと思うなら意気投合するかもしれません。

十九歳ドイツ語覚え恋覚え

中村 ゆきを

作者の頭の中のフィルムを戻して、半世紀前の情景を綴った句でしょうか。級友たちもドイツ語を得意げに使用した時代です。使わないと忘れますが、ドイツの映画と音楽は日本人の頭の中の財産になりました。

うちくが多い男の料理好き

古久保 和子

私にもそれに近い息子がいます。中学のころから漁場が近く、大学では釣り部へ。就職先はワイン醸造の類でした。留学で自炊に慣れたので、講釈しつつ化学実験をする感じ。蘆薈は後から付いてきたのでしよう。

幾何代数 校門出るとき置いて来た

中井 ゆき

たしかに、卒業すれば縁のない学科もあります。世は分業が進み、パソコンの中で計算も作図も行われ、我々は文人になりきるかも。OKがいつの間にやら日本語に

渥美 弧 秀

まさに死語の例が出たが、それとは反対にこの半世紀よく使われてきたのがこれ。広辞苑には「オーケー」の見出し語で、OKとは「合点だ」「よろしい」「万事解決」ほか三つほどの意味を挙げてあります。

ロボットと縄とび共にしてみたい

山川 日出子

ロボットに自動車組立てから手術の操作までやらす時代になりましたが、一緒に縄とびをしたと思う柔軟さに感服します。

万歩計持たせて見たい蟻の列

西岡 洛 醉

谷内六郎さんの絵は、生物と社会の道具とが寸法上はマッチしなくても納得される童話の世界でした。蟻と万歩計を登場させた空想もまた川柳になると思います。薫風さんの「労働歌蟻が歌えば凄かろう」から着想の立てかたを学んだ新規な一句と思います。

妄言多謝

愛染帖

波多野五楽庵選

今治市 月原 宵明

白壁は書きたく節穴のぞきたし
賽銭も拍手も貧弱すぎる音

米子市 政岡日枝子

ポケットにこれからという熱がある
実らせたあとの時間が寒すぎる

大阪市 小林 周信

変換キー殺し文句が出て来ない
四捨五入すると治った胃酸過多

八尾市 高杉 千歩

流水プール生きねばならぬ身をゆだね
ご破算にしよう恐いことを言う

横浜市 鈴江 純子

時差大き過ぎて昨日が消えている
蓄えた固有名词が逃げて老い

富田林市 中井 アキ

いのち残照私だけの海がある
どの顔も幸せそうな花の下

弘前市 高瀬 霜石

折れた矢で足の踏み場もない晝前
泣き虫のおでこに無限大を描く

和歌山市 木本 朱夏

結果を超えてひとりの花の宴
山桜むかしはものを思わざり

弘前市 一戸 ツネ

過去未来 今を生きているシャボン玉
自尊心忘れて女泥まみれ

八尾市 村上ミツ子

ねばならぬ ねばならないと詰めよられ
それからのシナリオにない笑いじわ

愛媛県 中居 善信

大根もナスビも情に溺れがち
モノクロの中で誰かが呼んでいる

和歌山市 川上 大輪

躓いた石が私を見て笑う
点滴がほとり私のロスタイム

横浜市 保田 絹子

老犬の貫禄伊達に吠えはせぬ
慇懃に押しつけられた役どころ

倉吉市 米田 幸子

良妻の仮面時々陽に晒す
ひとつ捨てひとつ拾って古棉の坂

松原市 小池しげお

添うてきた妻が支えている梯子
相性のひずみの中で許しあう

鳥取県 西沖 彰雄

いざと言う時には地金出すつもり
腹芸もハツタリ苦しまざれです

海南市 三宅 保州

気がつくとだーれも居ない手術室
老人のポケットにあるハーモニカ

東京都 播本 充子

もう白に戻れない過去持ち歩く
太陽も月も死角にして踊る

富田林市 池 森子

自分史に鱗一枚ずつ落とす
桜満開 私は闇を抱えています

和歌山市 福井 桂香

蕎麦茹でて葱を刻んで出て行つた
地球儀の点の範囲で生きている

鳥取県 土橋 螢

帆船立て剥ぐ貝の痛みは忘れまい
新聞が溜るいのちが擦り切れる

弘前市 岸本 宏章

歳時記の欠片を民話から拾う
いい味が出て年輪の貌になる

弘前市 高橋 岳水

煩惱をいつばいまとうてきた手紙
花の下誰かを許すことにする

藤井寺市 太田扶美代

シナリオの主演へ涙溜めておく
富田林市 片岡智恵子

和歌山市 桜井 千秀

吉村さち子

相馬 銀波

相馬 銀波

綾部市 藤田 芳郎
泥の船だったと群れを出て気付く

東京都 やまぐち珠美
知らぬ人よりも冷たくすれちがう

羽曳野市 吉川 寿美
背伸びしていつしか影も見失う

倉吉市 山中 康子
一善をつなげば海があふれた

四条畷市 吉岡 修
決心をしますあなたもいいですね

米子市 澤田 千春
縦の木に話を聞きにくる仲間

弘前市 蒔苗 果林
老い一人うつと夢を入り混ぜる

弘前市 福士 慕情
コロリ死を願う蜥蜴に無い尻尾

大阪市 前 たもつ
骨埋める街でも通す国訛り

尼崎市 田辺 鹿太
歴戦の割れ目を残すめし茶碗

寝屋川市 江口 度
イチゴ咲いたかジョギングをはじめよう

和歌山市 土屋起世子
くたびれた腰多数派の椅子へ行く

八尾市 井尻 民
そっとしてほしい涙の渴くまで

弘前市 中山 雅城
六月の花嫁だった僕の妻

竹原市 正畑 半寛
自分史を書く父母に逢いたくて

和歌山市 松原 寿子
片想い胸の振り子は止まらない

今治市 塩路よしみ
切れそうな話をいふす火吹竹

枚方市 海老池 洋
自分史に土橋石橋かずら橋

鳥取市 録沢 風花
一蓮托生 多少は埃でる体

和歌山市 山根めぐみ
自問自答 蛇口の水が洩れたまま

西宮市 奥田みつ子
切片に立つた女の静かな目

和歌山市 楠見 章子
裏側も霞んでますかお月様

米子市 木村富美子
数知れぬ傷を隠してある背中

和歌山市 古久保和子
星の降る村に忘れて来た時間

鳥取県 岩崎みさ江
徒花を咲かせる庭がある

藤井寺市 高田美代子
ともだち未満 煽ればもえる火を抱いて

八尾市 山本 宏至
片方の耳が噂に追いつがる

美祿市 安平次弘道
眠らない街で眠ったのが不覚

鳥取市 徳田ひろこ
四コマの漫画が生きている器

堺市 和田つづや
花冷えの風が舐めてく恋の傷

吹田市 早川 棲世
列植の桜下 喪服の人づく

米子市 白根 ふみ
風の日よ卑弥呼の野辺を焼き払う

唐津市 田口 虹汀
印半纏着せ大将の座を譲り

松原市 玉置 重人
チケツトが二枚相手がまだいない

大和高田市 鍛原 千里
シュレッター恋の未練も切り刻む

黒石市 相馬 一花
尻餅をついて老化を自覚する

西宮市 門谷たず子
まだすこし天に届かぬ縄梯子

川崎市 和泉あかり
煮えくらぬあなたに欠伸さし上げる

愛媛県 花岡 順子
それだけの覚悟がありならどうぞ

高槻市 左右田泰雄
ひらがなのように座って拗ねて見せ

泉佐野市 稲葉 洋
ひとり言ネタも老臭帯びてきた

和歌山市 福本 英子
心当たりにないのに溜まる皮下脂肪

海南市 谷口 義男
無い知恵を絞った欲がいのち取り

横浜市 秋元 和可
約款の小さな文字の落し穴

鳥取県 吉田孔美子
まわり道おなじ想いの夜桜よ

鳥取県 さえきやえ
出つくしたはずの涙の三回忌

鳥取市 夏目 健一
後がないので涙絞って切り抜ける

米子市 野坂 なみ
人間もどき神も区別がつかかねる

豊中市 田中 正坊
ビクビクするな今晚はビフテキや

和歌山市 上地登美代
パイオフへ案ずるほどの金もなし

岡山県 山本 玉恵
マルクスに酔った日のある古日記

西宮市 西口いわゑ
震災もテロも夢だと思いたし

横浜市 三村八重子
人並のくらし打たれず叩かれず

弘前市 宮崎ヒサ子
寝不足の考えでした目を伏せる

大崎市 川原 章久
何よりも若い氣保つ傘寿です

逗子市 神戸みず帆
子の視野に立つて見ええないものを知り

日上市 加藤 権悟
葉桜になって独りの子を宿す

弘前市 櫻庭 順風
吹雪く日はのんびり休みたい時計

米子市 鷺見 正子
花の下残り時間に急かされる

大阪府 澤田 和重
どう返事しようか眼鏡拭きながら

鳥取県 田村きみ子
野次るのは大好き恨まないけれど

倉吉市 牧野 芳光
寂しがり屋が花をいっぱい買つて来る

豊中市 山門 タミ
六十年積木の塔も耐えきれず

奈良市 米田 恭昌
パラサイト他人のような子が一人

堺市 志田 千代
三男の嫁が看とつた縁だった

唐津市 仁部 四郎
椅子の名が変わり男の弱い声

愛媛県 黒田 茂代
一呼吸置いて小言を丸呑みに

唐津市 宗 水笑
人恋しポストを覗く古桶である

岸和田市 木村 正剛
主治医から見れば魚と同じ僕

岡山県 福原 悦子
人間の壁の温みの中で生き

和歌山市 西山 幸
一喜一憂しては聖書に遠くいる

東大阪市 北村 賢子
麻仁の丘ここまで兄は生きていた

愛知県 早川 盛夫
俺のこと言ってるようで近付けぬ

寝屋川市 堀江 光子
好物は医者に内緒のものばかり

鳥取県 谷口 次男
すまないとなつた一言言えぬ父

横浜市 田中 笑子
愚痴こぼす友がたよりの長電話

米子市 小塩智加恵
孫という金食う虫もまた可愛い

堺市 矢倉 五月
お財布に金の蛙を飼っている

鳥取市 美田 旋風
愛される仏になろう遺書を書く

宇都市 平田 実男
被害者のほうには時効などはない

横浜市 芦田 鈴美
晩成の夢に助走が追いつかず

三田市 北野 哲男
場所柄を弁えかけた力こぶ

吹田市 山本希久子
敵か味方が一度誘ってみることだ

寝屋川市 森 茜
まんぼうよ何とはないが癒される

奈良市 乾 春雄
異かけてゆつくり煙草吸っている

和歌山県 森下 順子
蛇行して川も折り合いつけている

松江市 川本 畔
桑の実に染まった唇の初恋よ

鳥取県 上田 俊路
用意した言葉どおりに出ぬ弔辞

岡山県 富坂 志重
残された余白急がぬ事にする

高知県 桑名 孝雄
度を越さぬ晩酌ならと無理なこと

水煙抄

秀句鑑賞

—5月号から

今 愁 女

血統書ないから芸を仕込んで

巖 田 かず枝

庶民は実力だけが頼り、努力して技術を身につけたいものです。

産地直送表示信じていいですか

川 島 良 子

同感、近ごろは食品の表示が信じられなくなりました。自家生産だけという訳にもいきませんし、厳しい目を向けましょう。

聴診器心の内は覗かせず

小 川 てるみ

個人的な悩みや秘めごとは誰でも持つています。診てもらうのは肉体の部分。

孫は十人大物小物に変わりもん

亀 井 円 女

同じ腹を痛めた子どもにもそれぞれ個性がはつきりあります。ましてやお孫さん十人となれば変わりもんもあつて然りです。

面白い話の嘘は許される

中 村 泰 竜

輪の中に愉快な人がいると、少しぐらいの嘘だろうと楽しくなります。

忘れても他人が持っている記憶

乾 春 雄

本人がすっかり忘れてしまった事を他人はちゃんと覚えていてます。ましてや借りた小銭のことも。

こんど咲く時もあなたの鉢に咲く

前 坂 美佐枝

幸せなご夫婦の姿が見えます。やさしい器の旦那様を大切に。

要らないと思えば要らぬものばかり

福 永 ひかり

身の回り要らないものの中で暮らしています。それかと言つて捨てるに惜しい。

生きるとは今食べられることである

武 島 ちよえ

風邪を引いても食欲がなくなります。食べられることは元気のしるし、もりもり食べて健康で長生きしましょう。

露天風呂浮いてる顔は皆菩薩

国 米 きくゑ

温泉や露天風呂に行かれる人は心にもゆとりがあります。まさに菩薩さん。

無記名に本心を書くアンケート

浦 野 昭 志

建て前と本音、記名だと遠慮すること、無記名だと堂々と本音が書けます。

誕生日素知らぬ態で過ぎてゆく

小 坂 凡 英

可愛い子供時分にはうれしい誕生日も、人生も大半過ぎると素知らぬ振りがいいのかも知れません。

へそくりの少し位は潤滑油

木太久 正 一

お金を持っているとお金持が豊かになります。ましてや自分だけの自由なお金。

ポケットに入る自慢で座が和み

飛 永 ふりこ

大げさな自慢話より、小さな自慢でもそれとなく言われると和みます。

祭りなら腰も浮き出す阿波生まれ

猪 森 スミエ

気持ちが充分判ります。津軽には祭り笛が聞えること仕事も放り出す「ねぶた馬鹿」がいます。

手のひらの生命線に蝶が翔ぶ

正 畑 半 寛

蝶が翔ぶように命が躍動しているのです。日日大切に、有意義に生きましょう。

誹風柳多留二四篇研究 42

318 関東べいをなぶらんと公卿出る

山田 雨譚註に「川云、宗任」。

安倍宗任は前九年の役で父頼時、兄貞任と共に戦うが、源頼義・義家父子に敗れ、京都に連れて来られる。彼が「頼義朝臣の京都の館に居たりけるを、若殿上人達集りて、東の夷さこそをかしく侍らめ、いざ行て見んとて、打連れ彼館に至りて、梅花を一枝手折りて、是は如何にと問い給ひてければ、宗任取りあへず、

我が国の梅の花とは見たれども

大宮人は如何云ふらん

と申しければ、皆しらけて婦り給ひしと云へり」(『前太平記』卷三)。

衣川での兄貞任との義家との遣り取り、

衣のたては綻びにけり

年を経し糸の乱れの苦しさに

兄と言ひ弟と言ひ、昔は凄い武将が居たものだ。それも道の奥に。

其にくさははなんだと梅の花

梅の花だんへいといわせるつもり 二八二三

あべこべさ公家衆を哥てい、こめる

三二一七

清 文武両道に秀でた武将。優雅でもあったのです。

山田昭夫・伊吹和男
大野秀二・小栗清吾
橋本秀信・粕谷長生

清 博美・佐藤 要人

316 味噌こしてかうハ岡場の袖の梅

山田 「袖の梅」は吉原名物の酔い覚ましや二日酔の特効薬。一方雪花菜の「から汁」も二日酔に効く。

味噌漉は「②味噌漉策の略。味噌を漉してその滓を去るに用いる小さな笊」(江戸語の辞典)で、「おから」などは、味噌漉策などで買に行ったのであろう。

吉原ならば本物の梅の袖、岡場所では「から汁」の梅の袖。

袖の梅おあんなんしのくすり也 二〇一八
から汁は是岡場所の袖の梅 一三二二三
うやまつてから汁を喰のんだ朝 明二仁三

清・佐藤 賛。

317 またぐらへ秤をはさみ糸をまき

山田 糸を巻くには一人では手間取り、補助として秤の竿を利用したのであろう。

内股へ物差を入レ糸をまき 四二四〇

そんならい、と膝へのせ糸をまき 四三二〇
けいぐりをさせて内義ハ糸をまき

清 本句と礎橋引用第一句は、股引屋の店頭風景。股引屋が糸を使って、客の寸法を取っているのである。体にびったりしてなお窮屈でない股引は既製品では駄目で、オーダーメイドでなければならぬ。

佐藤 同右。

佐藤 贊。

319 百人一首天神様に氣あつかず

山田 天神様と云えば梅の花。百人一首には梅の花が入っていない事を云つたまでの句。

なお、比企先生は天神様を文字通り菅公ととり、本句に註して、「作者、選者の思い違いか」(『川柳百人一首』)とされているが、これは先生の「思い違い」であらう。

梅まつの外で百首へ入らつしやり

安四義 1

御愛樹の外で百首へ入らせられ 一三七 23

御愛樹ハ春小倉でハ秋をよみ 一二二 5

伊吹 百人一首 24番の「このたびは……」の

作者名が菅公となっているので、百人一首の中に天神様が作者として入っているのに気付かないという意味ではないか。

百人一首 35番紀貫之の「人はいさ心もしらずふるさは花ぞ昔の香にはひける」は、『古今集』春上(「前略」)そこに立てりける梅の花を折りてよめる」となっている。

百人一首 こんひらさまに氣がつかず

一〇 17

橋本 両説考えられるが、どちらとかな言えは礎賛。というのは、川柳作家たちが、菅家

が道真であるということは知らぬはずがなく(類句も多い)、それに比べて百人一首の中に「梅」とズバリ詠んだ歌がないということをも、天神様と謎かけて言つたものと思う。確かに貫之の歌は梅であるが、それはかくされているから、百人一首に梅がないことは、時鳥が一句しかないと同じく一種の常識とされているのではない。次の類句からみて。

故郷へかくして梅を定家入れ 九二 1

きつい事百の外からこぼれ梅 天五 天 1

鶯も梅も小倉にかこち顔 一四〇 28

鶯はぬぬ梅のない小倉 一五七 16

粕谷 橋本説のようなことだと思つ。

清・佐藤 同。

320 どつかどう戸棚へしやがむ 一大事

山田 「どつかどう」はハッキリしないが、

「あわてて」とか「どかどか」位の意であらう。人妻とのみそか事の最中に亭主が帰つて来た。さあさ、どうする、どうする。

戸棚へ仕廻ふ女房のかくし喰い 一〇三 27
おし入れでへのこふいてるこわい事

押し入れて聞はていしゆと又はじめ

末四 3

五三 17

小栗 「どつかどう」がわからず。

どつかどう大師をおかむつけたやつ

明五義 2

駒くるみにぎつてどつかどうたれる

三六 30

橋本 礎説、雰囲気はなんとなくわかるが、略されているのはつきりしない。戸棚へ入ったのは間男ですか？

「どつかどう」は小栗兄の二例のほかに「柳多留」「勝句刷」の中では、主題句を含め五例(計七例)しかない。

どつかどうとうふの中へ下駄を入 二九 23
棚経ハどつかどうふ茨木や 三八 38

どつかどう来たと産所へ里の母 一五四 10

これらの例から考えて、とるものとりあえず、緊急時に、行動を表す擬態語である。故に礎説に「あわてて戸棚に隠れ、しやがむ間男」を加えて賛。

清 橋本氏引用例句、(二九 23)では、「どつかどう」を何はともあれ、急いで、とりあえず、どか／＼と、などの説が出たが、やはりハッキリしなかった。例をさがさねばならぬ。間男説は間違いないところ。

佐藤 橋本説賛。「どつかどう」は、何をしたらよいかわらず、とりあえず戸棚へ隠れるの意。

荀香のむ

宮西弥生 選

辻褄を合わすと伸びるボタン穴
お隣でなければ欲しい粗大ゴミ
それぞれの揺れで吊り橋渡り終え
自慢などひとつも言わぬ足の指
つぎはぎの命へレモンひとしずく
いろはから出直す椅子に深く掛け
白紙答案 子に訴えるものがある
ひとコマの漫画の中にみる情け
納得して進む一歩は軽いけど
いい人になろうなろうと角を折る
豆の蔓なににすがって生きようか
右を見ろ左も見ろと弥陀が言う
少し泣いて少し女が垢ぬける
誇るものない自分史の花づくり
一針も粗末に刺せぬ旅衣
ひとつ許すと円がすこし丸くなる
欠点が目に付き出した車間距離
見限った訳を知ってる葉指
神仏がからんで乱がおさまらぬ

和歌山市	吉村さち子	和歌山市	鍛原 千里
八尾市	高杉 千歩	米子市	青戸 田鶴
芦屋市	黒田 能子	弘前市	一戸 ツネ
八尾市	生嶋ますみ	藤井寺市	太田扶美代
富田林市	中井 アキ	八尾市	井尻 民
倉敷市	小野 克枝	和歌山市	榎原 公子
大阪府	米澤 俣子	和歌山市	西山 幸
岡山県	矢内寿美子	八尾市	長浜 澄子
西宮市	奥田みつ子	尼崎市	宮崎シマ子
大和高田市	鍛原 千里	八尾市	高田美代子
米子市	青戸 田鶴	藤井寺市	

思い違いのままもしあわせかもしれない
底力やる気がないと出てこない
燃える火に追われるように日をめくる
ブランドの魔法にかかるのも女
ひとりではさみしい長い渡月橋
乳房枯れても女の役はまだ続く
人も桜も賞味期限が美しい
幸せをこぼしてばかり浅い皿
明日もまた欲をくれます土いじり
百態の花を演じる万華鏡
善行を重ねた人と閻魔知る
母からの万葉がなが無事知らせ
潔い世へ戻せよと道く桜
エルメスのスカーフ喜び下手な母
コンパクト作り笑いが上手くなる
なみだなど見せぬ椿のいさぎよさ
実を付けた木です大事に育てます
五センチに立ちすくんでる車椅子
晩酌のあてにほどよい噂くる
押し花の色は私を裏切らぬ
もうメカに付いて行けない知恵袋
シベリアを語れば白鳥すつと寄り
運命線はいたずらが好き桜散る
誘う人あつて綺麗に化粧する
吊り革にすがつて亡夫の手を思う

奈良市	志田 千代	奈良市	渡辺 富子
堺市	内田美也子	奈良市	田中美弥子
尼崎市	小塩智加恵	香川県	山崎ひかり
大阪市	神夏磯典子	横浜市	近藤 道子
今治市	野村 清美	羽曳野市	徳山みつこ
鳥取県	土橋 睦子	池田市	栗田 久子
鳥取県	さえきやえ	寝屋川市	平松かすみ
大阪市	板東 倫子	米子市	林 瑞枝
米子市	木村富美子	吹田市	山本希久子
鳥取県	睦子	出雲市	伊藤 玲子
大阪市	野村 清美	熊本市	永田 俊子
奈良市	神夏磯典子		

うちの母だけは惚けぬと思つてゐる
落花の舞 柩のふたは閉めないで
ロボットに介護をされる日が近い
夜桜もいいね花も人もきれいに
よく笑う女だ家族あるらしい
パンを焼く匂いの中のよい目覚め
暮色背に私を生かす辞書を繰る
銃口を自分に向ける失意の日
結局は自分で歩くしかないね
目的に近づくように背を伸ばす
谷底で痛手を癒す落ちこぼれ
平穏な夕陽に今日の句読点
好きだとはだれも言わない枯れ落葉
介護保険へ順調に老いてゆく
かけ声を何度も挑む逆上り
淡々と生きたし夢がたとある
紅を引くまだ現役の女です
女の色香ごんごん失せてゆく悲哀
いい年を重ねて今年も花に会う
いっぱいでも空でも困る冷蔵庫
同じ痛み持つてる友と歩を合わす
白和えのレシビ メールで尋ねられ
孤独ですプリンは上手く焼けたけど
しゅんしゅんと母の声を煎じ葉
好きな場所に好きな花置き一人住む

箕面市 出口セツ子
大阪市 川久保睦子
米子市 鷺見 正子
和歌山市 武本 碧
鳥取県 田村きみ子
和歌山市 福井 桂香
大阪市 三浦千津子
羽曳野市 吉川 寿美
香芝市 大内 朝子
倉吉市 山中 康子
和歌山市 桜井 千秀
出雲市 園山多賀子
鳥取県 西原 艶子
東京都 播本 充子
寝屋川市 森 茜
西宮市 牧渕富喜子
生駒市 飛永ふりこ
東大阪市 北村 賢子
西宮市 門谷たず子
大阪市 本間満津子
鳥取市 録沢 風花
和歌山市 福本 英子
寝屋川市 岸野あやめ
大阪市 鈴木トヨ子
和歌山市 森下 順子

ただ眠るだけの病姉にも爪は伸び
忍び寄る虫はみどりの唄が好き
母の椅子はつこりとして捨てられぬ
靴下のすけた踵にある生活
追伸へ本気も詰めて花切手
青虫の夢は艶やか蝶の舞い
逆らつてみても一人で生きられぬ
釘箱を抱いて猫背がなおらない
先走る思いに書けぬ偲稿
捨て石の位置で奥歯をかみしめる
親切を縦割りにした愚かな日
落葉かきやがて無心になつてくる
車間距離多めにとつて同居する
八重桜妖しいまでに人間味
そして別れ女に深い傷の痕
毒だみを飲んで優しい女になる

鳥取県 石谷美恵子
松江市 安食 友子
米子市 澤田 千春
横濱市 三村八重子
和歌山市 松原 寿子
鳥取市 永原 昌鼓
高知市 小川てるみ
和歌山市 楠見 章子
横濱市 保田 絹子
岡山県 山本 玉恵
倉吉市 野口 節子
寝屋川市 堀江 光子
鳥取市 岸本 孝子
豊中市 櫻谷 郁子
三田市 久保田千代
アルゼンチン 松井美稚子

さち子さんの句―すべて自然体に流れれば幸せかも知れない。ひと
つ無理をやるどこかで亀裂として表われるといういましの句。
千歩さんの句―高度成長の後遺症で、使い捨て時代の一時代で粗大
ゴミと呼んだ。また模様替えにリサイクルする意味で拾つて帰る役
立て運動も。時代の一コマがとて面白い。能子さんの句―心の揺
れを吊り橋に懸けた心象の句。人間だから迷つたり揺れたり当りま
えを如何にして上手く世を渡り切れるか、その人の生き方次第であ
ると。ますみさんの句―人生八十年を支えるこの足、手の指の黙々
さを私たちは忘れてるかも知れない。一日一度は撫でまわしてやり
たい。

譲る

福原 悦子選



やさしさが母親譲りの娘に育ち
農を継ぐわが子の顔に光る汗
これほどの美田を譲る子がいけない
厨房を嫁に譲って花絶えぬ
譲り受けた話が肩に重すぎる
譲ること知って心の和をささる
一歩ずつ譲り二世帯丸く住む
土地譲り憐れし泣きやまず
譲れない杭を最初に打っておく
これだけは譲れぬ線を決めておく
母が娘に譲る料理の塩加減
親譲り沸騰点が低すぎる
ゆずられた田畑の管理荷が重く
岐路に立ち今頂点で譲れない
譲歩する手に切り札は取っておく
煩惱も楽し天国席譲る
席譲る中学生の照れた顔
辞表手にこの正論は譲れない
譲れない命をかけた恋だもの
譲ります欄を賑わす育児品
譲り合う心に小さい花が咲く
禅譲の二字に隠れている本音

(福) 洛 醉 勝 規 典 子 悦 男 正 子 順 風 しげお 九 好 史 風 霜 石 文 江 節 子 珠 美 セツ子 圭二 俊子 幸 夫 喜 子 たず子 洋

譲られて重さを知った古のれん
謙譲の美德無礼なときもある
子に譲る休耕田に花の種
子に譲る遺産肩の荷を添える
譲り葉のように世代を子に譲る
譲ること知らぬ女の肩パッド
向い風 潮時の舵子に譲る
譲られた老舗不況にもてあます
譲り合う心で丸く住んでいる
病む時の約束があり譲り合う
受け継いだ百姓譲る子がいけない
謙譲の美德の裏にある打算
子に譲る財産ないが愛残す
財ないが子に真実を譲りたい
譲り合う事を忘れて置き去りに
住
ゆずり葉を育てて譲る子が居ない
財産を譲る話に火花散る
惜しまれてポストを後進に譲る
サウスボー親父譲りの天の邪鬼
女房に一步を譲る平和主義
人
なにもかも譲って老妻だけ残る
地
一粒の天子神から譲りうけ
天
譲られた父の苦渋を知りつくす
軸
譲られた田畑相手に夫婦老い

(保) 遠 野 絹 男 哲 芳 枝 清 山 充 子 彩 子 五 月 榮 子 芳 郎 善 信 武 史 愁 女 鉄 治 玉 恵 寿 恵 子 笑 子 旋 風 柳 弘 一 花 妻 子 螢 小西雄々

欠ける

八田 敏選



夕焼けに呼ばれて欠ける縄電車
欠けたまどうにか回る夫婦独楽
もったいない気持に欠ける子が育つ
生きて来た月日を語る欠け茶碗
掘り出した土器の欠片が歴史変え
前歯欠け父の説教しまらない
欠けた碑に語り継がれる一揆の譜
また朱線同期桜の住所録
うるさ型欠けて淋しいミーツイング
栄養に欠けて育って骨つばい
欠番に偉業讀える背番号
飽食に馴れて感謝の念に欠け
クラス会前歯が欠けて思案する
折角の美人に欠けている微笑
欠けているわたしのかけら探す旅
歯こぼれが続くわたしの日記帳
欠点のない人柄で蚊帳の外
公德が欠けた花見の宴の後
器用さに欠けて愚直にやり通す
食事どき誰かが欠ける四世代
憂き世からまたひとり欠けふたり欠け
麻雀の一人が欠けて縄のれん

慕 情 富 子 榮 子 岳 水 裕 峰 兵 八 郎 勝 規 省 子 四 郎 周 信 俣 子 清 山 尚 士 あすき 霜 石 克 治 德 三 政 勝 彰 雄 松 煙 螢

総領が欠けて疎遠になる実家
 飽食の街から欠けてゆくモラル
 遊びの輪ゆがみはじめの塾通い
 三姉妹一人も欠けず古希の坂
 愛情の欠けた料理が冷めている
 欠けている夫婦茶碗が掌に馴染む
 常識に欠けた個性が活かされる
 品性を欠いて議員は椅子守る
 欲に負けモラルに欠けた銭を追う
 酸欠の顔が並んだ都市の駅
 順風の男に欠ける思いやり
 欠け落ちた仁王のおわす過疎の寺
 野仏も欠けた茶碗を抱えている
 子の羨欠ける親に要る羨
 和を保つ配慮に欠ける片手落ち

佳

人

地

天

軸

良心が欠けて羊頭狗肉売る
 欠けている皿でも盛れる愛がある
 欠けて満つ月に再起を励まされ
 迫力に欠けるが達者喜寿の日々

あやめ

正 剣

笑 子

和 枝

強 一

恵 勇

絹 子

晴 翠

旋 風

鉄 治

鐘 造

三代子

妻 子

登 美

義 男

隆 盛

正 雄

庸 佑

たもつ

(岩) 康 子

綏 子

照 彦

稲 葉 洋

途 中

徳山みつこ選



無念にも中途でバツジ外される
 途中から割り込んでくる天下り
 階段の途中に刺客永田町
 進化する途中 日本民主主義
 途中下車春の電車に乗り替える
 レモンティー女二人の途中下車
 出勤の途中で探す妻のメモ
 地下鉄で仕上がっていくコンパクト
 逢いにゆく途中と人に言えますか
 途中下車ここで待ってる人が居る
 携帯が入り途中で引き返す
 途中下車噂の跡が消えていた
 途中下車足が怪しい方へ向く
 途中で逢った福の神には気がつかず
 便乗の途中で拾うキーワード
 坂の途中へ夢おいてきたらしい
 人生の途中にあつた向い風
 途中下車一駅歩く足がある
 途中からプラス指向に切り換える
 里からの金が途切れたアルバイト
 前略で始まり中略 子の手紙
 途中から途中で味気ない映画

多賀子
 慕 情
 水 笑
 正 子
 鐘 造
 た え
 四 郎
 千 代
 み ね
 妻 子
 ヒサ子
 さち子
 章 久
 シマ子
 雄 々
 ミツ子
 智 碧
 智加恵
 清 史
 鉄 治
 庸 佑

老いたかな話途中で眠くなる
 途中では帰れぬあとで酒が出る
 説明の途中で医師が黙りこむ
 途中です百まで生ける積りです
 負けているのでチャンネルを切り換える
 絶好のチャンス途中にコマシヤル
 途中から来て大物喜ばれ
 途中まで一番というお父さん
 愛されていると気付いた坂半ば
 結び目が途中でゆるむ倦怠期
 リストラという中年の途中下車
 引受けた以上途中で投げ出せぬ
 八起き目の途中で流れ弾に遭う
 プーメラン途中の泣き言は言わぬ
 水のもでいる極楽へ行く途中

佳

人

地

天

軸

途中から義理で顔出すお葬式
 バス停でなくても乗せてくれる村
 七転び急がすな八起きする途中
 途中から予期せぬ川がはだった
 エリートがS字カーブでこけている
 進まないペンよ手紙はまだ途中
 つり橋の途中でウルトラマンになる
 道草を食つてにんげんくさくなる
 途中から聞いた話にのめり込む

扶美代

旋 風

千 里

しげお

重 人

東 吉

洋 介

たもつ

ひかる

敏 子

強 一

義 男

権 悟

彩 子

螢

遠 野

保 州

浜 丘

典 子

芳 郎

大 輪

あずき

初歩教室

題 増える

吐田公一

初心者の方々が作句するに当たつて心掛けなければならないことは

①誰が読んでも解る句を作ること。最近の作家の中には抽象的な句があり、ややもすると初心者の方はそれが川柳だと思ひ真似てみられる方がある。こうした場合経験が浅いだけに消化不良を起し、何を言わんとしているのかさっぱり解らない句はひとりよがりの句に陥つてしまつてゐる場合が多い。

②次に何事もそうであるが着想が大事。同じ物を見ても他人と同じ眼でみてゐては進歩はない。他人とは一味違つた眼でみる。そのためには全てのことに對して好奇心を持つことが必要である。

添削句

○母さんの笑顔が増えたデイケアー ヤギエ

原句もまずくはないが、

▽デイケアのおかげか母の笑顔増え

○保育器の体重すこし増えている 栄一
体重が増えただけでは川柳にならない。句の中に感情を入れなければならない

▽体重が増えた保育器たのもしく

○これからは絶対増えない預金帳 九好

強調のつもりが、絶対が句を駄目にした。

▽年金で増えるはずない預金帳

○増刷もまだまだ暴露本の売れ

中と下を入れ替えてみると、(着想よし) みず帆

▽増刷がまだまだ売れる暴露本

○拾てられず増えるばかりの古着かな 忠子

○増えるのみ拾てるの惜しむ戦中派 忠子

拾てるのも惜しくて増える不用品

○町さびれ空家増えてる工場跡 三喜夫

上五が冗長

▽倒産で工場跡地が増える町

○趣味の友数だけ増える世話やける 敬之介

下五の表現が川柳らしくない

▽趣味の友増えて嬉しいボランテア

○孫表現増えて頷く首を振る 彰雄

下九音字が説明句。

▽表現が増えて楽しい孫の守り

○休日にはママの悩みが一つ増え (山) 雅子

休日が増えたことの悩みをはつきりと

▽休日が増えてママさん悩み増え

○血糖値増えてカロリー減らされる 菜月
意にそわない食という意味では粗食の方が

▽血糖値増えて粗食を強いられる

○バースデーのローソク増えて深呼吸 錦

深呼吸を溜め息として組み替えてみては

▽ローソクが増え溜め息のバースデー

○皺が増え腰も二重の老夫婦 柳一

丸味で心の丸味も含めてみては

▽皺増えて腰も丸味の老夫婦

○田をはなれ勤めが増える村の道 清

この情景では道より駅の小道具が

▽休耕田勤めが増える村の駅 侑子

○増えすぎる人口地球向破滅 侑子

下五の表現に無理がみられる。川柳は解りやすい表現が大切

▽人口の増加に地球喘ぎ出し

○テレビ局こんなに増やして誰見るの 弘之

下五がおおざり

▽チャネルが増えてリモコンやこしい

○タイガース勝つて肝臓負担増え 勝久

肝臓負担で七音字。酒とすれば二音字

▽タイガース勝つた負けたで酒が増え

○年老いて増える楽しみしわ以外 稔

老いと言えは年のこと。できるだけ解る言葉は省略すること

▽楽しみが増える老後の趣味の会

○顔のしわ増える白髪に悩み増す 智加恵

同じ内容を

▽しわ白髪増える悩みがまだ続く

○子の受験の度に増えた白髪数 宏子

度には冗長。

▽子の受験白髪も数も増える母

○世はかなむ散りきわ族がふえている さだを

説明句といえる。時事吟なら、

▽老人が増えて先き行き不透明 和友

○終着駅残りが増えて旅に出る

何を詠まんとしているのか内容が不明瞭

人生の終着駅とみると、

▽終着駅心残りが増えてくる

○政治資金転がし私財増やす人 像山

時事吟とすれば（秘書給与を他に流用して

も結局は政治家本人の懐は減らない）

▽政治化のふところ肥やす秘書給与

○晩酌の相手す妻は酒量増え (三)美恵子

てには添削

▽晩酌の相手の妻も酒量増え

○通帳に増える利息の涙金 章司

視点を覚えてみると（原句と異なるが）

▽リストラで家計の赤字増えてくる ふりこ

○ほんとと本が増えます積んでます

上五が冗漫。

▽積んどくの本が増えてる老いの部屋

○白髪増え苦勞のせいにして元氣 サト子

苦勞のせいと元氣とがちぐはぐな感じ

▽苦勞したせいで白髪を子に見せる

○年の数増えて使わぬ物も増え 照彦

上七音は例えば老母でもすむわけで、あえて増えを使う必要はないと思う

▽始末屋の老母で使わぬ物が増え

○老斑が増えて六十路の坂半ば 英旺

下九音字の表現を変えてみると

▽老斑が増えて年金近くなり

○皺増えた本音は言わずスチャード ゆきの

本音の具体的な詠みがあればいいのだが

▽皺増えて本音ますます出さぬ姑

○消費拡大景気上げるがごみ増やす 孝明

標語のような表現。視点は違うが

▽デパートの過剰包装ゴミが増え

○増えるのは夫婦のぐちと白髪だけ 満子

倒置法を使ってみると

▽ふたり暮し白髪とぐちが増えはじめ

○休耕田増えて野菜は舶来品 ヨシ枝

休耕と舶来と詠めば野菜は詠まなくてもわかるのでは――

▽休耕が舶来増やす因となり

○帰省するたびに白髪が増える親 秋星

増えるもいいが川柳としての表現では

▽帰省するたびに白髪が目立つ親

佳句

もう一人増えてうれしい孫の婿

数々の疑問を増やす族議員

失望と怒りの増える永田町

低金利増えるローンに役立たず

モール栄え空店増える本通り

見事に増える皺は私の勲章だ

シミ小じわ日割利息で増えている

晴着よりエプロン増して娘の嫁ぐ (木)美代子

減反政策家はつかりが増えてくる (園)喜子

新曲が増えてカラオケ遠くなり

使うほど増える気がする知恵袋

念願の体重増えて紅をさす

楽しみが日毎に増える春の庭

横文字が増えてわたしを悩ませる

幸せな老後に増えた笑い皺

ペイオフで不安が増えた定年後

こだわりを捨てれば笑い皺が増え

頭数増えてメロンがうすくなる (三)八重子

(人間の欲が――)

晩酌に一品増えた裏が読め

(夫婦の機微を)

連休へ茶碗増やして里の母

(母の気持ちをよく詠んでいる)

私句

金増やす話へ欲がひっかかり

文江

栄呼

節子

比佐子

和輝

円女

登志子

(木)美代子

つよし

輝夫

栄子

敏子

昌鼓

裕峰

洋介

(三)八重子

益子

恵勇

福よしえ

「川柳塔」九〇〇号記念大会

平成十四年五月四日(土)

〈臨時同人総会〉 ホテル アウイーナ大阪
3 F 信貴の間

議 事 役員選出 (総会継続審議事項)
午前10時—11時

〈川 柳 大 会〉 ホテル アウイナー大阪
4 F 金剛の間

開 場 午前11時
開 会 午後1時

開会の辞	司 会	西口いわゑ・鶴田 遠野	
挨拶	理 事 長	板 尾 岳 人	
祝 辞	主 幹	河 内 天 笑	
祝電披露	(社)全日本川柳協会事務局長	本 田 智 彦	氏
おはなし		山 本 希 久 子	
	「川柳塔900号の歴史」		
	名 誉 主 幹	橘 高 薫 風	

入選句披露			
「宿」	川 柳 塔 社	奥 田 みつ子	選
「休 み」	川 柳 塔 社	森 山 盛 桜	選
「囲 む」	川 柳 塔 社	高 瀬 霜 石	選
「説 得」	川 柳 塔 社	小 野 克 枝	選
「葉」	ふあうすと川柳社	泉 比呂史	選
「不思議」	時の川柳社	小松原 爽 介	選
「パンチ」	番傘川柳本社	磯 野 いさむ	選
「生きる」	川 柳 塔 社	西 田 柳宏子	選
「九」	(事前投句)	河 内 天 笑	選
閉会の辞	副 理 事 長	西 出 楓 楽	

〈懇 親 宴〉 ホテル アウイナー大阪
3 階 葛城の間

午後5時—7時半

開会のことば	司 会	川上太輪・松原寿子・河内月子
乾 杯		寺 川 弘 一
余 興		小 林 由多香
閉会のことば	詩吟、シャンソン、テナーサクソ演奏ほか	長 浜 澄 子

〈高野山川柳塔碑見学・参拝〉

5月5日(日) 午前9時出発・午後3時帰阪

臨時同人総会

川柳塔社臨時同人総会は、5月4日午前10時から77名が出席してホテル・アウィーナ大阪で開かれた。

前たもつ副理事長の司会で、奥田みつ子副主幹の開会あいさつに続いて河内天笑主幹が「2010年に迎える誌齢1000号の将来を見ずえて足下を固めよう」と述べ、板尾岳人理事長を議長に選出して議事に入った。

今回の議案は、昨年の同人総会で継続審議となった人事問題に関する案件で、中原比呂志常任理事が別項の川柳塔社規約改正案を提案、穴吹尚士・田中正坊氏らから質疑・意見が出され、拍手で採択した。続いて前たもつ氏から役員等に関する規定の改定部分について口頭で報告、西出楓楽副理事長から役員選出について提案し、拍手で承認、新役員が前面に並んでそれぞれ挨拶した。

■川柳塔社規約(改正点)

4 役員 ①主幹を退任した者を名誉主幹とする。名誉主幹は、必要に応じて主幹に助言することができる。

②常任理事は、原則として会議に出席するとともに、社務全般の企画・運営にあたる。

③常任理事会には、文書で提案することができ、提案者は審議結果



あいさつする新役員

6 付則

もしくは経過の報告を受けるものとする。

④川柳塔社の業務運営等に関する規定、役員等に関する規定、慶弔規定等は別に定める。

■新任役員(役職50音順)

相談役 小林由多香

副主幹 仁部四郎・波多野五楽庵

副理事長 小島蘭幸

常任理事 坊農柳弘

参与 都倉求芽・宮西弥生

理事 石原靖巳・加島由一・竹治ちかし

森山盛桜



開会のことば(みつ子副主幹)

〈同人総会出席者〉 薫風・道夫・寿子・澄子・きみえ・まこと・正坊・あすなろ・悦子・幸生・柳宏子・天笑・月子・明月・哲男・寿美子・奮水・重人・恭昌・かおり・(清)玲子・由多香・鹿太・艶子・俣子・千秀・たもつ・利昭・四郎・朝子・瑠美子・扶美代・比呂志・朱夏・柳弘・岳人・敏・一步・町紅・修・可住・棲世・妻子・楓楽・みつ子・昭・五楽庵・慕情・銀波・恵子・ルイ子・弘風・遠野・見清・之男・忠央・ダン吉・尚士・多賀子・和歌子・桂子・義子・希久子・冬葉・盛桜・諷人・みさ子・いわゑ・春蘭・弘一・泰子・笛生・洋・美代子・諷云児・セツ子・(伊)玲子

(順不同・計77名)

川柳大会

大型連休も残り少なくなった5月4日(土) 天気予報の雨マークの予想を裏切り、うつつら日が射すなかを『川柳塔』誌齢900号の大会が開催された。

会場のホテル・アウイーナ大阪ロビーに一歩足を踏みいれると、同人、誌友を初め番傘ふあうすと・時の川柳等、全国各地から駆け付けた参加者、314名の熱気がみなぎり喜びを一層盛り上げている。

4階「金剛の間」の舞台正面には、何時も



天笑主幹あいさつ (路郎師胸像と)



受付風景



司会 遠野(向かって左) いわゑ(右)

のように麻生路郎師の胸像が会場を睥睨されている。心なしか師のお顔も900号達成の喜びに、微笑んでいるように見受けられた。

正午に投句が締め切れ、西口いわゑ、鶴田遠野の司会で午後1時開会となる。

まず板尾岳理事長が「川柳塔の和を大切にしたい」と力強く開会の辞を述べ、続いて「皆さん、こんにちは」と開口一番、高らかに河内天笑主幹の挨拶があった。

来賓の(社)全日本川柳協会事務局長の本田智彦氏から「歴代主幹の並々ならぬ努力で900号に花を咲かせた。75年間、途絶えることなく続いた900号を節目として、次のステ

ップ1000号を目指して頂きたい」と温かいご祝辞を頂いた。

次に山本希久子が祝電を披露、引き続いてのお話は「川柳塔900号の歴史」と題して橋高薫風名誉主幹が麻生路郎師のエピソードを中心に熱っぽく語られた。(別項の通り)

午後2時から入選句の披露に入る。

900号を記念して兼題は9題、各題1句投句60句発表の緊張した披露が続いた後、開会の辞を西出楓楽副理事長が「川柳塔精神の和を以て1000号に向け精進したい」と述べ、午後4時半過ぎ盛会のうちに散会となった。

おはなし

川柳塔九百号の歴史

橘 高 薫 風

川柳塔通巻九百号の記念大会にご出席下さりありがとうございます。私の話のテーマは、「川柳塔九百号の歴史」というのですが、逐一述べることはできませんので、主に麻生路郎先生に関するエピソードなどをご披露して、お人柄を偲んで頂きたいと思います。

路郎先生時代の『川柳雑誌』は四百六十号が終刊号になります。戦中戦後三年ほどのブランクがありました。四十二年に亘る先生の敢闘ぶりは、その一部を私の昨年出した川柳文集に掲載していますので、読んで頂ければご理解が深まるかと存じます。

その後、「川柳塔」と改題、四人の主幹が引き継いで今日を迎えたのですが、五月四日という日は、路郎先生が『川柳雑誌』百号記念に朝日会館で「川柳の夕」を開催され、あの広い会場を千人の参会者で埋めた語り草も五月四日の快挙であったのです。そして、さ来年には創刊八十年記念の年を迎えることに

なります。

路郎先生は一口に言って厳しく陰しい道を歩み、夢を達成された方だと思えます。

改札を出るも先駆者たらんとす

川柳誌を月刊にして確実に出した魁は先生であつたし、朝日会館のイベント等社会へのアピールも、また戦後初めて青森県の東奥日報社主催の県川柳大会に関西から行かれたのも先駆でありました。

先生はまた心遣いの行き届いた人でした。私が、先生は何故句会で句をお創りになられたのですかと聞いたとき、句を創っていたら来会者に対し気遣いが出来ぬからだと言いました。彼は生活に苦しいらしいが、今夜はしつかりやっている顔付きをしている、とか、奥さんが入院したと聞くのでねざらつてやら



主幹 名譽 薫風

ねばならないとか、初めて来た新人に、誰かに声を掛けさせて、続いて出席する意欲を持たせるとか、いろいろ配慮をなされていたのです。そして、私が編集の手伝いを終えて不朽洞をおいとますると、必ず玄関まで送って下さいました。だから私も、先生が考えておられたり、執筆なさっている時は、用事が済んでも立つことを遠慮したのです。

路郎先生は古稀のお祝いの年、昭和三十一年でしたが、

古稀はよし弟子に孫弟子ひまご弟子という句を創られました。個性的な門下生を一層個性的にと磨きを掛けるにも留意をされ、多くの名作家を育てられました。私には私に合う育て方をして下さいました。

ここで私の好きだった先輩数人の句をご紹介します。

吾郷 玲人

税務署と聞いて 蠅取紙を踏み

ノック聞き社長は伏せる「ホトトギス」

奥村 丹路

そもそのの嘘の初めのゴム乳豆

死んだふりして 蜘蛛よ淋しがらすな

笠原 路生

六角堂幾何学的に暮れて行き

三の糸切れて久しくなりにつけり

後藤 梅志

恩を知る点では大にさえおとり
古本屋美味求真がやつと売れ

須崎 豆秋

骨立てたまま二次会へついで行き
院長があかんいうてる独逸語で

真鍋 一瓢

ペンペン草かて春じゃもの春じゃもの
しなびても土筆袴はつけて居た

正本 水客

子沢山使いにやったのを忘れ
散髪の鏡へ雪が降って止み

先生は新しい道を求める傾向の強い癖し
て、テレビやボールペンの始めた時は頑に
反抗を示されて、生涯見ない、使わないと言
われました。評論家の大宅壮一氏がテレビを
「二億総白痴化」と言ったと同じ思いであつ
たのでしょうか。しかし、テレビは後々各
年筆にインキをつけて、編集室では執筆され
ていました。そして私に、そんなに早く字を
書くな、ゆつくりと書かないと人柄まで上滑
りするぞ、と仰有っていましたが、今でも早
書き、不束な弟子であり続けています。

路郎先生は昭和四十年七月七日、七夕の日
にこの世を去られました。明治二十一年七月

十日に生まれ、数え年七十七歳喜寿の年でし
た。今年は私が喜寿を迎えました。私の父も
数え年喜寿の十二月二日が命日なのでとても
心細い。しかし今しばらくは酸素ボンベとの
旅を続けるつもりでおります。

今ここに一通の手紙があります。

謹啓 お世話になります。

第三回の藥（ひこばえ）も川柳塔の西原颯
子さんでした。

市制五十周年記念大会前夜祭には、市長よ
り西出楓楽様、小島蘭幸様、西原颯子様への
句碑建立認定書授与式がありますので、祝つ
てあげて下さい。

これは岡山県笠岡市の井笠川柳会の戸田寛
雄氏からの書信です。

「人間陶治の詩」「いのちある句を創れ」
のスローガンを実践し、生々庵・葉・私・天
笑と四人の主幹が指導をしてきた句のレベル
アップが如実に示されたものと、これは自慢
にしてもよいと思います。

路郎先生の意志「川柳雑誌」は一代で終刊
にしたいというのも、路郎時代の句の輝きを
枯らさずに欲しいの思いでありましょう。

同人誌友皆さんのご精進と、相互の和を念
願して、九百号のお話と致します。

ご静聴有難うございました。

御芳志御礼（敬称略・順不同）

いずも川柳会・京都塔の会・川柳ささやま・
堺川柳会・川柳塔まつえ吟社・時の川柳社・
川柳塔おとり一同・川柳塔鹿野みか月・
川柳塔さやらほく・竹原川柳会・美研アート
天根夢草・石原靖巳・泉比呂史・安藤善美子
板尾岳人・板野美子・稲葉冬葉・池内かおり
井上照子・小野克枝・籠島恵子・石倉美佐子
木本朱夏・清川玲子・小西幹斉・奥田みつ子
坂本晴美・梶元世津・高瀬霜石・高田美代子
谷口 義・山本義子・長浜澄子・久谷まこと
土橋 瑩・都倉求芽・寺川弘一・徳山みつこ
前たもつ・西出楓楽・中原諷人・西口いわゑ
本田智彦・森井善居・森山盛枝・村上ミツ子
仲川たけし・山本蛙城・山本希久子
磯野いさむ・小松原爽介・中田たつお
森中恵美子・波多野五楽庵・宮西弥生

祝電拝受（敬称略・順不同）

番傘川柳本社 主幹磯野いさむ 幹事長田
中新一・中川一・川柳クラブパーセント・
石倉美佐子

懇親宴

九〇〇号記念川柳大会出席者三百余名の盛会の余韻を携えて百四十名の多数ご参加を得、はじめから活気むんむん川柳人ならではの懇親宴開会であった。

司会は川上大輪さんと松原寿子さん。開会の辞は寺川弘一さん。乾杯の音頭は本日付けで川柳塔相談役就任の小林由多香さん。

はじめに、二宮山久さんの祝詩吟朗詠。題は「春日山回顧」で張りのある声に会場がひきまされる。次は長谷川会美さんのシャンソンで「バラ色の人生」ほか。皆さんの郷愁を誘う感があった。続いて西出文信さん。(因みに楓楽副理事長の息子) テナーサククス演奏はピアノ伴奏にのせ八曲。心地よくダンスを興ずるグループもあった。



乾杯 由多香相談役

途中で天笑主幹がピアノ伴奏で「慕情」を熱唱、会場の皆さんの若きう血をかき立てた。アンコールに应えての「セントトリートマス」は手拍子となり盛り上がった。

息入れたところで、鳥取県グループによる恒例の「貝殻節」の大合唱。吉川寿美さんは薫風名誉主幹、天笑主幹の句を吟詠。

あと、お待ちかねのカラオケになって皆さんプロ並みの節回しのノドを競う。

本日は、会席料理であった。ほどよく運ばれ美味しくいただきお酒、ビールで旧交をあたためまた新しい出会いの輪が陽気にあちこちに花咲いていた。

さて、一千号は、2011年9月とか。あと十年とそれぞれ胸算用なさった方もあるだろう。



司会 寿子(向って左) 大輪(右)

ろう。

最後は「炭坑節」の大合唱と踊りでクライマックス。お名残つきぬなかを長浜澄子さんの閉会の辞でお開きとなる。

お元気でと十月の「川柳塔まつり」での再会をお約束しつつ。

川柳塔社一千号にむけ、いざ邁進せん。



サククス演奏



川柳大会入選句

宿

奥田 みつ子選



宿命のいくさで聖地血塗られる
戦いの火種を宿す神の声
想い出の宿に残っていた火照り
古稀の旅雀の宿はどこだろう
子を産んでこの世を仮の宿とせず
駅裏の宿で出てきた故郷へ書く
宿坊で贅肉落とす座禅組む
りんご湯の宿に津軽の詩がある
野宿して風の中ゆく山頭火
残り火を燃やして探す終の宿
宿坊に肩の凝らない羅漢たち
司馬がゆくどの宿場にも歴史見る
雀のお宿わたしに帰る家がある
宿敵が来たので風が尖り出す
北の宿民話さく夜の風しずか

板東 倫子
本田 律子
中井 アキ
原 みさを
居谷真理子
早川 棲世
吉道あかね
相馬 銀波
初山 隆盛
西原 艶子
御園 孝子
安達はじめ
板野 美子
森 イク子
鍛原 千里

丹精に花さかせても仮の宿
合宿の汗で絆を固め合う
宿につきまらず大の字になってみる
藤村もかくやとランプ木曾の宿
水軍のロマン伝える島の宿
殿様にさせてもらった旅の宿
山の旅灯ともし頃の子守歌
頭の中にサタンが眠る宿がある
宿敵が一人居るから輝ける
自然薯を少し買いたる山の宿
宿敵は私自身かも知れぬ
かわせみという名の宿に癒される
思い出の宿のはたるがまだ光る
民宿に胡坐のギャルと並ぶ膳
小説の宿ゆうれいとすれ違う
チェックインすべてを潮騒にまかす
父の樹に宿って鳴き尽くす蟬よ
パンを焼く香りほのかな森の宿
かたくりの花が迎える山の宿
産声のあなたに宿る母の愛
民宿に小さな嘘を置いてくる
青テントでも暮らせませうセラセラ
千日回峰五体に宿るほとけさま
何も彼も忘れて宿の風になる
双六の上がったとこが終の宿

嵯峨根保子
生嶋ますみ
岩佐ダン吉
川端 一步
長谷川呂万
岸本 孝子
村上 直樹
小林すみえ
池 森子
高島 啓子
柏原 優子
新家 完司
泉 比呂史
中野 健吾
阪本 高士
前田 咲二
八木 千代
鴨谷瑠美子
前 たもつ
黒田 能子
片岡智恵子
河内 月子
大石あすなろ
貞森 朝代
川島諷云児

神さまを宿して光り出す蜩

旅をする青い地球を宿にして

ふかふかの命にかえる山の宿

摩周湖も宿も隠れる深い霧

方言も丸く行き交う湯治宿

山女魚釣れ始めましたと山の宿

ふるさともう家はない宿の風呂

飯の世の出会いと訣れ飯の宿

この奥にスズメのお宿あり嵯峨野

木の幹のくぼみを宿に春を待ち

心経の声宿坊の朝が明け

軒の宿ツバメに先代のはなし

佳

干しイカのすだれをくぐる海の宿

文豪の泊った宿で氣をもらう

カラコロと宿下駄笑う手をつなぐ

図書室に森の匂いが宿ってる

昔来た宿でむかしの殻拾う

人

飯の宿飯の縁の浅からず

地

エッセイの宿つり橋がゆれている

天

旅人に空気をに入れてくれる宿

軸

見送って宿る木もなく立ちつくす

岸 桂子

西浦 一慧

伊藤 玲子

吉村 雅文

吉田喜代子

日野 愿

加島 由一

藤田 泰子

徳山みつこ

河内 天笑

小林 妻子

中原 諷人

中田たつお

西出 楓楽

山本 義子

菱木 誠

小野 克枝

山本希久子

杉森 節子

高瀬 霜石

奥田みつ子

休み

森山盛桜選



ズル休みしてタイガース見に行った

休日になると虫歯がうずき出す

暫くはお休みと書く店じまい

何年も恋を休んで太り気味

毎日が休みで仕事したくなり

うどん屋の休みの札が憎らしい

一休みして仕返しを考える

休日の脳にビールをぶっかける

休まずに勤めた社から休まされ

にんげんをしばし休んで昼寝する

連休は妻のお墓に参ります

休み休みに言うたら話噛み合わせ

連休は老いには老いの予定あり

新聞も手紙もわたくしも休み

一拍も無断で休む不整脈

休みなく尻尾を振って風上る

花マルの夫がくれた四分音符

遊びなさい休みなさいとお節介

志田 千代

前 たもつ

村上 直樹

前原 正美

楠 昭子

鴨谷瑠美子

安藤寿美子

小西 幹齊

早川 棲世

西出 楓楽

西内 朋月

桜井 千秀

堀端 三男

梶元 世津

乾 春雄

北野 哲男

村上 氷筆

太田扶美代

屈強な男産休とると言う

友だちの数が休みを休ませず

連休の籠城もよし本がある

夏休み今年は父と挑む富士

野心を抱いたユダには休む席がない

休日にくれた体温八度五分

毎日が休みのせいで忙しい

連休が済めば遊びに出かけよう

充電した顔でありたい休み明け

連休の最後は雨になるように

休耕田先祖のマグマ煮えており

梯子まだ半ば休めば落とされる

形状記憶休みたくなる午後三時

四分休符ほんの僅かな暇もらう

休日は山に分け入り山頭火

新刊書の香りの中でひと休み

連休へ尋ねる人の無い独り

適当に休みをとっているいのち

はごろもを畳み天女の休息日

古本屋休業 猥雑な通り

双六の休み癖まで似て親子

水槽のくらげと遊ぶ休息日

休日も脳休まない創業者

サンデー毎日妻の帰りを待っている

米田 恭昌

森中恵美子

初山 隆盛

藤井 正雄

和気 慶一

西浦 一慧

野下 之男

徳山みつこ

秋山シメ子

小島 蘭幸

中野 健吾

八木 千代

大石あすなろ

中原 諷人

久保田半蔵門

青戸 田鶴

森 イク子

中田たつお

吉村 雅文

桑原 道夫

相馬 銀波

藤田 泰子

河内 天笑

沢田 和子

逃げきれぬ老いなら君とひと休み

春なのにハート畳んで寝ています

四連休を総て私にくれた人

もう休めとテンカウントを遠く聞く

職去って感動のない春休み

図書館にわたしのオゾン層がある

真心を込めて気休め言う見舞

休みには消える大腸症候群

さざ波がお休みしたいなんていう

休日の行方知らずの竹トンボ

佳

休みましょ 賞味期限が切れました

ときどきは影をさすって休ませる

にんげんを見ぬように目を休ませる

やすらぎのいびきが洩れる玩具箱

野の末の石の温みに腰おろす

人

休みには柱の傷を見て回る

地

最後には休める場所があるドミノ

天

一休みして魂を裏返す

軸

遠縁を死なせサボって一週間

片岡智恵子

星野きらり

辻 葉

菱木 誠

古川 奮水

高瀬 霜石

井本 清山

西原 艶子

柴本ばつは

吉岡きみえ

遠山 可住

伊藤 玲子

新家 完司

波多野五楽庵

原 みさを

政岡日枝子

泉 比呂史

吉田あずき

森山 盛桜

囲む

高瀬霜石選



一人でも鍋を囲むて言うやろか
豊かさに囲まれてる瘦せた街
取り囲むマイクに秘書がやりました
気前よい人でみんなに囲まれる
いい酒だ弁天さまに囲まれて
揺りかごを囲んだ顔もみな似てる
私を囲む鬼の手仏の手
百歳の親を囲んでる白髪
マドンナを囲んだ風がよく喋る
いつまでも囲いきれない子を放つ
残り時間を大切に火を囲む
元看護婦に囲まれた怖い夢
鍋囲むみんな味方と限らない
ぐい飲みを囲んで探る妥協点
勘定が気になる美女に囲まれて
おふくろは太陽皆の真んなか
噴水を囲み五月の待ち合わせ

田岡 九好
田辺 鹿太
篠原いつふみ
植田 一京
三島 崧丘
吉岡 修
西浦 一慧
太田とし子
鍛原 千里
籠島 恵子
土橋 螢
岩内 外吉
坪井 孝一
山岡富美子
角野 仁清
早崎 和子
田中由紀子

主語述語に囲まれわたしくるしくて
駅前でうまい話に囲まれる
地方紙にこんなにくくい囲み記事
たんす預金あるので塀を高くする
囲まれた方が負けだと限らない
黒枠で囲むと写真若返る
手で囲む蛍無心に光り出す
価値観が違う外堀埋められる
傾いた我が家をバンジーで囲む
刑務所の壁は懺悔の高さなり
先生をみんなで酔わす花の下
常識の囲いの外に出る野心
何に囲まれようと恐い歳でない
花花花少女ひらりと蝶になる
欠席をマルで囲んでから自由
愛という囲みを破る反抗期
妻と子と孫に囲まれあとわずか
両の手で囲むと青い鳥逃げる
ぐるりと囲む母さんが逝った夜
師を囲むみんな銚子を持っている
若者に囲まれ若い顔をする
熱燗を囲む 許し合えそう
かごめかごめ一人囲んでるいじめ
札束を囲んで悪人になろう

柴本ばつは
楠見 章子
中田たつお
井尻 民
酒井 一壺
古澤 和彦
竹森 雀舎
遠山 可住
新家 完司
和田つづや
西内 朋月
吉村 雅文
板野 美子
渡辺 富子
松下比呂志
瀬戸まさよ
安達 忠央
小山 紀乃
坂田和歌子
小島 蘭幸
濱田 良知
長島 敏子
吉道あかね
天根 夢草

人間の終わりを人間が囲む

この際だ垣根外して生きてみる
一輪のバラを囲んでいるピエロ

ミカン箱囲んだ遠い日の夕餉

手囲いの中で蠟燭生きかえる

麻酔から醒めて笑顔に囲まれる

嘘まことまことか嘘に囲まれる

輪の中の鬼は母さん探してる

善人に囲まれ酸素不足気味

ああ不覚と金如きに囲まれる

少々の毒に囲まれ生きている

佳

取巻きがいいからきつといい人だ

嘘一つ囲んで嘘が騒いでる

イエスマンが囲み裸の王様に

かごめかごめだあれも戦にはやらぬ

温厚なお面の鬼に囲まれる

人

夕焼けいろの酒と人間を囲む

地

僕の未来を囲んでくれるお仏壇

天

空豆を囲む優しい家族たち

軸

卓袱台の夢を見ている寒い椅子

森山 盛桜

吉道航太郎

阪本 高士

笹倉 良一

八木 千代

寺川 弘一

亀岡 哲子

樋口 冬虹

西出 楓楽

妻谷 重三

岸 桂子

岸本 宏章

前田 咲二

志田 千代

石堂 潤子

河内 天笑

森中恵美子

小西 幹斉

日野 愿

高瀬 霜石

説得

小野 克枝選



進学をあきらめさせた父が泣く

説得にうなずく老母の車椅子

これ以上説得出来ぬ木偶の首

口説き上手で人の話は聞いてない

説得をするのにどうも手ぶらでは

不覚にも母の涙に負けました

褒め上手うまく課長にのせられる

鬼の役酒に説得されて買う

母さんの背なに説得されている

説得の語尾から漏れてくる打算

鶴を折る無言の説得だと思ふ

説得へ納得いかぬままの印

無口だが説得力のある背中

意地っ張り今日はすんなり受けてくれ

説得をされるとマグマ煮えたぎる

かあちゃんに説得されているお酒

説得は要らない理解がほしかった

まず母を味方に父を説き伏せる

久保田半蔵門

指宿千枝子

竹森 雀舍

前田 咲二

脇 正雄

油谷 克巳

南原 正和

藤井 正雄

吉岡きみえ

吉道航太郎

政岡日枝子

伴 洋子

藤田 泰子

河内 月子

井尻 民

大橋 鐘造

太田 昭

米澤 俣子

説得へ切り札となる母の賭け
 説得に恋の炎が煽られる
 説得をされたかまっ白な鴨
 説得をしても聞かない猫の耳
 友情の説得太くなる絆
 説得に一升瓶のいる男
 はとけの名借りて説得しています
 説得に行く現金を用意する
 瞳の中の星に説得力がある
 泣きに來た海に説得されている
 説得へ自分の恥も曝け出し
 鼻欠けても説得力のある仏
 説得に女の涙借りてくる
 説得も無駄だと思ふ子の主張
 墓石に説得された花手桶
 説得に応じた政治家のいのち
 説得が効いて未来図が光る
 説得にきて激励をして戻り
 ついて來いその説得にかけた運
 口よりも説得力のある涙
 一度でも会ってみたらと写真出す
 説得も空し駆け落ちしてしまい
 説得をやめたらやる氣出て來た子
 仏さまの説得が要る私です

中尾 飛鳥
 小林すみえ
 徳山みつこ
 西原 艶子
 栗田 久子
 波多野五楽庵
 鴨谷瑠美子
 杉森 節子
 高瀬 霜石
 亀岡 哲子
 篠原いつふみ
 澤田 千春
 田村 邦昭
 矢野 梓
 太田とし子
 阪本 高士
 池 森子
 藤井一二三
 藤村 メ女
 宮本かりん
 齋藤さくら
 中野 健吾
 樋口 冬虹
 辻 葉

説得の決め手となった補償額
 説得を尻目に成田離婚する
 飴とムチ飴を多めにちらつかせ
 説得は母の大きなにぎりめし
 説得に行つた男が帰らない
 説得の釘が曲がつて動かない
 聴診器当てて話せば解り合う
 こんこんと説かれ頷くほかはない
 説得を丸呑みにして大火傷
 説得をするには少し風がいる

佳

説得の旨い諭吉にすぐ負ける
 説得をしたらポロリと椿おち
 説得が利いて柱が太くなる
 説き伏せてみたい女が一人いる
 説得の目の奥にある思いやり

人

一本の筆が私を説き伏せる

地

あれ以来妻を説得できません

天

説得をされても友情は売らぬ

軸

説得をされて素直な古時計

福島 直球
 坂本 晴美
 前原 正美
 細川 稚代
 石森 利昭
 小西 幹斉
 村田巳代一
 小山 紀乃
 初山 隆盛
 太田扶美代

森 イク子
 坂田和歌子
 伊藤 玲子
 高須賀金太
 泉 比呂史
 三島 淞丘
 楠見 昭子
 石堂 潤子
 小野 克枝

葉

泉 比呂史 選



そよ風をうけて素直なおじぎ草
前進を示唆して光る柿若葉
フレディーに見えて優しくなる箒
目に若葉ベッドの上の松葉杖
大木も苗木も同じ松の色
葉桜も一年生も逞しい
葉桜になって落ち着く散歩道
枯落葉積んで女の葉を焼く
葉脈の先まで届く朝の露
一枚の枯れ葉にもある愛の彩
腹一杯吸うて吐き出す若葉風
葉脈に見とれてしまふ五月の陽
真っ直ぐに飴が渡る谷若葉
柿の葉が光る私も走り出す
まっすぐに伸びる若葉で迷わない
枯れ落ちて明日の命の糧となる
わたくししの恋も若葉もいま炎える

天根 夢草
神原 文
嵯峨根保子
榎本日の出
中澤 伽羅
小島 蘭幸
舛田 治子
小野 克枝
本田 律子
三好 專平
濱田 良知
吉道航太郎
長島 敏子
青戸 田鶴
竹森 雀舎
北村 賢子
大内 朝子

チエーンソーに森の青葉が泣いている
枯葉ちらちら世代交代つづけている
葉桜は葉桜なりに元気です
葉には葉の役目があつて柏餅
年輪をひとつ増やして葉を落とす
風も陽も味方と信じている若葉
わたくしも落葉も土になる命
まだ蝶になれず木の葉の裏にいる
温暖化葉桜だけの通り抜け
来年の約束をして葉に変わる
北風に唆されて舞う枯葉
目に青葉気がかりなことひとつあり
葉の穴が知らせてくれる無農薬
時移りフレディーの葉は地に還る
朝市の自慢菜つ葉の露も売り
はやばやと虫に食われている若葉
リハビリへ若葉の風も味方する
子供等の記念樹の葉も今盛り
青葉風さわぐやまとの仏たち
転勤の留守をあずかる柿若葉
お茶の葉をたつぷりこれも母譲り
葉桜になったら誰ももう来ない
サングラスかけて若葉を見ないよう
無花果の葉っぱで足りていた衣装

八十田洞庵
小西 幹齊
高瀬 霜石
脇 正夫
高島 啓子
居谷真理子
出口セツ子
川久保睦子
森本 弘風
吉岡 修
大橋 鐘造
井尻 民
石橋 直子
田中 正坊
小林由多香
新家 完司
吉村 一風
小林 妻子
杉森 節子
森 茜
鴨谷瑠美子
田村あき子
安芸田泰子
森 イク子

葉桜にもう逢えないと思ひ知る
大木も二葉の恩を忘れない
糸電話ぶつりと切れて枯葉舞う

草笛を吹くとかすかに疼く過去
葉桜になつてイベントみな終り
老婆と探す四つ葉のクローバー

新緑の過疎に映えてる鯉のほり
土になる覚悟ができて舞う枯葉
若葉もう競い合つてゐる風の中

葉桜のわたし少うし派手にする
母からの手紙がとどく木の芽どき

佳

転落の椅子に落葉を敷きつめる

葉脈を透かすと森が喋り出す

傷心の肩に落葉がまといつく

若葉発進シートベルトを締め直す

葉ざくらの下で昔に招かれる

人

やがて散る覚悟は出来ている若葉

地

葉脈を透かせば新たないのち

天

大空へ万歳したい双葉たち

軸

れんげ田のまん中へんに座る恋

植田 一京

岸本 孝子

鍛原 千里

村上 永筆

宮口 笛生

角野 仁清

齋藤さくら

吉田 太一

宮本かりん

萩原 典呼

阪本 高士

本多 完児

中井 アキ

乾 春雄

大石あすなろ

町田 達子

乙倉 武史

高田美代子

海老池 洋

泉 比呂史

不思議

小松原 爽 介 選



七不思議つきつめ夜が眠れない

この歳で男女の不思議まだ不思議

不思議です古稀を過ごして若くなり

とまり木の不思議詩人になってくる

仮の世を不思議不思議で終わりそう

恋という不思議泣いたり笑ったり

見詰めれば飛べる気がする碧い空

証言台に立つとホントが出てこない

少しぐらいいは不思議を持って生きている

いつ見ても開店セールやっている

胸に手を当てて不思議な縁と知り

まちがわずちゃんと毎年くるつばめ

神出鬼没の卑弥呼が未だ分らない

休日には不思議に早く目が覚める

切株に座って思う世の不思議

機密費の行方大方便途不明

今生きているのが不思議戦中派

不思議にも大事な時はいつも留守

御影 静

藤井 則彦

妻谷 重三

鴨谷瑠美子

吉田あずき

植田 一京

大橋 鐘造

徳山みつこ

小島 蘭幸

村上 玄也

藤井一二三

天根 夢草

辻 葉

津守 柳伸

泉 比呂史

源田八千代

田中 正坊

安達 忠央

天網の疎が不可思議と仏様

頼りない部下止まり木でよくもてる

妻だけがどうして若くなつてゆく

カタログの花を信じて蒔いたのに

好きだけで全部許せるから不思議

無神論されど不思議な蝶の羽化

百歳を超えた不思議がボクにある

妻の顔不思議に変わる外出着

酒たばこ止められぬまま百になる

神様の傑作男女摩訶不思議

美女と野獣神の悪戯かも知れず

蹟いて不思議焦点捜し当て

陽炎を見ていた孫の大きな瞳

不思議なものか同じ血を持つ母娘です

トラウマをかき消す不思議持っている

天国に不思議なものは置いてない

至近距離不思議な女などいない

総論で賛成だった票が消え

手を組んで歩く不思議なことはない

モザイクをかけると何もかも不思議

胎内の海に不思議が満ちてくる

天の声聞こえるなんていい耳ね

上役が変わって急に活気づく

腕組みをとくと空まで青くなる

山本 蛙城

藤井 正雄

岩内 外吉

町田 達子

吉道あかね

緒方美津子

小西 幹齊

酒井 一壺

前原 正美

乙倉 武史

濱田 良知

相馬 銀波

米田 恭昌

山本 義子

森 茜

寺川 弘一

谷口 義

仁部 四郎

小林 妻子

高田美代子

木本 朱夏

川口 信子

吉岡 修

岩佐ダン吉

偶然にしてはあまりに図星だな

小児ガンだったわたしがもう五十

そんなことまさか日々にある不思議

人間が神を信じて殺し合う

手術後に不思議と多い見舞客

今も生きてる古里の七不思議

人間の創る時効という不思議

旗ふりがいないが続く蟻の列

ヒトゲノム不思議な神の在わします

価値観の違う夫婦にある不思議

住

疑問符は疑問符のまま胃に溜まる

みんな優しくてこんなに物忘れ

政治家に今井戸堀がない不思議

不思議だとなりの堀が高すぎる

秘書という不思議な虫を飼っている

人

ふしぎなものに明日香の石と妻の勘

地

一筋縄でいかぬ男が食う茶漬け

天

悪を積む度にきれいになる不思議

軸

傍目には不思議な夫婦かも知れぬ

長谷川春蘭

高瀬 霜石

梶本 哲平

川端 一步

森本 弘風

江口 度

森中恵美子

前 たもつ

木村 無祿

山口 光久

川上 大輪

前田 咲二

寺田 甚一

鍛原 千里

阪本 高士

小林すみえ

柴本ばつは

早崎 和子

小松原爽介

パンチ

磯野 いさむ 選



パンチある女にもらう力瘤
パンチ力子飼いの秘書に拘われる
正論のパンチころにつきささる
でかしたぞパンチのきいた産声だ
みほとけはパンチパーマでおわします
正義派のパンチで退社歴がある
善人の仮面で避けているパンチ
あの時にスカート踏んだのはパンチ
パンチパーマ羽織袴で宮詣り
パンチの数が樹齢だと思ってる
セクハラの恩師へ止むを得ぬパンチ
ボディブロー夢遊病者になるリング
キムチ漬けパンチが効いている自嘲
パンチ効く絵画に春の鬱がとぶ
ここ一番見事パンチの効いたベン
パンチあるセリフだまつてついてゆく
父さんはパンチパーマ ママ茶髪
衝撃のパンチあんたのとりこです

本田 智彦
前 たもつ
村上ミツ子
西浦 一慧
嵯峨根保子
和田つづや
山岡富美子
小西 幹斉
渡辺さだを
中原 諷人
中野 健吾
丹後屋 肇
園山多賀子
御影 静
河井 庸佑
宮崎シマ子
古澤 和彦
北村 賢子

うごめく悪へ必殺パンチしてやろう
右頬を打たれ左もまた打たれ
パンチ押えて後継ぎを育てて
行間にパンチを秘めたみつをの詩
ゴーギャンの女にパンチ満ちあふれ
朗朗と犬養節にあるパンチ
涙拭く愛のパンチよありがとう
深読みのアツパー貰う風は春
パンチよりよう効く美しい涙
パンチ出る薬と信じ飲んでみる
新薬のパンチ四季報上げ潮に
捨て石がすごいパンチで攻めてくる
ひと言のボディブローが効いてきた
大好きなパンチの効いたはるみ節
師のパンチ五臓六腑にしかと効く
パンチ一発時々死にたがる人へ
風葬や最後のパンチかも知れぬ
おきばりやすはんなり効いてきたパンチ
本心は痴漢にパンチくれてやる
さあ五月パンチきかせたカレー煮る
議員辞職民が加えたパンチ効く
一言の愛あるパンチ立ちなおる
トラのパンチなにわの春を熱くする
パンチきかしたおやじの位牌静かだな

野坂 なみ
笹倉 良一
政岡日枝子
吉道航太郎
小林すみえ
杉森 節子
小野 克枝
相馬 銀波
玉置 重人
山川日出子
山本憲太郎
西口いわゑ
山本希久子
中澤 伽羅
渡辺 富子
太田扶美代
高田美代子
木本 朱夏
池内かおり
居谷真理子
長谷川呂万
川口 信子
福田 悦子
太田とし子

肘鉄の形で千尋は恋をする

何時の世も弱者めがけて来るパンチ

突然のパンチ胃カメラ飲みなさい

魚河岸の威勢パンチのきいた朝

一発のパンチで視野が丸くなる

今年は違うパンチの効いたタイガース

あの借りをダブルパンチで返そうか

ほかのパンチに寄ってくるのは鳩ばかり

目に見えぬパンチ敵にもいい女

パンチ効かせて手抜きはしない身嗜み

佳

パンチ食った思い出消えぬ二等兵

心へのパンチを癒すのは時間

どん底で神のパンチに蘇る

東大寺展静かなパンチいただきぬ

パンチ一発論す恩師も泣いている

人

休耕田先祖のパンチ食らいそう

地

流されて流れてパンチから抜ける

天

古典から貰うパンチと喜びと

軸

パンチある一言支援金に寄せ

坂本 晴美

小西 小雪

矢倉 五月

吉田 太一

池 森子

宮口 笛生

辻 葉

板野 美子

田頭 良子

早崎 和子

松下比呂志

田村あき子

大橋 鐘造

西出 楓楽

澤村猪太郎

平松かすみ

宮西 弥生

奥田みつ子

磯野いさむ

生きる

西 田 柳宏子 選



とりあえず今日生きるため飯を炊く

ガン告知から八年も生きた父

ダンボール箱でどっこい生きていた

ホームレスも生きねばならぬ衣更え

束の間の夢を大事にして生きる

身の程を知ったくらしで生きのびる

アフガンの子はたくましく生きており

遺言状書いて死ぬ気はさらになし

百歳を目指して生きる葉包紙

鉛筆と句帳百まで生きてやる

欠けてきた五体へ叙勲生きて候

腹もへる感動もする生きている

精一杯生きよう寿命果てるまで

いじめっ子君が居るから生きられる

ちくはぐに靴履いてます生きてます

生き方は斯くの如しと父の靴

生きている酒と肴を道連れに

まだ生きていたかと友の笑いじわ

水谷 正子

磯野いさむ

舟木与根一

桑原 道夫

恒松 町紅

森下 順子

三好 専平

亀岡 哲子

田中 みね

梶川雄次郎

星野きらり

石橋 直子

堀端 三男

宮木 一夫

楠見 章子

山口 光久

沢田 和子

角野 仁清

蚊にさされダニに噛まれて生きてゐる

百までも生きる気骨の万歩計

もう先が見え真剣に生きてゐる

生きてゐる天地人から氣を受けて

夢食べて生きて居ります姥核

事ここに夢は野ざらし粥の蟻

生き方に干渉しない核家族

まっすぐに生きた答のある樞

天と地の恵みで今日も生かされる

生きていく節目節目に運命線

平凡に生きて迷わぬことにする

雑草が元氣を出せと言つてゐる

軋む日も笑う日もある生きるとは

正直に生きた男の骨軋む

夫の加護あつて八十路へ生きてゆく

尺貫法夫と酒と米に生き

生きるのも死ぬのも医者を選択肢

生きるため余生へしほる知恵袋

八起き目はきれいに生きる日の座禪

共に棲む命の孤独寄せあつて

野に生きて自然と対話欠かせない

頑固さが生きる力のエネルギー

正直に生き閉店の三代目

生涯を農に棚田を守り抜き

新家 完司

石堂 潤子

植田 一京

西出 楓楽

藤田 泰子

相馬 銀波

長浜 澄子

山本希久子

吉川 寿美

黒田 能子

福士 慕情

河内 月子

大石あすなろ

渡辺 富子

貞森 朝代

北野 哲男

板東 倫子

土居ひでの

宮西 弥生

居谷真理子

桜井 千秀

井伊 東吉

藪野けい子

山本憲太郎

じつとしてゐては生きてる甲斐がない

生かされて少しこの世のお手伝い

琴線がしつかり生きてゐる若さ

生きていくお手本母のシルエツト

寝たきりも百までも生きる余力持ち

歳だから二人仲良く生きましよう

税金の上で住んでも生きてゐる

人間に恋して明日へ生きてゐる

撫し銀と言われるまでは生きたいな

遺伝子に逆らわんよう生きてゐる

佳

再生紙のような時間を生きてゐる

戴いた命に感謝して生きる

カルテ厚く老いの余白を生きてゐる

若い若いと呪文をかけて生きてゐる

すりかれた影ひきさずつてまだ生きる

人

ゆつくりと亡夫の残した日を生きる

地

明日生きる保証はしない余命表

天

百までも生きるつもりのみ米寿過ぎ

軸

難病に負けることなく生きてゐる

内藤 光枝

伊藤 玲子

村上 直樹

江口 度

恒松 素子

江見 見清

寺井 東雲

出口セツ子

太田扶美代

河内 天笑

木本 朱夏

岸本 孝子

川久保睦子

高田美代子

吉田あずき

松尾 和香

川島諷云児

宮口 笛生

西田柳宏子

事前投句

九

河内 天笑選



九百号微笑み給う路郎像

九百号歴史の中にいるわたし

九〇〇号起伏を越えて来た月日

九〇〇号天まで伸びる一里塚

九〇〇号雲の上から師も参加

九百号千号までは掌にしたい

踏みしめて九〇〇段の坂登る

九〇〇の賛歌うれしくひびき合う

九〇〇号更なる塔へ奮い立つ

借りて来てナインの揃う草野球

ナインより目立つ監督好リード

阪神のナイン奇跡を起こしそう

一喜一憂させて九回裏になり

九回の裏にあがった大花火

九回の裏あつさりと終わるなよ

藤井 正雄

大谷 篤子

中井 昭子

福士 慕情

森下 愛論

伊藤 玲子

岸 桂子

竹森 雀舎

坊農 柳弘

吉道航太郎

羽田野洋介

和田つづや

波多野五楽庵

澤田 千春

田村あき子

九回の裏のドラマを待っている

九官鳥我が家の秘密みな喋り

九官鳥いるから本音喋らない

英語べらべらの九官鳥にシャッポ脱ぎ

ボクに似てなんと無口な九官鳥

どうしよう九九に躓くことがある

割り勘の九九から酔いが醒めてくる

九条はいしずえ骨は抜かすまい

有事法制第九条をそそのかす

九条に縛られて出る自衛艦

九条にこだわり無防備な日本

やがて九条見直す風がきつと吹く

政争に九段の兄を巻き込むな

夫や子の声する九段坂のぼる

感度良好平成の九十歳

五六歳年を多めに言う卒寿

九十じゃそうな後妻もいるそうじゃ

まん中に九十の笑顔座らせる

卒寿まで妻と櫓を漕ぐ夫婦舟

九十歳目指して母は竹を踏み

本当に九十九鳥か数を読む

九十九坂越えた証の足の裏

吉田 太一

大橋 鐘造

石原 歳子

神原 文

楠 昭子

安土 理恵

上地登美代

栗田 久子

山本憲太郎

舛田 治子

村上 玄也

澤村猪太郎

石森 利昭

小林 妻子

緒方美津子

前原 正美

小池しげお

黒川 紫香

長谷川呂万

河内 月子

内海 幸生

沢田 和子

九十九まだまだ元氣句を捻り
 九十九折越えて光を手に掬う
 永らえて白寿の恋を致さんか
 借景の九輪夕陽に映えて浮く
 昭和九年九月九日九時生まれ
 三三九度神が結んだ赤い糸
 九層倍と知りつつ薬飲んでいる
 九十円切手思いのたけを書く
 いろいろと合わぬ九つ若い妻
 ぐい呑みの九谷焼出し花の宴
 青い瞳の三三九度を受け止める
 九重に咲いて膨らむ春の夢
 胎教にちゃんと答える九ヶ月
 陽数の最大なりと我が名に九
 九ッピンだカブだ温泉宿更ける
 九重にふつくらかわい愛子さま
 嗚呼九月目に染む蟬の抜け殻よ
 九分咲きであなたを待っている桜
 九死に一生神に生かされてる
 九〇点取ると百点ほしい親
 神妙に三三九度をして別れ
 九分九厘あと一厘は神の御意

松尾 和香
 矢内寿恵子
 安藤寿美子
 河井 庸佑
 久保田半蔵門
 福田 悦子
 御園 孝子
 八十田洞庵
 中野 健吾
 笠井 欣子
 矢倉 五月
 福井 桂香
 西出 楓楽
 田岡 九好
 岩内 外吉
 梶本 哲平
 笹倉 良一
 西浦 一慧
 小林 周信
 籠島 恵子
 谷口 義
 山本 義子

見において月下美人が九時に咲く
 禅唱えだるまは九年壁睨む
 人生にまだまだがある九合目
 一欠ける九に人間らしさみる
 大台へ届いてみたい九の意地
 九人目を産んで世間を気にしない
 九分九厘でも諦めぬメスに賭け
 センバツの行進九ちゃんを想う
 佳
 喜寿たのし九山九川春霞
 九人で勝った開幕巨人戦
 ボケタナボケタナ九官鳥に擲掬われ
 900号に集うわたしも幸せな
 白寿まで生きて千号迎えたい
 人
 先達の鈴がきこえる九百号
 地
 九重の雲にくつきり浮かぶ塔
 天
 浮き沈み越えた卒寿の笑い皺
 軸
 2011九月10000号へいざ

鴨谷瑠美子
 坪井 孝一
 久保 和友
 井伊 東吉
 海老池 洋
 津守なぎさ
 中田たつお
 杉森 節子
 橘高 薫風
 高島 啓子
 野村太茂津
 西口いわゑ
 酒井 一壺
 原 みさを
 奥田みつ子
 三島 淞丘
 河内 天笑
 (清記 義・尚士)

参加者の感想（順不同）

ご盛会おめでとう

番傘川柳本社 中田 たつお

私の書架に『川柳の雑誌』四六〇号がある。S 40年9月号、路郎先生の追悼号である。ご葬儀の詳細、著名柳人の弔辞、追悼文、弔吟等々実に充実した追悼号であるが、巻末のページに路郎先生のご遺志で『川柳雑誌』は廃刊にするが、これを受け継ぐ機関誌発行を求める声が全国からわきあがり、誌名を『川柳塔』として10月号より発刊するとある。誌名が変わっても誌齢四六一号を継承された当時の同人諸氏の路郎川柳へのご熱意が、以来三十有余年、時代も昭和から平成に変わって、遂に九〇〇号という偉業で実を結ばれたことを心からお祝い申し上げる。いま、川柳界は旧から新へ、新しい流れが求められつつある。川柳塔社では先年役員の定年制を導入された。次代を見据えた英断として注目されている。現主幹の河内天笑氏も昭和生まれ、もし

てこの九〇〇号記念大会の前半の宿題選者として森山盛桜、高瀬霜石という戦後生まれのお二人が選ばれ、その披露ぶりが注目を浴びた。

そこには、この種の大会にあり勝ちな肩書選者の揃い踏みにはない確かな新風が感じられた。次の目標一〇〇〇号を達成される頃には新しい戦力が優れた指導者として成長されることを期待したい。

ともあれ、一参加者として三百名を越す大盛会の熱気の中に身を置くことができ喜んでいる。大会開催に至るまでの準備、その他スタッフの皆さんのご努力に敬意を表し、心からご盛会おめでとうを申し上げます。

商都のパワー

森山 盛桜

一口に九〇〇号と言っても、その歴史は七十五年にも及ぶものであり、人生七十五年と重ね合わせた時、積み上げてきたものの尊さをおぼえずには居られません。

広い会場もアツという間に三百人を越す人々が埋まり、その熱気に圧倒されてしま

ましたが、こんな中で選者をやらせて頂く事を大変名誉に思っていました。

選者室の中は、流石に大ベテランの先生ばかりなので緊張感も無く、和やかな雰囲気でしたが、それでも選が始まると、どなたも真剣そのものという感じでした。

私が頂いた句は、レベルが高い作品が多く、入選六十句に絞るのが大変でした。一人一句で助かったという思いでした。

選を終えて会場に戻ったところで、薫風先生のお話を聞く事が出来ました。普段聞く事の出来ない川柳塔黎明期の話を興味深く聞かせて頂きました。強い信念と人間味、そこに人が集うという事を強く感じさせられました。

披露の時は、いつもながらの緊張感があり、時折起こる笑いと相まって独特の雰囲気を感じていました。選者席に居ると、この雰囲気は可成りの圧感であり、ふと商都大阪のパワーを感じてしまいました。

このパワーは次の懇親会でも遺憾無く発揮された感があり、私としては、全国から集まった同人の皆様の心意気を感じさせられた大会であったと思います。

色々な面で勉強させて頂きました。

明るさと進る活力の中で

太田 昭

誌齡七十五年、此処に創刊九〇〇号を迎えられたことに心からの祝福と、合わせて、積年のご努力に対し敬意を表したい。

私は、昨秋の橘高薫風先生の叙勲記念川柳大会に続き、慶事の大会に参加の榮に浴したが、この度の九〇〇号記念の大会に参加をして感じられたことの一つは、既に喜寿を超えた川柳塔社の歴史の重みと、刻まれた敏の尊さである。

「九層の台は累土より起こる」と言う老子の言葉があるが、まさに、九〇〇号創刊の重みと、それを完成させたよろこびが記念川柳大会と、引き続き開催された懇親宴から十分に垣間見ることが出来た。

今大会の事前投句で入選された、原みささんの句に、

先達の鈴がきこえる九百号

があるが、まさに現在ここにある川柳塔社の礎を築き発展させて来られた先人達の鈴の音が聞こえて来る、そんな一日であったよう

に思える。更に感じられたことは、川柳塔社全体に流れる澄刺とした明るさである。

私は、俳句にはない川柳独特な明るさと自由奔放な闊達さに魅力を感じているが、こうした川柳塔社の明るさと進る活力が、やがて八年四か月後、立派な一千号の花を咲かせるであろうことを信じさせてくれる。

懇親宴で、松江から来られたというある方が、「川柳は私の生き甲斐なんです」とお話して下さった。こうした各地の方々にも支えられて、川柳塔の灯の輝きが目の奥にいつまでも残って消えることはない。

大会に参加して

岩 切 康 子

川柳塔九百号記念大会の趣きを味わい、高野山へ行きたくて参加致しました。

輝かしい横断幕、紅地に白地の塔旗の下で、紫香先生とメ女先生が前席に隣に香川の才女二人連れを紹介される、親切な柳友に感謝して着席しました。投句後レストランで岡山から選者と参加したと仰有る方と意気投合し三人目の新たな出会いが生まれました。この大

会に参加して印象に残った事を二、三あげてみますと、大会は定刻に開会、予定より早く閉会しました。

全日川協事務局長は、「七十五年間の主幹は今五代目、並ならぬ努力で今日の川柳塔があるのです。他の団体の方も指導者の永年のご苦労があると思われれます。川柳塔の特徴は今でもあり、番傘の人が川柳塔へ行って抜けない時があります。それは指導者の長年の指導があるからだと思つて居ります。今はインターネットに「川柳」が載せてありますので、ホームページを見てください」と勧められました。

前主幹薫風先生の「おはなし」は文集に詳細に記されているからと主に路郎先生のエピソードをお話になり、路郎先生時代の真摯な厳しい川柳活動ぶりを尊敬され、一口に言うのと路郎先生は厳しい道を歩み夢を達成されたお方であるとお話になりました。

懇親宴では岡山の彼女が笑顔で一句抜けた事を伝えるに來られ、知人は「誌上吟で何故自分の句は取つて戴けないのか選者に尋ねる」と耳打ちし、堂々張切つて居られました。川柳への凄情熱と勇氣に驚かされ、深い感銘を受けました。

九〇〇号記念川柳大会参加者

総数 三四三名
敬称略、順不同

〔青森県〕 高瀬霜石 富士慕情 相馬銀波
波多野五楽庵

〔滋賀県〕 基 二世 久保和友

〔京都府〕 稲葉冬葉 木村彦二 本多完児
都倉求芽 山田葉子 高島啓子 丹後屋肇

山本 礫 高村吉之助

〔大阪府〕 浅野房子 米澤俊子 平松かすみ
水谷正子 早川棲世 笠井欣子 宮崎シマ子

伴 洋子 小西幹齊 福田悦子 吉田喜代子

藤井則彦 海老池洋 安達忠央 星野さかり

奥村五月 津守柳伸 内藤光枝 秋山シメ子

江原秀夫 沢田和子 酒井一壺 安達はじめ

入江秀雄 石堂潤子 藤井正雄 長谷川春蘭

大橋柳一 鶴田遠野 河井庸佑 津守なぎさ

浦田綏子 川端一步 栗田久子 出口セツ子

山本翠公 藤田泰子 田頭良子 野島満寿巳

中澤伽羅 本田智彦 中井アキ 太田とし子

神原 文 渡辺邦晴 板東倫子 西田柳宏子

油谷克巳 竹森雀舎 辻 葉 山本憲太郎

竹内 功 河内天笑 前たもつ 長谷川呂万

野下之男 南原正和 板野美子 高須賀金太

岡岡九好 阿萬萬美 江見見清 榎本日の出

山本蛙城 前原正美 和気慶一 磯野いさむ

初山隆盛 石森利昭 乙倉武史 瀬戸まさよ
北村賢子 志田千代 大谷篤子 田中由紀子

榎本舞夢 河内月子 寺井東雲 片岡智恵子

藤本一道 大橋鐘造 森下愛論 指宿千枝子

小西小雪 森 茜 穂谷終一 藪野けい子

吉村一風 池 森子 江口 度 吉道あかね

妻合重三 梶本哲平 寺田甚一 森中恵美子

池田淑子 清水絹子 熊代菜月 中田たつお

舩田治子 坂本晴美 西川更紗 神原まさこ

中尾飛鳥 高田星子 加島由一 小林すみえ

脇 正夫 井上昭子 西村哲夫 山岡富美子

川原章久 岡本久峰 樋口冬虹 川久保睦子

二宮山久 矢倉五月 太田 昭 和田つづや

岩崎公誠 角野仁清 谷口 義 源田八千代

矢野 梓 村上直樹 楠 昭子 山川日出子

中野健吾 濱田良知 寺川弘一 吉田あずき

安水 春 天根夢草 田中正坊 安芸田泰子

三好寿平 籠島恵子 藤村メ女 徳山みつこ

池上清治 穴吹尚士 前田咲二 安藤寿美子

井伊東吉 桑原道夫 古澤和彦 八十田洞庵

西浦一慧 宮西弥生 岩井三窓 高田美代子

町田達子 吉川寿美 吉村雅文 岸野あやめ

木村無縁 高杉千歩 森イク子 柴本ばつは

大川道子 橋高薫風 玉置重人 村田巳代一
内海幸生 村上玄也 吉岡 修 渡辺さだを

石橋直子 岩内外吉 早崎和子 宮本かりん

森本弘風 井尻 民 川口信子 鴨谷瑠美子

板尾岳人 西出楓楽 山本三郎 齋藤さくら

小林周信 日野 愿 高橋一枝 川島諷云児

坂上高栄 杉澤 汀 高岡健太 神夏磯典子

澤村猪太郎 河村初太郎 篠原いつふみ

梶川雄次郎 長谷川会美 久保田半蔵門

吉田わたる 波田野洋介 もちづき遊美

藤井二三 岩佐ダン吉 太田扶美代

村上ミツ子 富山ルイ子 小池しげお

生嶋ますみ 山本希久子 吉道航太郎

中川千都子

〔兵庫県〕 泉比呂史 谷口光穂 緒方美津子

石原歳子 坪井孝一 福島直球 嵯峨根保子

御影 静 井本清山 本田律子 小松原爽介

北野哲男 小山紀乃 黒川紫香 奥田みつ子

遠山可住 古川奮水 西内朋月 松下比ろ志

長島敏子 梶元世津 亀岡哲子 西口いわゑ

長浜澄子 山本義子 長谷川淳 前川千津子

田辺鹿太 萩原典呼 井上松煙 木村貴代子

黒田能子 山口光久 田中章子 春城武庫坊

村上永筆 山口美穂 岩本曙蝶 中井昭子

〔奈良県〕 藤原一志 坊農柳弘 居谷真理子
安土理恵 笹倉良一 渡辺富子 飛水ふりこ

河合茂雄 鍛原千里 菱木 誠 中原比呂志
乾 春雄 阪本高士 大内朝子 御園孝子
杉森節子 西川國治 米田恭昌 宮口笛生
吉田太一

〔和歌山県〕 堀端三男 福井桂香 田中みね

福本英子 情見章子 森下順子 田村あき子
桜井千秀 細川稚代 武本 碧 山口三千子
松原寿子 榎原公子 木本朱夏 野村太茂津
中後清史 松尾和香 柏原優子 上地登美代
川上大輪

〔鳥取県〕 青戸田鶴 岸本宏章 政岡日枝子
植田一京 岸本孝子 土橋 螢 坂田和歌子
田村邦昭 宮木一夫 中原諷人 小林由多香
西原艶子 野坂なみ 森山盛桜 中原みさ子
原みさを 新家完司 八木千代 澤田千春
〔島根県〕 岸 桂子 恒松町紅 吉岡さみえ
恒松素子 伊藤玲子 三島崧丘 舟木与根一
園山多賀子 久谷まこと

〔岡山県〕 小野克枝 福原悦子 土居ひでの
小林妻子 貞森南花 撰 喜子 矢内寿恵子
山本玉恵 大石あすなろ

〔広島県〕 小島蘭幸
〔香川県〕 清川玲子 池内かおり
〔佐賀県〕 仁部四郎
〔熊本県〕 岩切康子
〔大分県〕 長尾無双

高野山川柳塔碑参拝

五月五日（日）

三連休の中日ということもあって、極楽橋からのケープルには乗れない人も出る超満員だった。だが高野山上へ向かう索道の両サイドには、昨夜の雨でしっとり濡れたシャクナゲが満開。淡いピンクの花で私たちを迎えてくれた。まずは、先輩へ九〇〇号の報告のため奥の院大霊園の塔碑へ。献花、灯明をあげる。はじめての方も半数おられ、故葉主幹の見事な揮毫に感嘆の声、碑を抱きかかえんばかりに触れられ方もおられた。

五楽庵先生は跪き、ひとこと「参りました」と述べられ石碑に深々と頭を下げられたが、その短い言葉の中に新副主幹としての過去・現在・未来への諸々の思いが凝縮されているように感じられた一齣であった。私たちは記念大会の翌日の参拝ということであり、大会成功の報告と、今日を築き上げられた歴代主幹以下、同人二百数十名の墓前に今後の川柳塔社発展を誓い、順次、感慨をこめて合掌参拝を終えた。

昼食後は奥の院・弘法大師御廟へ参拝する。参道石畳のひとつ、歩み一步に歴史と物

語がある。奥の院前には樹齢八〇〇年の杉の大木が天を突いている。塔社もさ来年は八十周年を迎えることになるが、この大木のようにしっかり根を張り、生き生きした緑を繁らせたいものだ。天笑主幹、岳人理事長他二十二名が帰途につく頃、山陰・東北など遠来の参拝者をもてなすように、聖地・高野山の空は晴天になっていた。（比呂志記）



川柳の本—図書

閑人閑話

田中正坊

作り方・味わい方」(社会保険出版社)、尾藤三柳『川柳作句教室』(雄山閣)、時美新子『川柳を始める人のために』(池田書店)、野谷竹路『川柳の作り方』(成美堂出版)、林富士馬『川柳のたのしみ』(平凡社)、三浦三朗『川柳入門』(家の光協会、斉藤大雄『川柳の世界』(近代文芸社)、吉岡龍城『川柳みちるべ』(本阿弥書店)。

このほか、田口麦彦は『川柳と遊ぶ』(実業の日本社)はじめ川柳に関する著作が多いが、飯塚書店発行の『現代川柳入門』(『川柳技法入門』(時事川柳入門)の三冊は力作であり、その延長線上で編集した『川柳表現辞典』は異彩をはなっている。

課題の解説と例句を示したこの種の図書としては、『課題別番傘一万句集』、『続課題別番傘一万句集』(創元社)があり、かつて川柳作家の「バイブル」と言われたが、両書とも課題のほとんどすべてが名詞であり、動詞・形容詞・副詞が多用される今日では、いささか物足りないきらいがある。また、奥田白虎編『川柳歳事記』は出色の著作ではあるが、俳句の『歳時記』にこだわりの、季語の時候・行事や動物・植物名に偏っている。その点では、田口麦彦編『三笠草堂・現代川柳必携』は、多様な品詞の課題を分野別・五〇音順に

配列し、それぞれの例句を挙げており、出色の川柳語辞典となっている。辞典のついでに、橋高薫風監修・田中正坊編『川柳カタカナ語辞典』も紹介しておきたい。

ここで特筆したいのは、尾藤三柳編『川柳総合辞典』(雄山閣)という一九八四年発行の大作。近代川柳史年表とともに、川柳関係の人名・出版物名・用語その他の事項が約一千項目にわたって五〇音順に配列されており、およそ川柳について調べたり、書いたりするにあたっては必読の文献である。

このほか、新潮社が一九九三年に発行した『短歌俳句川柳101年』のアンソロジーは大西泰世が川柳の部をまとめた力作であり、田辺聖子著『道頓堀の雨に打たれて以来なり』川柳作家 岸本水府とその時代』(中央公論社)は、小説の体裁をとった近代川柳史として注目される。また、異色の書としては、高崎隆治著『川柳にみる戦時下の世相』(梨の木舎)が面白い。

川柳をたしなむものとしては、やはり古川柳に関心を持つことが大切で、『俳風柳多留』(『俳風武玉川』が岩波文庫として刊行されており、山路閑古『古川柳』(岩波新書)、柴田宵曲『古句を観る』(岩波文庫)も手軽に入手できるので、一読をおすすめしたい。

新しく川柳を始められた方から、手ごろな入門書はないかと聞かれることがある。せっかく紹介しても、入手できなければ仕方がないので、次の三冊をおすすめしている。『川柳入門事典』(全日本川柳協会編)、『川柳とは何か—川柳の作り方と味わい方』(麻生路郎著・川柳塔社取扱い)、『川柳—その作り方と味わい方』(番傘川柳本社編・創元社発行)で、購入方法は編者に問い合わせるとよい。しかし、もっと多くの本について知りたいという方のために、私の蔵書の中から著者・書名・発行所の順に、十点ほど紹介しよう。書店にはなくても、図書館に収蔵されていたり、古書店で入手できる場合もある。

川上三太郎『川柳入門』(大文館書店)、岸本水府『川柳読本』(創元社)、近江砂人『川柳の作り方』(明治書院)、関水華『川柳レペルアップ』(近代文芸社)、神田忙人『川柳の



追悼

里 小路さんを悼む

高田 博 泉

小路さんは二年ほど前から、体調が悪いと言っては、ちよくちよく句会を休まれるようになっておられました。何分高齢のこと、グループの皆さんの間では、心配の種のひとつになっておりましたが、去る四月二十二日、老衰のため死去されました。九十歳の大往生でした。

文化不毛の地と言われていた寝屋川市に川柳の種をまかれたのが、高鷲亜鈍さん。昭和五十年一月五日の事でした。以来、寝屋川市に川柳を定着させるために、亜鈍さんを支え、片腕として頑張つてこられたのが里小路さんでした。今日の「川柳ねやがわ」に発展させた功労者であり高齢とは言え、本当に惜しい方を失くした思いでいっぱいです。

小路さんは、元々「駒つなぎ川柳会」で早くから活躍されていたベテランでしたが、地元「川柳ねやがわ」の前身である「三井ヶ

丘川柳教室」が発足したのを機会に参加されて、今日に至っておりますが、「駒つなぎ」が解散になってからは特に、力を貸してもらえようになりました。会員が十四、五名の時からコツコツ新人養成に力を注がれて、老人を中心とした「娛老会」や新人発掘の「花の輪」などを立ちあげ、りっぱに育てていただきました。今も本体の「川柳ねやがわ」とはずっと交流させていただいております。

創立二十周年、初めての記念句集発行の際には、初めから終りまで、お手伝い下さって打ち合せの度に、一杯呑みながら川柳談義をさせてもらったのも楽しい思い出になりました。また、筆達者は天下一品で、川柳大会の「懸垂」や表彰状は、みんな小路さんにたのんでおりました。年賀状をいただくのも楽しみのひとつでした。達筆の色紙「ノルマを果たしたごとく悠々陽が沈む」などは大切に残してあります。

酒好きの小路さんが句会当日、一番前列に陣どつて、チュウハイをチビリチビリやっていた姿は亜鈍さんと重なつて、なつかしい光景でした。どうぞ、天上では、亜鈍さんと盃を交わし、ゆつくり川柳を語り合つて下さい。ご冥福をお祈り致します。

ベテランの小路さんには、数えきれないほどの作品を残されておりますが、「愛生住」に寄せられた作品の一部を紹介します。小路さんを偲んで下さい。

悪いこと出来ぬ男で辞めてゆく
まだ死んでたまるもんかと趣味はなし
いい椅子が回つて来そうネジを巻く
網の目をくぐった稚魚は負けていず
良いことが毎日続くから怖い
真つ直ぐにしか走れない子に疲れ
病人の方が上手に皮を剥く
コマーシャルどれも効くので胃が迷い
辞書にそう載つてゐるのにまだ頑固
しほつたら出そうな知恵を借りに来る
大臣の名は知っている三三人
目の坐る酒とは知らぬのですすめ
合格通知届いて消えた迷いごと

合 掌

お世直し

毎月24日締切・30句以内厳守

編集部

岸和田川柳会

長谷川呂万報

新婚さんスーブの冷めぬ近い家
身内より近くの他人あてにする
遅刻して来るのは何時も近い人
核ゼロの日よ近くなれペンを持つ
計算器使わぬ答褒めてあげ
辛辣なペンを使つて首を刎ね
母は二人娘も使う若田帯
稼ぐのはあんた使うのは私
濃淡をうまく使つた水墨画
ライバルのお世辞は軽く受け流す
握手して敵の心音さぐつてる
手も口も八丁といふこわい敵
ライバルが居て練習に励み出る
本当の敵は心の隅に居る
おはようとひといいず敵視され
授業より掃除当番はり切る児
火気当番くわえ煙草で一回り
当番を決めて看取つた忌が巡る
独身が宿直当番引き受ける

岩 夫 子
ゆり子
穰 一
ダン吉
照 女
仁 緑
呂 万
柳 宏子
狸 村
倅 子
洞 庵
さよ子
盛 之
睦 馬
けい子
路 子
鹿太郎
みよ子
東 吉

当番は好きなお方とペアを組み
花粉期のマスク仲間という視線
糖尿へお茶を差し出す飲み仲間
隠しごと聞くも漏れるも仲間から
同僚と男のロマン語り合い
スカートを踏んで居たのは元仲間
同じ時過ぐす仲間は気を許す
花粉症マスクの友と縄のれん
ボクの中に仲間外れのボクがいる
喜びは仲間の拍手で倍になる
近いうち再婚しますと友の艶

三幸川柳教室

三宅

保州報

趣味わんさ振り回されている元氣
また一つ趣味が増えそう好奇心
趣味昂じこんな時間の飯となる
格好いい趣味を並べて置く釣り書
ささやかな趣味が余生を広くする
八起き目の達磨は趣味に助けられ
リサイクル趣味で廃油も捨てられず
占いが趣味の女でまだ一人
我が家という箱が一番くつろげる
銀行がくれなくなった貯金箱
跳び箱のあと二段が高すぎる
ラブユートと囁くりボン掛けた箱
ふところの深さを計る正念場
ふところの窪みで光る夢ひとつ
共生というが懐剣離せない
善人のふところいつも素寒貧

章 子
正 圃
栄 進
み ね
昭 枝
当 代
和 代
マリ子
登美代
和 子
仲 二
桂 香
碧
さち子
公 子
鉄 治

ふところが温いと上を見て歩く
山ふところで気取る本家の鬼瓦
割れ鍋にとじ蓋夫婦日々平和
冷蔵庫整理した日はチャンコ鍋
こった煮の鍋に十色のうま味ある
すき鍋へ無口の箸が忙しい
酒盛りで鍋のアサリがうたい出す
すき鍋の肉に履歴書付いてくる
鍋底に男一人の影がゆれ
唇をかねてピカピカ磨く鍋
雪催い今宵は鍋にいたそうか
落ちこぼれ集め寄せ鍋味を出し
よせ鍋で身軽になった冷蔵庫
煮えたぎる想いを胸に落とし蓋

川柳若葉の会

宮崎シマ子報

動力の根源水にある理明
目の動き心の揺れが見えてくる
さあ四月動き始めた春の靴
びつたり動く歩道の二人連れ
思うことあり答案用紙白で出す
白もかせぬ彩どりの五色豆
白豚もまぜたと信義とわれてる
白旗を振る回数が増えてきた
白い皿老いの笑顔を芯に盛る

川柳塔みぞくち

小西 雄々報

弘 直
あずき
能 子
会 美
シマ子
慶 子
香 住
欣史子
アキ
鈴 枝
豊 枝
大 吉
明日がある大きな夢を見て老いる

夢ばかり大きく身体ついてこぬ
知恵集め大きな力發揮する
絶景も大きなビルにはばまれる
大金を持てばペイオフ気にかかる
荒波に大志めざして雑魚の群
少しづつ動き大きい乱となる
大小は問わぬ善意のボランティア
幸せを大きく見せる家がある
凡人に大きい一つづら目に入る

東大阪市川柳同好会 森下 愛論報

ラッシュ地下皆酸欠の顔してる
地下鉄の便利がづらい老いの足
地下鉄が苦手な閉所恐怖症
列島の上にはりつく寒気団
野仏が寒い景色の中にある
温かい言葉が欲しい葱坊主
流星の早さに負けた願い事
早い話誰がつけるか猫の鈴
ピンク着て春の空気を先取りに
陽の回るのはやさしいとおしむ命
祝賀会サロンをうめた知名人
難題がまとも酒となるサロン
宗男ハウスを囁きあっているサロン
点字読むサロン明かりがやわらかい
火だるまの愛に走った後遺症
病む母も爪を愛しさこめて切る
豊かさの陰で家族の愛涸れる
愛ひとつ貰い重なる紅絹の裏

久子 弘子 康女 和代 公美枝 智恵子 正光 静江 雄々 良子 柳弘 猪太郎 雅文 太郎 のぼる 東雲 萬的 シマ子 美弥子 柳宏子 庸佑 度 湖風 朝子 信治 三重子 愛論

川柳ささやま 遠山 可住報

お互いの苦手おきない合って生き
握りめし手術は無事にすみました
ナイターで闇を知らない深海魚
定年の余裕が歩く靴に合う
眼帯を取ればなるほど花が咲く
過疎の土たのむと流す父の汗
活気ある方へ歩こう朝の道
なるほどの薬を足して若返る
日に日にしつかり歩く0歳児
よくもまあ溺れもせず流れつき
なるほどと納得したが腑におちず
なるほどを確かめに行く梅だより
パソコンのゲームなるほど面白い
なるほどと納得親と子の育ち
なるほどの資格が味方してくれる
水分れの流れを変えた石一つ
竹原川柳会 時広 一路報
いつせいに芽吹いて風の中にいる
マニキュアを春色に変えジャンプする
二年ぶりのランの芽が出て夢に見る
川柳も若芽が出ます春や春
古株を切ってつぎ木の新芽待つ
発芽したジャガと喋って亡母のこと
切ろうかと思った木に芽がでてる朝
なにもなし俺が川柳書いて置く
書いて消し書いては消した人生譜
純子 恵美 多美子 美智子 八重子 靖子 とみ子 かつ子 かほる 君代 穂子 富美 美紗子 みはる 寿子 可住 蘭幸 史子 孝枝 貞子 厚子 年子 夏喜 輝恵

佳句地十選 (5月号から) 榎原 公子

同居してからの夫はヤジロベエ
みかん剥きながら揺すってみる絆
冬至二十日陽射しが縮む春座敷
梅日和我が晩節は汚すまじ
束ねると饒舌になるカスミ草
棚ぼたのあれから狂ったんだらう
阿呆らしゅうなって綱引き手をはなし
特攻の蜚が帰る母の家
核心に触れると健忘症になる
許されて逆にみじめになって来る
広和 欣之 マリ子 正坊 大輪 ダン吉 白汀 鐘造 梓 靖巳

生きてきた証 自分史書いている
この一句書いては消してまともらぬ
教え子に祝合格と太く書く
物書きの血筋が騒ぐ夜のペン
クイズマニア今日も葉書と向かい合う
寝ころんで空いっばいに生と書く
遺書をかく筆がなかなか見付からぬ
ばあちゃんを書いたと壁に置土産
嬉しう日々を書いて生きている
楷行草三体で書く春と書く
薄墨をたつぷりひたし春を書く
鼻と鼻象の親子は睦まじい
象の鼻うれしい時は天へ向く
象の目になつて可愛い祖母でいる
象牙箸亡祖父の寡黙と威厳見た
笹舟 節生 万年 菁居 正宏 淑夫 節子 慶子 静風 一枝 房恵 栄恵 規代 汎美

威風堂々象にも弱味がある
草原と一本の木と母子象
象の背で遠くを見たし仏生会
僕の手の中で眠っている象だ
大仏も象もダイエツトはしない
象の墓場に宝の山が眠ってる

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

運命にふり回された器量良し
鳶が鷹生んだと評判器量良し
堂々の親の器量だ披露宴
人間の肚のあたりにある器量
ボス猿の存在感にある器量
大根の八百屋の器量から売れる
まだ愛があつて決断ゆれてる
陽炎の向こうの夢を追っている
風船に乗ってゆらゆら何処へ行く
お別れのテープゆらゆらドラが鳴る
立ちのぼる煙ゆらゆら友は逝く
ゆらゆらと母まどろむや黄泉の国
味の差があつて夫婦の溝埋める
あいつとは嫁はんの差で俺が負け
銭湯は貧富の差なき湯があふれ
僅かな差胸の丸さで決めました
向こう傷治っていない早合点
出合い系の熱いメールに早合点
早合点どうも話がうますぎる
ひと時の幸せでした早合点
早合点神の答えを聞きちがえ

幸子 比呂子 不朽 笑子 半覚 一路 紫香 武史 あやめ 比ろ志 泰雄 晴美 典子 東雲 五月 義一 無緑 艶子 治三郎 メ女 孝一 しげお 稲子 庸佑 秀夫 活患

早合点してから続く軽い鬱
戸を閉める態度に愛が届かない
人生の苦を勝ち取って来た白髪
リストラを救う投網のない不況
アンテナが錆びて世間に疎くなる
やいのやいのと国会宗男で空回り
温かいスープのような女という
いつか娘も知るだろう川の深さなど
ゆらゆらと男の嘘に溶けて行く

川柳塔おっぱい吟社

木村あきら報

あの時の機打が私の今の幸
変身の過去は語らぬ揚羽蝶
良い友で居たくて保つ車間距離
気が弱くなつた丸さが愛ほしい
一病を慰めながら花野ゆく
人頼み結果に文句言えぬもの
明日吹く風に全てを賭けてみる
失敗をしる人間の値打ち
明日があるだから人間生きられる
はつとけぬ性分知らぬ顔でできず
禁欲で大義名分はきき違え
フキのとうそつと顔出し春を知る
花粉症一足先に春を知る
ヒラヒラと色とりどりの花の舞
梅一輪手向けてありし遍路墓

ロース川柳会

山崎

ロゼワイン恋の魔法にすぐかかる

スミ子 照子 宵草 満寿蔵 重人 柳宏子 澄子 諷云児 吟笑 勝賢 八重子 治延 あきら かおり 放任 よしみ 輝夫 いさむ 文仙 寿々女 貞月

君子報

みつ子

約束を固く守ったチューリップ
凍てついた心を癒やす茜雲
杖ひとふり地雷を花に食物に
満点を捨てると楽に生きられる
願い事魔法で叶う杖がほし
駄菓子でも孫は明るくよろこんで
明るさと隣あわせにいる涙
ベニシリン魔法のように効いた過去
道はそれぞれ辿り着くところは同じ
六甲風明るくなつた甲子園
小豆煮るなんかしらんが楽しくて
魔法煉る爪を磨いているところ

西宮北口川柳会

亀岡

哲子報

幸せの扉は汗の手で開ける
後手に扉を閉めて鍵捨てる
午前さま隣のドアを叩いてる
恐る恐る貴女の扉叩く夢
小鳥鳴く朝の空気をドア開き
反抗期扉の奥のぞけない
暗号のように桜の降りしきる
囲まれて主役に暗号届かない
暗号をわかってほしい白いばら
青春の日記に残る頭文字
藪椿無人になつた庭まもる
白椿一期一会の風を聴く
鏡に合うて落ちた椿はポケットに
乱れずに定めのように椿散る
炎えたまま命を断つた椿姫

武庫坊 トミエ 貴代子 てる 雅子 ミサヲ いわゑ 藍 キク子 まさお 義子 哲子 諷云児 美代子 五月 光久 トミエ 江美 澄子 奮水 いわゑ みつ子 求芽 たず子 孝一 昭三 文

山茶花にきれいに散れと椿言ひ
山に絵師木蓮の白紅椿
色添えて庭に風情を増す椿
白椿こぼれ落つるは蓮華座か
母の忌に母と語らう白椿

連れ添うてふと気がつけば五十年
ふと嘘に乗つて見ようか四月馬鹿
ふと旅に出たくなつたとアツケラカン
てつべんでふと考へている孤独
トラがふと優勝かもと血が騒ぐ
ふと落ちた自己嫌悪から抜け出せぬ
ふと離婚届を出そうかなと迷う
タンポポの綿毛も僕も旅が好き
大胆に葉書一枚恋かたる
ハンカチを忘れただけで落着かぬ

サークル檸檬

小林

一夫報

納得はしたが判子はまだつけぬ
わたくしが私に出す努力賞
納得して進む一歩は軽いけど
顰蹙の顔も知らずにマイペース
すてきな人に出合えて光増す命
動く歩道刺客のように追つてくる
ほどほどに尽しほどほど翔んでる
フスマ替え子猫孫居てせずにいる
偏差値が納得させる志望校
納得をしたケリだから笑つてる
やつと手の届くところにある期待
納得をせぬまま閉じる棺の蓋

いたる 哲男 庸佑 哲子 義子 鹿太 富喜子 てる 石舟 松煙 房美 正坊 春蘭 能子 房子 正坊 みつ子 靖巳 智恵子 義子 いわゑ 哲夫 遠野 保子 澄子 希久子

納得出来ぬ余生にやさし桜咲く
パソコンは置き場所ないと言つておく
ころ今 異常乾燥注意報

尼崎尾浜川柳会

田辺

鹿太郎

歩こうかホットな風が誘うから
ささやかな庭の桜にもらう春
悪友を誘ひに行こう春だから
若者の気分で行く繁華街
花吹雪グラスに受けて惜しむ春
夫婦連れ何時も仲良く車椅子
咲くよりも花火のように舞う桜
花の下あの日のことをふと思ひ
秘書さわぎ大物たちも揺れる席
廃校の名札をかけて桜咲く
戦負け貰つた自由国揺れる
左遷地のさくら私を力付け
フリーター気儘に明日の風を待つ
ツアードの二人フリーを待ち侘びる
疑問符を積み残して八十路坂
リストラで苦しい自由もらひ受け
告白をしよう桜の散る前に
遠来の一會さくらで酔ひ更ける
やつとこやつとこ不自由な歩道橋
自由っていいな自由はき違え
何故虫も殺さぬ顔で僕責める

川柳塔唐津支部

久保

正剣報

子が巣立ち平和主義者が我慢する

兵八郎

あずき たもつ 楓楽

ただならぬ思い古唐津登祥地
息子より嫁を味方に付けておく
消しゴムで消える鉛筆だから好き
悪女でも才女でもない妻と住む
飲みたないから客に如何と聞いている
味気ない連休だつた蝶帖さん
乗客も花も笑顔つた無人駅
忘れたと言へば偽証にはならぬ

ほたる川柳同好会

田辺正三郎報

弘 實 晴翠 輝夫 高視 虹明 正剣 よしろう 柳童 ヤギエ ただし 吉太郎 黒兎 祥風 実 直次 桂子 契子 保子 信男 正三郎 緑骨 雪子 千里志 長一 見清

ぶつきらばう顔に似合わぬ人情家

川柳塔鹿野みか月

土橋

下手ながらタンゴ踊った思い出よ
日暮れまでタンゴを踊る影ふたつ
無粋者タンゴのリズムにも乗れず
居酒屋でもやもや流す大ジョッキ
タンゴには踊かないでついてゆく
まっ白い顔は誰やらタンゴ踏む
タンゴ聴く背筋がピンと伸びてくる
腰曲げて踊るタンゴも喜劇かも
燃え尽きて踊るタンゴも殺気立つ
情熱のタンゴも腰が逃げている
身を守る術も知り得て踏むタンゴ
自己流のタンゴブライド捨てました
しがらみを生きたるタンゴの足づかい
タンゴよりかごめかごめの輪に入る
タンゴ踏む自作自演の足の向き
ブルースもタンゴも賽の目に任す
うじうじと桜吹雪を絡ませる
うじうじと国の借金考えぬ
二極論どちらも一理ある悩み
鳥の声聞いても春はよく眠る
何事もこだわりもなくよく眠る
四時間と少しを眠る現役だ
姑さんが眠りわたしは野球見る
眠る時間惜しんだ頃は若かった
肩の荷を下ろし朝までいい眠り
美しい嘘に眠気を誘われる

勝 螢報

八重子 あけみ 英夫 幸枝 幸重 喜与志 宣子 房子 実満 睦子 なが子 かつ乃 諷人 きみ子 くに子 盛桜 みさ子 立亥 久枝 茶子 汲香 孔美子 野草 弘子 和子 節子

惚ればれと眺めたそばに眠る女
二歳児の遊び疲れた腕の中
不況下で存続できぬ学校も
算術と国語はいつも甲だった

城北川柳会

川久保睦子報

職がない心引かれた青テント
病院で風邪をもらって来たようだ
人違ひみたい孫の変声期
頭一つ出すと横並びが騒ぐ
世代変わり見知らぬ人が素通りす
支持率が少なくなった誕生日
私にも十八二十ありました
宇宙から見れば地球は青い玉
土壇場のその一球が二分する
ヒューストンにまた負けました種子島
明るい絵に足が止まった絵画展
数ならぬ身を医者ナースに支えられ
知と情と歳を重ねて上手く老い
大根とちりめんじやの長い仲
ファーストフード牛から豚へそして鶏
咲く花へ無残に手折る春の風
満点に一步手前の丸でよし
後味の悪いすき焼き雪マーク
雛の宴老女それぞれ一代記
ダイヤより愛燦燦のガラス玉
雛かざり男の孫も寄ってくる
オリンピックスビード競った涙跡

公子 富久江 はお 螢 東雲 重人 だだし 求芽 登美子 はじめ とし子 高栄 史風 柳一 政子 達子 あい子 昭子 あやめ 柳弘 久留美 志華子 順三 綏子 睦子 倫子 トヨ子

早かったいちにち損をしたようだ
老母を抱く腕の力は残しとく
左遷地でだんだんうまい酒をしる
お握りの赤飯一つバースデー
春の絵に亡母のドラマを描いてみる
丹精の花も時には謀反する

むらくも川柳会

毛利

産声に家中笑顔のベルが鳴る
浦島がうきうき開ける玉手箱
妻の吹く笛に踊つたい笑顔
朝毎の仏の水と今日も生き
わだかまり水に流して春を待つ
水ぬるみ冬眠覚ます池の鯉
春の野辺うきうき蝶が舞い上がる
ジャイアンツ勝つてうきうき酒すすむ
早く咲く桜に行事とまどわす
雨風に弱いさくらを愛しがり
うきうきと不況忘れて湯の里へ
誘われて心うきうき旅支度
はなやかなイブントが待つ桜街
久しぶり孫に誘われ夫会いに

川柳塔なら

坊農

柳弘報

典子 ひさ乃 修 千歩 千里 公一 幸報 幸夫 幸子 秀子 幸子 定子 安男 信夫 幸子 明朗 寿 恵美子 ます美 鳥子 とし子 理恵 積子 孝子 章久

御神書の文字に心を洗われる
突くだけは突いたが答え貰えない
強かな別れ喜劇にして女

一心に書いてる写経仏の相

文字でつかくなって喜ぶ番付表

バラバラ甘くはほえみ誰を突く

杖突いて大地と向かい合う心

喜劇めく悲劇のありてピエロの目

若いっていいな夢へと突き進む

お詫び状文字の乱れが隠せない

遺伝子のひとつを突いてくる花粉

鉢巻きをゆるめて春の風に会う

神様も見放している誤字の絵馬

突かれても突き返せとは教えない

ひらがなをゆつくりと書く春の川

倅せの真ん中にある丸い文字

とんびりから喜劇が消える五座消える

三寒四温鉢の新芽を陽にあてる

突く叩くなんでもありの国技館

左手で撫でて右手で喉を突く

すり鉢のあえもの亡母の声になる

一合に減らして添える小鉢もの

悲劇から喜劇にかえる春の使者

アフガンの鉢にげんの愛を待つ

点字読む指には神の目が宿る

かわはら川柳会

上田

俊路報

子等果立ち階段軽い風がふく
一段ずつのぼりつめたら視野ひらけ

悦子
道子

美和子

茂雄

佳子

秋泉

むつみ

富子

真理子

春蘭

修

絹子

恵美子

朝子

太一

あやめ

洋子

道子

寿美

睦朗

卓

國治

秋雄

和夫

弥生

欣之

良一

階段の一段ずつにある重み

キーボード用いる指に汗滲む

リストラで用は無いよと職解かれ

ストレスは吐いた用件置き忘れ

雑談に用事忘れて急ぎ足

用意などせずとも老後やって来た

用済みの椅子にも温い陽がとどく

病人に明るい話用意する

ワイドショー見る用があるおばあちゃん

川柳塔きやらほく

政岡日枝子報

青空から私だけがもれて
善人の声でシナリオ騒がしい
倅せが湧き出る気配花だより
新しい出会いわくわく春の風
藪椿咲いてうれしいお礼肥
花が咲き少し世の中動き出す
借りた傘さわやかな陽に干しておく
ホーホケキョ私も負けず鳴き返す
花の刻過ぎると鳥は風になる
桜咲く母が死んだ日憶いだす
パソコンは緑遠いもの春炬燵
派手な服老いの匂いを少し消す
あの人もストレス口から噴きこぼれ
不意にきたリストラ熱いものあふれ
熱血の教師一線こえそうだ
一匹のねずみもいなし街になり
計り知れない孫たちの未来図
いくつもの岐路乗り越えたおんな道

玲子
瑞枝

聡

一薰

輪多朗

寿子

雅子

静子

泰良

余史子

俊路

幸せを一杯詰めて旅鞆

ふくべむら川柳

橋本多哥由報

人生を変えた手紙の主という

満点をあげたい夕日今沈む

日々好日冥土の道はまだ遠い

活字よりやはり手紙は温かい

ボケないで亡夫へお土産をつめている

羨望の悠悠自適満点だ

尼崎いくしま川柳会

春城武庫坊報

花にかこまれ観音様も御満悦
おしやれしてみようか庭も花盛り
桜の下行く飾られた嫁荷物
病む窓へ花一輪に励まされ
草花と話して今日もしあわせです
桜咲くテニスコートの音のどか
春うらら滝廉太郎花百年
好きだから重荷にならぬ位置にいる
直感で愛の触れ合う位置に居る
ケイタイに位置確かめる夫婦愛
春愁や鏡台の位置変えてみる
生涯の希望叶わず子に託す
雨に叩かれる桜の花に胸疼く
秀句にはなれない位置が温かい
アホ言うて計の悲しみを一つ消す
桜散る風と話をしてみよう
童謡が春の小川にふわり浮く
いかなこやこの世に戦絶えざるか

義芳
武庫坊

春枝

寛子

春恵

昭恵

操子

和甫

多哥由

愛

歌子

富江

十四郎

千恵

正子

孝一

久子

満寿蔵

勝巳

里江

東園

光穂

寛子

紫香

義芳

武庫坊

義芳

義芳

義芳

義芳

義芳

句読点忘れて骨がもろくなる
石けりの石がこつんと春彼岸
地球は丸い 丸い心で暮したい
独り身に氣象さ寂し折りませて
温暖に花を求めバイク行く
ときめきの出逢いもあった無人駅
返球があまり上手でない外交
春の宵合わせ鏡の老いのうつ
耳傾ける人 聴く耳持たぬ人

川柳大坂

高木

信酔報

潤いを取り戻してるのかつばう着
諸君らの成人式をなぜ騒ぐ
寝姿に苦勞かけたとそつと託び
パイオフを心配する人しない人
満ち足りた姿で落ちる寒椿
老いの耳さよかよと良い返事
親父らしい姿で息子床柱
汗にじむ肋も技ありシャツの染み
四季巡り土手にも春の草芽吹く
ここだけの話が一巡りして太り
この店はいつたずねても準備中
姿見に違おうわたしが居る佳き日
据え膳と氣付かぬほどの血の巡り
弱音など吐かぬ姿に明日がある
凜と咲く古木の梅に背筋伸び
晩ごはん済んだら朝の米を研ぐ
結晶の姿くずれた雪印
七回忌未だに父の声確か

静 芳子 吉太郎 幸子 節子 糸子 昭三 しづ子 キク子
民子 本蔭棒 喜楽 隆司 春蘭 章久 利昭 柳弘 義孝 金太 一步 洛醉 鉄心 笑風 青道 川童

乗り遅れ時計のせいにするお客
マナイタの鯉の姿で手術台
三割の負担さよかで済ませられぬ
懸命に生きる姿を子に見せる
勝って泣き負けて笑いの酒を酌む
血の巡り時どき声をかけてやる
昨日のツケがきつちり巡るゴミ袋
金ないと言えばセールスああさよか
姿良しだけど小骨が多すぎる
白い歯がきらり光った晴姿
準備して春を待つてランドセル
辛くても男背中でいつも泣く

川柳塔わかやま吟社

牛尾

緑良報

薬一本流れて来ない四面楚歌
埋められた海は再び戻らない
仏壇へ老母の絵になるひとりごと
語尾はどうあれ好きさ一言聞いた耳
目のうろこゆつくり落とすひとりごと
咎めるとひとりごとだと妻がいう
決心をたしかめているひとりごと
独り言さあこれからは芽を出すぞ
ひとりごとあの人だけに聞かせたい
ひとりごとボクもいつしか適齢期
風に乗り亡夫へ届けよひとりごと
ちぎり絵をしながら漏らすひとりごと
四桁になると財布が開かない
四捨五入開き直った雑魚で生き
四つ辻で決断下したのは妻

照月 敏 重人 秋雄 一風 ダン吉 元紀 美花 かよこ 柳昌 まつお 信醉 さち子 保州 克子 輝子 諷云児 愿 射月芳 豊太 佐一 怜 和香 信子 裕美 富美子 あき子

四度目の正直信じられますか
北方の領土忘れていませんか
四コマのマンガもごとくに世相つく
豆腐切るサイコロに切るのひらで
笑顔ならどんな隙間も埋められる
甘い眠りのなかへ埋めよう春ドラマ
埋み火を消せぬ女の舞扇
司会者が上手に時間埋めていく
埋め合わせ高くつくよと妻の乱
語尾上げる妻には勝ったことがない
清廉潔白 語尾も動作も適切れいい
任せとけ語尾の強さを信じよう
語尾あらくきつとストレスためてはる
愛してるの言葉語尾まで軟らかい
言いわけの語尾をはかして見破られ

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

初節句みんな来い来い仲間入り
柳人だ初めて会って肩叩き
出来栄を褒められたのは初回だけ
帯締めて嫁が甘えて来てくれる
締め上げるだけで事件は片付かず
鍵締めて元栓締めて確かめて
泣き笑いシャワーを浴びて締めくくる
リストラで家計簿締める日が続く
締めるだけ締めて社長また変わり
締めて行くやつと食うだけこの年金
指図あれこれ喪服の帯を締めながら
小細工が過ぎて自分の首を締め

優子 三喜夫 鉄治 順子 大輪 寿子 泰子 紀久子 あつむ 英子 三男 正博 稚代 和重 千寿子 知香子 幸夫 見清 博子 玲子 英子 つえ子 和子 紫香 久太郎 寿美子 庸佑

宿浴衣外湯めぐりの低い下駄
百万円 十円ほどの利子所得

見栄を捨て低いところで丸く生き

なんやろかすりよつてくる低い腰

川下り頭を低うして船頭さん

細々と老舗を守る低い屋根

ここだけの話に声が低くなる

野仏の鼻の低さに安堵する

古時計 規則正しく遅れたす

魅力な切りを破りて締めてる帯の位置

一合半 規則正しく飲んでいる

入院患者 化粧をしてはいけません

ストレスを笑いとはして切り抜ける

リストラの兎に亀は気を遣い

とつときの魔法フィクションされた嘘

道祖神へみとりが匂う初夏の風

明日は明日今日は今日とて日が暮れる

八尾市民川柳会 宮崎シマ子報

八尾市民川柳会

宮崎シマ子報

快い世辞に骨まで抜かれてる

盃にお世辞も注いで花見酒

モナリザはきつとお世辞が下手だろう

空財布うまいお世辞はいつも浮いている

妻が言うお世辞はいつも浮いている

ブライドをまあるく捏ねて飲み込んだ

形を崩さないコロッケのブライド

だんこ鼻ぐらいのブライド持ってます

ブライドが三日坊主をやった

都代子

実

蛙

千里志

タミ

メ女

慶子

満寿蔵

周信

ことぶき

郁子

正坊

春

満寿巳

しげお

ただし

萬的

吉太郎

だん吉

ミツ子

ますみ

民

弘直

加津子

定男

きよみ

せつ子

ブライドをくすぐられ酔うのれん酒

ブライドを優先平和と一寸待て

どのように綴ってみても愚痴になる

綴り方で甲にも乙にもなる桜

母へ詫び綴るわたしの一行詩

にんげんの罫が戻るまで綴る

恋つづる愛を綴って一行詩

そつと咲く一輪草にあるドラマ

傷心とそつと見守る母が居る

出しゃばるなそつと袖引く妻が居て

総入歯かみつきさうでそつと置き

そつとして下さる想いにまた涙

リストラを母にはソツと打ち明ける

ガン告知されて平気なワケがない

ふつきた女平気でよく食べる

パイオフに関係はない懷手

川柳さんだ

北野

哲男報

四六時中したい放題して疲れ

農道を紋白蝶と散歩する

いすれ逝くいのち大事にしていこう

春が来たゆとりない身も花は見え

雪道を散りゆく花が通り抜け

夜桜がうんざりしてる人の波

月光に母に背いた事詫びる

年度初め老人会も忙しい

歳重ね方便の嘘上手なり

俺しつけ犬のしつけがなぜ出来ぬ

ライバルの手の内すでに読んである

晴夫

幸生

宏至

シマ子

弥生

年人

欣之

肇

ひさ乃

一風

東雲

頂留子

まさこ

祥一

千里

柳伸

千代子

歳子

朋月

哲男

藤朗

正和

ちあき

久恵

章子

忠

千代

キッチン荒れる模様靴をはく

サラリーマン模様眺めて疲れてる

落椿地面に描く花模様

誘ったのはお前誘われたのはわたし

川柳ふうもん吟社

杉本 孝男報

後がないならば総理にわしがなる

未知の地へアクセルふかし逢いに行く

浮き沈みしながら海へ流れゆく

水中花沈む運命に慣れました

転んでも起こさぬ愛へ気がつかぬ

助手席でアクセル気にもせず眠る

リストラで遂に財布は底をつく

ぐずる児もおむつ替えれば笑顔見せ

逢いに行く心アクセル強くなり

夕陽が沈む今日のドラマを閉じながら

この命後がないなど言わせない

改革は産声だけが後がない

落ちてます私を拾いたいのだが

後がない手の鳴る方へついてゆく

餌よりも安い卵で鶏ぐずる

時々壁に当って目を覚ます

後がない人生だから翔んでみる

少年はアクセルばかり踏みたがり

後がない首が会社社にぶらさがり

リハビリでアクセル踏める足になり

収入は年金だけで後がない

わが過去を沈めた穴に蛇がいた

アクセルに桜提灯間に合わぬ

敦子

俊昭

サクラ

柳宏子

洋々

圭一郎

鬼桜

忠良

美恵子

山節子

澤裕子

益子

昌鼓

雅女

保子

志げ緒

健一

喬水

悦子

一京

一瑤

美雪

茂登子

鐘旭

螢

公子

失敗も後がないから出来ません
別れだねアクセル強く走り去る
後がない訳でないのにしがみつく
アクセルをこたかしくつ生きて
沈黙の罰が一番手厳しい
後がない残りの暮し趣味に生き
修行僧沈思黙考板につき

川柳塔まつえ吟社

津川

紫晃報

よく笑うペンで私を困らせる
ペンだから心のうちが透かされる
残り火を燃やしてペンを走らせる
恋文にペンは思ひを知っている
フリーター転々としてペン冴える
気まぐれなペンが幸せつれて来る
出発の誓い時々つねられる
いざ出発花嫁さんの荷が動く
出発の夢つめ込んだ旅かばん
親離れ子離れせよとベルが鳴り
出発の間際に渡す角封筒
出発日プラスバンドに背を押され
妻の背に家族の味が沁みている
仕来りも簡素になった核家族
健康な家族へ今日の陽が昇る
家族です孫がいい顔しています
母さんの笑顔が家族支配する
団欒の家族へ猫も仲間入り
職業欄専業主婦と太く書く
職退いてからの毎日面白い

はつ江 春名 金祥 悦子 無限 のり代 孝男 久枝 俊一 昌枝 注湖 日出子 ちえこ 玲子 茂美 知恵子 与根一 政子 多博子 幸子 安キエ 邦代 多賀子 静恵 治代 多喜

肩書がとれて気楽に書く無職
リストラの穴を探して日が暮れる
履歴書に無職と書いて忘れられ
耳痛くなるほど辞職聞かされる
咲き誇る花それぞれに自負がある
タンポポがはつこり咲いて空へ夢
春電昔むかしの花も咲く
春の空花は咲くことだけ思い
今日は今日精いっぱい咲いて
咲き競う花屋の花は他人顔

岩美川柳会

石谷美恵子報

伸び切ったうどん結論まだせぬ
外にない食い道楽はわがいのち
背伸びして肩パッド入れ生きている
あれこれと悩む明日の道しるべ
私の影西に向って伸びる
死に病出たロボットからファックスファックス
父の樹が伸びて鉄が届かない
身勝手な鉄がいつも隠れん坊
証人席舌切り鉄置いてある
花が咲き花が散っては悩ませる
九十歳祖母道楽の毛糸針
ファックスが腸閉塞で唸つとる
そばが伸びちゃった女は良く喋る
祭壇へファックスを読む代理人
鉄より手取り早い糸切り歯
賞味期限伸ばす女の身嗜み
悩むのはよそっかしいな夕焼けだ

澄子 螢 すみこ 叮紅 松丘 義良 桂子 紫晃 忠良 孝男 一瑤 信之 和歌子 はるお 静生 重忠 大漁 一京 季芳 石花菜 一夫 睦子 よしえ 螢 圭一郎

道楽が三度の飯の上をゆく
嫁のない道楽息子でもあます
ファックスでカルテ薬局まで送る
求愛の蟹が鉄を振りかざす
武器にする鉄は持たぬ同い年
柵を切って刃こぼれた鉄
悩むたび縦皺一本ずつ増える
庭手入れ切れぬ鉄で息が切れ
山の木が立派に伸びて買手ない
悩むだけ悩んだあけく断わった
笑わせるピエロの背にもある悩み
父さんの趣味と道楽紙一重
伸び過ぎたワラビ拳は空だった

長柳会

加島

由一報

失敗は成功のもと大いびき
どん底を経験したら強くなり
さがしものしてたら妻のへそくりが
幸せをさがし求めて古希をすぎ
一大事女がみせる底力
探し物見付け飲んでる旨いお茶
本棚に昔の夢が詰まってる
神様が失せもの出すと嘘ついた
民謡は残り故郷ダムの底
底冷えに八重の桜も息をつき
底辺で生きてても夢は持っている
ご近所のネタ探してる嗜好き
最近ほ枕にしている愛読書
激安の穴場探しが妻の趣味

雅女 蟹郎 かつみ 和枝 しみ子 節子 公乃 喬水 たぬ 節子 裕子 希久代 美恵子 輝治 武男 もこ 輝子 正一 たけし ひろし 敬二 良男 英美 靖子 和代 由一 直樹

どん底に落ちて世の中見えてくる
親切へそと本音を折り曲げる
青春に二人で読んだ枯れすすき
ぐい飲み底で吠えてる志
へそくりをかくした本がわからない
しゃんとするネジは無いかと探してる
美しくなる本を今読んでいる
悔しさを収めて探す妥協点
どん底を知って大さくなる器
拉致されし子等よ故郷は花吹雪
本心を閉じこめたくて厚化粧
鍋底に母から続く歌がある

はびきの市民川柳会 徳山みつこ報

トップよりビリのゴールにわく拍手
腕組んで妻と二人で走るだけ
タンポポの綿毛と走る春或る日
走って走って窓ぎわの椅子にいる
卒業後の会う約束をしたまんま
国として卒業したい天下り
何かも卒業しました身ざれいに
握りこぶし空に突きあげ卒業す
塩の壺譲り主婦業卒業す
年頃を抱え悩みがまた増える
片意地を貫き通し悩む夜
言わぬだけみんな悩みは持っている
悩む事何もないのもまた悩み
ひと様の悩みを餌に占い師
本当の悩みは人に言えません

けい子 三和子 マサ 富美子 幸雄 芳野 正子 潤子 正美 和子 史 一慧 志洋 敏 美代子 重人 吐来 聡 フジ 泰子 絢子 獲香 敦子 一壺 利武 かつみ みつこ

核満載悩みは果てしない地球
ライバルの悩み親身に聞くゆとり
居酒屋で悩む男の一人酒
そこそこのレベルで生きてよしとする
レベルの違い見せつけられた冬五輪
昇
レベル以下の子が一番の親孝行
バソコンのレベル五歳の子が笑い
継ぎ足しのレベルでやつと人並に
付き合ひのレベル背伸びで火の車
心臓のレベルは妻にかなわない
大掻きのレベルで大海を語る
レベルには遠いが過大評価され
ワンランク背伸びしている蛙の子
同レベル終着駅に時差がある

岬川柳会 八十田洞庵報

正直に爪跡遺す一人旅
正直が迷路歩いた人生記
何一つ隠すことない今日が好き
色メガネはずして知った真つ正直
正直に言えば裁判早くケリ
良心に添って行動馬鹿覚悟
縁も無き億と言う金もて遊ぶ
縁結びの上司夫妻が別居とか
毎日の出合いが縁となる余生
絶縁を小出しにしている痴話喧嘩
決め球を知る相棒の好リード
流行のリードはミラノコレクション
楽団も指揮者で違う音色出し

ダン吉 庸佑 さとみ 昭平 久仁子 昇 久仁子 専平 たけし 章司 満寿蔵 一知 柳安子 りつえ 扶美代 和香 悦子 令子 和美 昌夫 茂平 桜琴 年子 里子 よし子 俣子 とみ

職離れ妻にリードをまかす日々
家つきの妻がいつでもリードする
あれこれとリードお好きな人がいる
リードする隙をつかれる痛い星
正直に生きて悔いない一徹さ
お願いね正しく書いて製造日
喚問は忘れまして幕になり
真相に裏がありません苦労する
川柳塔みちのく 小寺 花峯報
最後には神に縋ってみる迷い
電話ではぶつきた棒な人なのに
老醜を剥いてイメージアップする
世の中がどうあろうともさくら咲く
迷いながら叩きつけている罪
城壁を囲うさくらの指定席
○×でよい解答に迷ってる
進路に迷いやみくもに受験する
左遷地のイメージ北の黒い海
情熱を秘めてさくららのEメール
イメージと違ってくるに慣らされる
五十回忌に父のおもかげ薄くなる
妖艶な手まねき夜の糸さくら
内緒ごと一気にしゃべるオモチャ箱
一人っ子大に内緒の話する
本心を見抜いたように花吹雪
手鏡にいつわにかばう花がすみ
葉桜に恋する風の片思い
母さんが赤飯炊いている内緒

勝 洞庵 みつこ みやこ ユミ子 富美子 蛙城 鉄男 蛙痴郎 一光 きよし 大吾 ヒサ子 北歩 隼人 順風 慕情 銀波 ふさ 花匠 愁女 ツネ 井蛙 黙人 千加子 花峯 力力

絵馬堂の神も迷つた内申書

南大阪川柳会

吉川

寿美報

五楽庵

倅を書き足してゆく無地の画布

余生とや行書手本に生きている

生き甲斐になつてしまつた一行詩

余韻抱き未だ行方を追う未練

目を軽く閉じておとぎの国へ行く

荒行をこなして悟る滝しぶき

行くままに流れて水は世に尽くし

私は今が旬ですウエルカム

太閤が城の桜へウエルカム

裏木戸は開けてありますウエルカム

ウエルカムよう来んさつたと広島弁

ウエルカム絆温めるチマチヨゴリ

ウエルカム七福神が招いてる

ウエルカム甘い言葉に惑わされ

飲酒運転鬼があゝの世でウエルカム

流刑者の墓あゝ里へ向いている

流刑地の心やさしい島椿

絵馬がいま神のタクトに触れるまで

島流し佐渡に悲しい物語

運命を神に預けた絵馬の数

神様も絵馬の数だけ汗をかき

三浪の絵馬寒風にさらされる

故郷に明治生れの祖父の絵馬

えん罪の叫び届かず泣く流刑

無言の行とても晩まで持たぬ父

行く先はどうあるうとも飛んでみる

佐渡の金山流刑の涙染めた岩

流刑のように病院に送られる

行革を信じリストラに耐えている

ウエルカム笑つた陰で塩を撒き

雪が舞うのも忘れ花見酒

マスクして美人になつた花粉症

粉々になつて働く子が可愛い

粉々にくだけて散つたプロポーズ

粉砕をしような地球止める

不合格木の芽が伸びてやる気出す

待ちぼうけ色褪せてくる花時計

何事もがっかりしません処世術

サクラナルがっかりするな明日がある

子の邪魔にならぬ老後を心掛け

邪魔者になつた私の古軍笛

善人の仮面が邪魔になつてくる

税金は働くほどにむしろくれる

阪神が夫のお守りしてくれる

突き放す言葉の裏で詫言っている

ともすれば人の情けに触れる古い

新築の招待無人駅で降り

散り際も威風堂々舞う桜

神経痛が無神経な言葉はき

出る幕がなく老いの日向ぼこ

短冊を探して歩く通り抜け

六日の心も怒れば武器になる

ありがとうと言ふは流れが変わるかも

三男

久子

朝代

珠美

尚士

昭

さと美

富子

千梢

絹子

叔子

志華子

義

東雲

伽羅

正雄

久峰

照子

舞夢

蕉子

蛙

会美

靖巳

澄子

子の三浪花三月の狂い咲き

脳味噌のエアーポケット一大事

ひっぱて寄せて持ち上げ若返る

一かバチかあり金全部株を買う

一流がこけて三流しやしやり出る

小説のあとがきだ流しは読んでみる

私小説書くか決心まだつかぬ

ラブストーリーギブスベッドで二百枚

寄せ植えのパンジー達がよくしゃべる

頼末を貝殻節に唄い込む

貝殻節がうまくなり夏来る

労働歌貝殻節は塩辛い

のど自慢貝殻節で落ちました

ああ音痴貝殻節が浪花節

子に見せる一途な背を張っている

海風いで寄せては返す母の唄

小説を点字で読める幸を抱く

花便り突如一挙に押し寄せる

殺人鬼小説ならばなりきれ

火葬場の煙いちはん美しい

年金の暮しに寄せる不況風

温もりのある家だから人が寄り

窓際にテーブル寄せて光食う

かわいやの美女が舟漕ぐ欠伸する

一にドライブ二に詩にふけり庭いじる

不景気な波は寄せるな沖に去れ

一も二も昔は姑立てたもの

倉吉川柳会

竹信

照彦報

恭昌

次男

石花菜

季芳

よしえ

賀寿恵

かつみ

宗光

智子

玲坊

螢

和枝

一夫

(前)喜美子

康子

睦々

雄々

泰輔

信之

和歌子

ゆり子

(西)喜美子

和子

十三男

重忠

志郎

日出子

都合よく小説みたいにかくいかいな
耳と口寄せてはいるが聞こえない
沸点の違う女がボルノ書く
一番に咲く花一番先に散る

川柳クラブわたの花 吉村 一風報

気まぐれな天気になだまされる
掃除機が頭にひびく二日酔
されいだが蝶は無視する造花です
ささやかなブライド持つて好きに生き
独りでも平気平氣と里の老母
なあマルちゃん不満すべてを猫に言う
春はまだ家に二浪のいるかぎり
エライ人平気な顔で嘘をつく
耐寒の梅一輪にひかる露
浪人の苦手は母の嘆き節
いつからかラブの綴りを忘れてる
世界一涙で飾る金メダル
のり越えた勝負に挑む玉の汗
親と子がそろい浪人この不況
ジんクスを信じてくれないこの指輪
やさしさにぞつこん惚れて五十年
陽たまりで挑む話は消え失せる
縊り戻す一念で買ひやげもの
ドミノ倒しそと触つただけなのに
ブライドが半値バーゲンに負けました
政治家は平気どうそが言える人
ぎつしりの予定こなしうまい酒
背かれて独り暮らしの郷の母

悠子 瑛子 忠良 照彦 まさこ 春江 知佐子 美代子 民子 明 八寿子 彌道子 宏至 ミツ子 道子 君江 春子 春風 幸枝 隆盛 晴美 俊子 恭一 奈良司 友甫

宗男劇ライオンそつと首すばめ
ブライドをさらって行った賞醒劑
三浪も今じゃ親よりハイレベル
芽ぶき見て散りゆく桶のいさぎよさ
しんそこら妻を愛してダイヤ婚
善よりも悪い見本が役に立ち

富柳 池 森子報

振り向けば辛かったのも一瞬だ
二階から口笛春が来たらしい
おぼろ月今日は私についてくる
仕舞い風呂今日の笑いを噛みしめる
だましよい男へあげる黍団子
赤い実がボトリと落ちて過去になる
可能性今階段を降りてくる
唐辛子かけて騙しを企てる
国会に嘘発見器要りますね
隣より美しい花植えている
夢覚めた湯舟で聞いた泡の音
一冬のいのちを生きてきた蟻よ
桃色足りぬ言葉抱きしめる
絵手紙の短い言葉抱きしめる
絶景の夕日に明日を組み立てる
騙された罌でしばらく死んでおく
番茶から玉露に変える奥座敷
ピカピカの一番星を道連れに
尾を振らぬ男長所でもた短所
胸襟を開いて明日を切り拓く
たましいを根こそぎ洗う一行詩

正純 一 道 正 浩子 かなこ 文子 洋介 吞舟 美代子 扶美代 タキ 昭水 一夫 奈保美 和子 アキ 紅紫朗 登朗 花梢 惠勇 誠 年人

近く時を想うひとりに風の音
風花の初めは軽ろき片想い
正直に受止めすぎで馬鹿をみる
友情の波た再起を押し上げる
ピンク色の涙を拭いて騙される
立春の立ち卵です青春譜
騙す目を信じてしまふほど一途
強情は月かわたしか白みゆく
視野は今春だと思ふ有頂天

うぶみ川柳会 上田 宣子報

三人も役者の首が切りとられ
留守電にしましたハハハひる寝中
ハハハハ冬の扉を押し開く
ワテンポ遅れて下座からアハハ
哀しみを太らせてゆく小糠雨
一人だけ欠けた役者に寒い膳
胸張つてアハハと笑う再生紙
地番変更人情までも変わり出し
あの声はハハハ猫にも春が来た
向こう岸流れる葦よハッハッハ
馬鹿になる役者がとても難しい
五輪から春一番がやつて来た
わたくしが主役平成の時代劇
言うことが無くていてるハハハハハ
ハハハハハハハハハハハハハハハ
太つとくやがて病む日の蓄えに
太つてるだけヨ懐火の車
太るって性格までも変りそう

初太郎 春蘭 宏至 信子 帆雀 高栄 欣之 萩乃 森子 天雀 よしえ 美ツ千 静生 完司 ひろこ 一枝 黙光 和枝 雄人 睦子 登美枝 登 ユリ子 也恵 重忠 芳江 和

大樹ほど地球をしかと抱いて立つ
温い陽へ地からもぐらも顔を出し
スタコラと心の鬼も逃がした春
宴席の役者と妻は知らなんだ
ご期待へハハハあひるの卵かも

川柳塔打吹

米田

幸子報

いんちきがつい出てしまふ怖い癖
オホホホまんちゃんめいた風に逢う
まんちゃんらの木にまんちゃんらの花が咲く
婆ちゃんが炬燵を負って這いだした
赤ちゃんがへそをすりすり這いまわる
甘い香の裏にしたたかバラの罨
這いまわる虫に個性が見つかった
抹茶に酔ってお布施を出しすぎた
這ってみて歩ける足に感謝する
本堂で這いつくばって手を合わす
久しぶり田舎香水春を知る
正直に影はこの世を這って生き
這ってみて吾子の視線に気付かされ
底辺を這ってやがての夢を見る
まんちゃんらの爆発したい肉野菜
まんちゃんらを見て見ぬふりをする勇氣
まんちゃんらも可愛い妻にはれている
折角の好意すんなり受けようか
腹這いで本読むふりをしてるだけ
指切りはまんちゃんらだったあの時は
春の雪天の好意と受けとめる
竹竿に好意の品が提げてある

くにお
華子
あづま
天人
宣子
勝見
忠良
美ツ千
重忠
禎元
博丈
和子
友楽
久芽代
京子
貴恵
克枝
順子
和枝
龍枝
善江
一夫
芙美子
照彦
きみ子
睦子
螢子

這ってでも俺の始末は俺がする
若い芽の方へ毛虫が這って行く
御好意の院号お断りをする
まんちゃんらをしてから夜が眠れない
宙を這うクモよ私は無能なり
みぞおちに好意を溜めて逢いに行く
なめくじの跡をたどれば御本尊
這ってでも行かねばならぬ義理がある

横浜おおば川柳会

清水

潮華報

薬より何倍も効くやさしい手
転勤の無い窓際で生き字引
挫折したことをくすりに今は覇者
顔末を話すと誘う縄のれん
パソコンの故障で孫が駆けつける
新人がお局に訊く社の事情
裏道に長けて荒波泳ぎさる
新薬の効き目気になる副作用
電車好き地図が広がる子の頭
堀の中六法全書友になる
輪の中に情報集め入れておき
薬だと親の意見を苦く飲み
新薬の犠牲にされるモルモット
病状を言った数だけ出る薬
土地の人先生にして寺社巡り
その先を聞きたい銚子追加する
フルコース最後にくすり飲み終える
放送の邪魔をしている解説者
馴れ初めを根掘り葉掘りの披露宴

石花菜
よしえ
かつみ
孝恵
和歌子
雄々
芳光
幸子
道子
裕峰
良子
広和
雅子
政勝
純子
鈴美
笑子
八重子
ふみ
早智
絹子
和可
亜希子
徳三
あかり
二郎
かず枝

川柳藤井寺

高田美代子報

ペイオフに詳しいさては持つてるナ
今ならば特効薬で生きている
花咲いて二十歳の夢が膨らむ日
一億円当った夢に飛び起きる
好きやねん夢の中なら言えたのに
口喧嘩すれば一瞬消える夢
駆けて来た余生に新たな夢希望
市長から長寿の賞をもらう夢
夢掘って掘ってあしたへ手を伸ばす
和解して今フルムーン夢のよう
三月の空へ大きな夢を描く
膨らんだ夢はめざめた時割れる
三文の徳などいらぬ朝寝坊
三男坊要領だけは兄を越え
風邪三日家事する夫手を荒らし
三流の暮らしに慣れたなべつかみ
幸福は三度の飯とカラオケと
三面鏡心の髪へ辿りつく
釣書には三年若い写真添え
三面鏡女に三つ顔がある
落ち着いて話聞いている第三者
終着駅ハッピーバーンが残す影
黒澤の影で野武士が沈んでる
ええ歳で千と千尋に泣かされる
羅生門 男三船に魅せられる
太秦のチヨイ役今は旅役者
告白は映画の余韻残る道

街 潮 雅 栄 志 ア 喜 重 和 大 み 瑠 恵 登 利 ア 龍 扶 絹 悦 終 一 鐘 一 知
華 枝 一 洋 ヤ 代 人 樹 八 つ 美 子 武 キ 一 美 歌 子 一 造 筒

人間に飽きて千尋の神隠し
女の一生映画の主役わたしです
残り香のままに畳みぬ花衣
程のよい法螺も愛嬌飲み仲間
春だもの死ぬる話はするでない

堺川柳会

河内

月子報

目覚ましを二つ付けても朝寝坊
海藻の中なら僕も擬態する
昆布ゆらゆら行く末を考える
封筒にたのしい夢を詰めてだす
スタートはラジオ体操うまいめし
振りむけばだれも後もついてこず
胃カメラがまさかの証拠突きつける
味噌汁をお美味してる妻の乱
抱負聞きや十二球団皆優勝
夫婦喧嘩たまに來た母妻につき
朝市のおばちゃんに聞く料理法
スタートは朝ドラさくら浜んから
フルムーン楽しげなのは妻ばかり
ふところに溜まるストレスつまみ出し
海藻の森で芽吹いている生命
海藻は海の汚れを知っている
幸せにひとりの朝のワンパターン
朝の気を一ぱいに吸い悪を吐き
瘋癲の旅は和泉の津久野から
昆布煮る愚妻の顔が亡母に見え
海藻のとれる穴場は教えない
快調のエリートコースが青テント

六 点
昭 子
春 蘭
史 郎
美代子

龍 三
つづや
みつこ
泰 子
りつえ
篤 子
恵 勇
千 代
忠 敬
冬 虹
俣 子
朋 月
加 羅
日の出
五 月
玄 也
小 雪
文
哲 平
さだを
洞 庵
八 千代

二人して耐えた日の事つい忘れ
阪神が快勝朝が爽やかだ
世の中はまさかと背中合わせだな
フィアンセがためらいなが付いて来る
そして朝わかれ味噌汁卵焼
ふたりならまさかの危機も越えられる
あの男まさかオカマと知らなんだ
不意に來てたつぶり叱言告げて去に

川柳塔おとし

原 みさを報

しょうゆ味だけでおいしい冷や奴
率直がいいのかどうか癌告知
率直な言葉この人信じよう
責任をとる珈琲のストレート
ひと言の隙も与えぬ直球だ
ストレートに卒業したが椅子がない
君の愛僕の心にストレート
平凡な暮らし求める葱坊主
求めには応じ切れない神の耳
救援の物資求める手が細い
銀髪も結んでほしい赤い糸
子が親に求める愛は真っ白い
求めること両手にあまし多忙です
温もりを求めて任地から戻る
政界に求める声は改革だ
政治家に求めることが薄らいだ
朝に目が覚める保証はない明日
蠟燭の八十本が証明書
自分史の証昭和の彩で書く

梓
甚 一
かりん
舞 夢
なきさ
さくら
東 雲
柳宏子
艶 子
羅 奈
彰 雄
螢
憧 子
清 子
俊 幸
雄 々
舍 人
風 花
幸次郎
宏 章
大 鯨
和 子
小 生
仁 子
ひかり
登 美

雨あがる大きな証 虹が立つ
生きて來た証が未だ何もない
生きていた証に嘘もついてる
父親としての許可証まだ出ない
幸せの証 晩酌欠かさない
口べたで愛の証と肩を揉む
川柳で生きてる証書き留める
うぐいすに裸盗られるひなびた湯
遅れ咲く桜に人の影もなし
温泉のいやし素直に効いてくる
連山は墨絵のように雪残し

義 弘
由 多
孝 子
真 一
黙 光
道 二
庸 二
愛 恵
水 楊
邦 昭
富貴子

第六回川柳展望全国大会

日 時 7月28日(日) 10時30分開場
場 所 マリエ・ド・クール空港(ベルク
ラシック) 池田市空港1-12-8

参加費 2000円

席題の選者 「猿」 井上 信子選
宿題と選者 「愛」 赤松ますみ選
(各題2句) 「椅子」 笹田かなえ選
「入」 土橋 螢選
「増」 鈴木 公弘選
「息(呼吸)」 中田たつお選

「自由吟」 金築雨亭・新家完司
佐藤佐俊・和泉香・天根夢草各氏共選
(自由吟は各選者に連つ句を出す・各題2句)

出句締切・12時 懇親宴・大会終了後行つ
事務局・331 叡能町ときわ台3-4-17

TEL0727-38-1845

第5回鳥取県川柳文芸大会

日時 7月14日(日) 午前10時開場

場所 新日本海新聞社5F(鳥取駅歩3分)

お話し 竹内道夫氏(郷土史家)

題と選者 素手・小池しげお・ロマン・内田久枝・面倒・中村和・原色・門脇かず

お・すつかり・最上和枝・細い・鈴木公弘・絡む・夏目健一・枷かせ・小谷孝美

席題なし・各2句・11時30分締切

会費 2000円(軽食・大会誌呈)

欠席投句 1000円(大会誌呈)

表彰 1句1点、総合点上位10人に呈賞

欠席投句 締切7月8日(当日消印有効)

用紙自由、宛先〒105鳥取市東

大路64 両川洋々方

TEL・FAX(0857)51-8416

第5回鳥取県川柳文芸大会事務局

宿泊 ニュー鳥取ホテル 6000円程度

申込先 大会事務局 6月末まで

主催 鳥取県川柳作家連盟

第1回寺尾俊平賞作品募集

川柳塾創設者寺尾俊平の句業を顕彰する目的で寺尾俊平賞作品を募集いたしますので応募いただきたく御案内申し上げます。

募集 5句1組(未発表句)

雑詠

選考 橋高薫風、細川不凍、八坂俊生

石部明、岡田千茶

選考方法 特選5点、佳作3点、入選1点

の合点で成績順位をさめる

投句締切 6月30日必着

賞 俊平賞1名、選考賞5名(各選者の特選、優秀賞若干名)

発表 10月頃塾誌上 発表誌呈

投句料 1000円(定額小為替)

用紙自由(郵便番号、住所、氏名、柳号、電話番号明記のこと)

主 川柳塾

投句先

〒100 岡山市新屋敷町3-15-2

船越洋行 電話086-241-3358

川柳塔みちのく15周年記念句会

とき 7月14日(日) 正午受付

ところ 弘前プリンスホテル

弘前市駅前1-3-4

TEL 0172-331-5000

会費 4000円(懇親会・記念品・発表誌)

宿題と選者(各2句詠 欠席投句拝辞 席題なし)

「森」 千島 鉄男選

「塔」 加藤 彩人選

「みちのく」 西谷 東山選

「楽しい」 千田 和美選

「湖」 西山 金悦選

「情熱」 杉野 草兵選

賞 ①合点20位まで

②各題の天位句の中から次の選者により1句を選び、15周年記念大賞として「五葉庵賞」を贈呈します

選者 橋高薫風・河内天笑・西出楓楽の各氏

宿泊 弘前プリンスホテル(泊朝食付6500円)

各自でお早い目にご予約下さい

連絡先 小寺 花肇まで

〒0368171 弘前市取上5-9-10

TEL&FAX 0172-361-5526

付記 希望者には白神(十二湖)観光案内を予定

柳界展望

97名の参加を得て開催された。当日の本社関係者天位。最大の力を溜めている白

紙 高田美代子

正直な人を忘れていない

天 新家 完司

へ新日本海新聞社賞

にんげんの臭いが鼻に付

いてくる 鈴木 公弘

■小川注湖氏(同人・松江

市)は、山陰中央新報3月

30日の地方経済欄に「大食

い競走を嘆く」と題し、川

柳を引用して執筆。今後七

人交替で掲載される。

■河内月子さん(堺市・常

任理事)は、『川柳春秋』

(NHK学園4月1日発行

65号)に、「わたしの柳号

由来」を執筆。

★『番傘』6月号リレー放

論に田中正坊氏(参与・豊

中市)が「老人文芸 ええ

じゃないか」と題して執筆。

★第2回春はくろぼこ川柳

大会は、4月21日気高町堂

国民宿舎「貝がら荘」で、

福島県の大貫しげる氏の作
品が文部科学大臣奨励賞に
決定した。

点滴を追い越してゆく流

れ雲

▽人事往来△

■薫風名誉主幹は、川柳会

梨花吟行会選者として4月

19日鳥取行。楓楽副理事長

ほか同行。

▽柳号変更△

■西村哲夫氏(同人名簿16

ページ)は、哲夫(てつお)

を哲夫(てつお)と変更。

▼計 報▲

■石原伯峯氏(ひろしま川

柳会会長)は、4月18日自

宅の火災により逝去。81歳。

20日東広島市の西品寺で葬

儀が行われた。

■里小路氏(参与・寝屋川

市)は、4月22日病気のた

め逝去。享年90歳。故人の

遺志により24日の葬儀は親

族のみで行われた。

■第7回全国川柳作家年鑑

新同人紹介

小こ いまふ 泉 ひさ乃の

公一・楓楽・典子推薦

参加作品募集(ふあうすと

川柳社)所定用紙あり 作

品7句・新旧いづれも可

参加費3千円 締切6

月30日 9月下旬発刊予

定。投句、問い合わせ1

654-0151神戸市須磨区北落合

4-28-12 長島敏子宛

TEL・FAX 078-793-13

641 郵便口座0096

04-6151516 全国

作家年鑑 長島敏子

■あおり春もみじ(紅葉

川柳コンテスト 応募規定

1 青森県の春もみじに関す

る句に限る 官製ハガキ1

枚に1句(何枚でも可・未

発表作品・住所、氏名、年

齢、職業、電話を明記)

6月30日締切 選者 福岡

竜雄ほか4名 賞1特選1

点(賞状、5万円)ほか

問い合わせ1 030-8570 青森

市長島1-1-1 青森県庁

文化観光推進課内(社青森県

観光連盟 電話017-7

22-5080

■5月常任理事会5月1

日 ①900号記念大会準備

完了報告(各担当者から)

②臨時同人総会提出の規約

改訂部分再確認 ③新役員

補充並びに移動の最終検討

④第8回川柳塔まつり前準

備、二賞募集準備 ⑤同人

1名承認 水煙抄・茴香の

花選者交替の件

▽常任理事会△

■6月3日(月)13時から

アウィーナ大阪206号室

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
城 北 川 柳 会	15日(土)午後1時から 水・呼ぶ・ストレス・自由吟	中宮老人憩いの家 地下鉄千林大宮駅2号出口徒歩8分 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-8 神夏磯典子
川 柳 会 梨 花	15日(土)午後1時から 情報・漫画・胸・クズ・自由吟	鳥取市勤労者総合福祉センター1F会議室(鳥取駅南) 〒680-0841 鳥取市吉方温泉4-268-205 宮木方 坂田和歌子
岸 和 田 川 柳 会	15日(土)午後1時半から 月並み・適切・正面・和やか	市立福祉総合センター2F 南海線岸和田駅東歩3分 〒596-0827 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
川 柳 ねやがわ	16日(日)正午から 半ば・財産・上役・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前下車 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
岬川柳会	16日(日)午後1時半から 暗い・じっくり・口当たり 自由吟	岬町 みさき苑ふれあいセンター 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川 柳 会	17日(月)午後1時から 受ける・苦しい・真珠・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅南東歩5分 〒561-0826 豊中市島江町1-3-5-801 田中正坊
高槻川柳 サークル 卯 の 花	20日(木)正午から 残念・てきぱき・腕 更年期・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩7分 〒569-1142 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児
東大阪市 川 柳 同 好 会	22日(土)午後6時から レベル・届く・包む・港	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3-3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	23日(日)午後1時から 偽る・グラス・うろうろ 「感激」	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	23日(日)午後1時から 禁・当然だ・ダウン	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0033 鳥取市二階町3-102-2 植田一京
京 都 塔 の 会	24日(月)午後1時から 銘・だるい・訂正	ハートピア京都 地下鉄丸太町駅南改札⑤番出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区弁財天町328 都倉求芽
川 柳 塔 みぞくち	24日(月)午後8時から 昼寝・蛍・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県日野郡溝口町溝口757-3 小西雄々
南 大 阪 川 柳 会	26日(水)午後6時から 壮絶・渡・ノート・豊満	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造駅西徒歩3分 〒543-0012 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川柳クラブ わたの花	28日(金)午前10時から ライバル・押す・さまよう・痛切	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6629-6914)へご連絡ください。

6 月 各 地 句 会 案 内

(開催日順)

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
富 柳 会	1 日(土)午後 1 時から 六月を詠む・重い・自由吟	富田林中央公民館 (近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m) 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 池 森子
倉 吉 会 川 柳 会	1 日(土)午後 1 時から 池・変装・泳ぐ	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡大栄町由良宿2072-17 谷口次男
川 柳 塔 な ら	6 日(木)午後 1 時から 小言・潮・英語	船橋フロムワン (船橋商店街内) 近鉄奈良駅西へ7分・JR奈良駅北徒歩5分 〒636-0144 奈良県生駒郡斑鳩町稲葉西2-4-23 中原比呂志
尼 崎 いくしま	7 日(金)午後 1 時から 人生・花嫁・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3 F 阪神尼崎駅南西徒歩5分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 唐津支部	7 日(金)午後 1 時半から 平和・コップ・再び	唐津市 栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517-13 宗 水笑
川 柳 塔 打 吹	8 日(土)午後 1 時から ほたえる(自惚れる) 逞しい・愚	倉吉市上灘町 上灘公民館 〒682-0805 倉吉市南昭和町21 野口節子
川 柳 塔 ま つ え	8 日(土)午後 1 時半から 雨・茶漬け・騒ぐ	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木9-23-22 三島松丘
川 柳 塔 みちのく	8 日(土)午後 4 時から 姿・捏ねる・好奇心	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ2階「川柳道場」 〒036-8002 弘前市元大工町50-5 波多野五楽庵
八尾市民 川 柳 会	9 日(日)午後 1 時から バランス・打つ・しみり 視界	山本コミュニティセンター内3F学習室 (近鉄山本駅) 〒581-0845 八尾市上之島町北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 わかやま	9 日(日)午後 1 時から 六・予告・キャンセル うんざり	近鉄カルチャーセンター 2 F JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	10 日(月)午後 1 時から 折る・自転車・すべて・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町2-19-515 山本義子
ほ たる 川 柳 会 同 好 会	11 日(火)午後 1 時から 辞退・大将・捻る	豊中市立養池公民館 阪急・モノレール養池駅西へ150米 〒561-0864 豊中市夕日丘1-7-5 田辺正三郎
尼 崎 尾 浜 川 柳 会	11 日(火)午後 1 時半から 明らか・刻む・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 阪急武庫之荘北口から市バス⑧番尾浜2丁目下車 〒661-0976 尼崎市潮江5-2-47 田辺鹿太
堺川柳会	13 日(木)午後 1 時から 軽い(共選)・安心 したく(折り句)	堺総合福祉会館 2 F 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑

編集後記

☆九〇〇号記念川柳大会は、同人・誌友はもとより、友好柳社の方々も多数ご参加いただき、盛り上げて下さったことを厚くお礼申し上げます。

☆こうした大会を開催する時は、何度も運営のための会合を持つのだが、終ってみると反省点が沢山出てくるのが実情である。行届かなかったところはお詫びし、皆様の建設的な意見をお待ちしています。

☆終了後は引続きに編集部が大わらわとなる。5月4日という日程は6月号に入れたためにはギリギリで、原稿をお願いした人には待たなしで執筆いただいた。ご協力厚くお礼申し上げます。写真を出るだけ多く載せるようにした誌面か

ら、盛会の様子を汲み取っていただけたら幸いである。☆4月10日の朝刊をみて驚いた。「公社化の負担になるため、第3・4種郵便割引廃止」とある。ご存知の通り本誌は第3種認可を受けている。廃止になればこの6月号の送料を例にとると20円となり、全号に渡って倍以上のアップとなる。これではとても経営が成り立たない。政府は文化、福祉、学術活動を潰す気か、何のための公社化、と腹が立つやら情けないやら。この現実をどうしようかと頭の中はパニックであった。

☆それから一週間後の4月17日の新聞をみてホッとした。前記の案は制度対象の障害者団体や、自民党総務部会の方針を受け廃止は廃止になったという。税金の無駄遣いを平気でしているくせに当然でしょ。(ふ)

ひとこと

道端の句

「もったいないを拾って生きる」この句の作者、安純(やすじゆん)さんは天王寺公園近くの路上で野宿する人で、以前は日雇労働をしていたが不況で仕事も無く、四年程前から自分の句集を売って生活するようになった。こうした俳人、詩人が釜ヶ崎や東京の山谷に少数だがいるそう、中には出版社から句集を出す人もいるとのこと。ちなみに彼

の句集はすべて手製で一冊五〇〇円。最近は何集の売れ行きがよく、気持が充実してきたせいか、自分の句が出来ないと悩んでいるらしい。山頭火が好きで憧れている彼なので、ふらりと貴方の街へリヤカーを引いて現れるかも知れませんよ……。

「川柳は吐くもの」と言う言葉
を彼の句で実感している。

(鶴田 遠野)

○「声に出して読みたい日本文語」(草思社)がロングセラーになっている。著者齊藤孝によれば「ただ目で黙読するというのはなく、大きく声に出して読み上げていくべきだ。ここにとりあげたものは、日本語の宝石です。暗誦、朗誦することによって、日本語の宝石を身体の中深くに埋め込み、生涯にわたって折に触れてその輝きを味わう」

「最高の文章を型として身につける」と自画自賛する。○この本には古典、漢詩、詩歌を初め落語の「寿限無」や「生麦生米生卵」の早口言葉まで収録され、俳句は一茶・蕪村・子規の作品が採用されている。残念ながら川柳は採用されていない。○私が今、一番朗誦したいもの。「六甲おろしに颯爽と蒼天駆ける日輪の……」タイガースの応援歌である。

(朱)

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「

」発表（8月号）

地名

姓・雅号

きりとりせん

◎ 8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。



作品募集

8月号発表(6月15日締切)

川柳塔(8句)	河内天笑選
水煙抄(8句)	板尾岳人選
愛染帖(3句)	波多野五葉庵選
茴香の花(3句)	宮西弥生選
吟題課題(3句)	「平和」
「再」	「コッブ」
「笑う」(3句)	吐田公一担当

9月号
課題吟「小説」「ライン」「この頃」
初歩教室「ペット」

本社6月句会

とき 6月6日(木) 午後5時半・6時半締切
ところ アウィーナ大坂 4階
天王寺区石ヶ辻町19-12 電06・6772・1441
地下鉄谷町9丁目徒歩8分・近鉄上本町徒歩3分

兼題 「まだ」
「物」
「磨く」
「困る」
「有名」

席題 1題 当日発表(各題2句以内)
会費 1000円 投句料 500円

河内天笑選 川島諷云児選 大内朝子選 玉置重人選 福井桂香選

路郎忌 本社7月句会 7月8日(月)
兼題 「のびる」「友」「だます」「凡人」「弟子」

夜市川柳募集

第1回「輪」 川上大輪選
ハガキに3句 6月末締切
投句先 〒593-8305 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌最終ページの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・茴香の花欄・一路集(課題吟)および初歩教室への投句は、同人・誌友に限り、川柳塔柳箋を使用してください。ただし茴香の花欄は女性だけ。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

定価 八百円(送料84円)

半年分 五千円(送料共)
一年分 九千八百円(同)

二〇二二年(平成三十四年)六月一日発行

編集兼 発行人 河内権治
印刷所 美研アート

〒545-0005 大阪府阿倍野区三好町二一〇一六
ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 〇六六九一四番
振替 〇〇九八〇一五・一三三六八番

第17回 国民文化祭・とつとり2002年

夢フェスタとつとりーふるさとふれあい夢づくりー

応募受付期間 4月1日(月)～6月28日(金) 当日消印有効

応募規定 未発表作品 各題2句

題と選者 小・中・高校生の部(事前投句のみ)

「砂」	佐藤良子	選
「ふるさと」	鈴木泰舟	選
「学ぶ」	手嶋吾郎	選

事前投句(一般の部)

「砂」	黒沢かかし	選
「ふるさと」	竹本瓢太郎	選
「学ぶ」	本庄快哉	選
「鳥」	河内天笑	選

当日投句「果物」	木野由紀子	選
「輝く」	新畑ひろし	選
「静か」	荻原柳絮	選

第二次選者(順不同 敬称略)

仲川たけし	吉岡龍城	今川乱魚
磯野いさむ	橘高薫風	

応募料 1000円(海外投句者・小・中・高生は無料)

郵便振替口座(01350-6-66243、加入者名一第17回国民文化祭鳥取県実行委員会)を利用してください。

応募方法

- ・所定の応募用紙に必要事項を記入し、郵便振替受領証またはそのコピーを添える。
- ・封筒の表には「川柳作品」と朱書きして下さい。
- ・川柳大会への参加の有無を記入。

応募先 〒689-0405 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1517
国民文化祭鹿野町実行委員会事務局「文芸祭」川柳係
TEL 0857-84-2299 FAX 0857-84-2598
インターネット可(応募料必要です。お問合せ下さい)

賞(予定) 文部科学大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・鳥取県知事賞・第17回国民文化祭鳥取県実行委員会会長賞・鳥取県教育委員会教育長賞・鹿野町長賞・第17回国民文化祭鹿野町実行委員会会長賞・鹿野町教育長賞ほか

入選発表・川柳大会 10月26日(土) 10:30～15:40

鹿野町立鹿野小学校体育館

〒689-0405 鳥取県気高郡鹿野町大字鹿野2888 TEL 0857-84-1100

入選作品集は、一般の部の応募者全員に、小・中・高生の部は入選者に無料配布します。

問い合わせ 上記応募先に同じ。用紙も応募先へ請求して下さい。

主催者 文化庁・鳥取県・鳥取県教育委員会・鹿野町・鹿野町教育委員会・
(財)全日本川柳協会・鳥取県川柳作家協会・
第17回国民文化祭鳥取県実行委員会・第17回国民文化祭鹿野町実行委員会